

三 谷 遺 跡

— 徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査 —

1997. 3

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

三 谷 遺 跡

— 徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査 —

1997. 3

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

卷頭 1



調査地遠景（東方に城山を望む）

卷頭 2



自然凹地SX02-1 動物遺体（イヌ）検出状況



自然凹地SX02-1 動物遺体（イヌ）検出状況

北より



自然凹地SX02-1 動物遺体（イヌ）検出状況

北より



自然凹地SX02-2 動物遺体（イヌ）検出状況

南より



自然凹地SX02-2 動物遺体（イヌ）検出状況

南より



自然落込SX03

西より



自然落込SX03 動物遺体（イヌ）検出状況

西より

序 文

万葉の時代から詠まれた眉山、その北麓は徳島市内でも埋蔵文化財包蔵地が密集する地域であります。中でも、東に位置する三谷遺跡（佐古浄水場遺跡）は、弥生時代の古い段階から集落が営まれた遺跡として、1924年の土木工事に伴う発見以来、存在は周知されながらも、不明瞭さだけを現在に残してきた遺跡です。

1990年に始る発掘調査は、発見時におぼろげに見えた遺跡の姿をより明確にさせる契機となりました。縄文・弥生時代の遺跡としてではなく、古代から中世にかけても存続していた集落遺跡としての認識が今後必要とされます。また貝塚の発見は、徳島市では1922年の鳥居龍藏による城山の貝塚調査以来70年ぶりのことであり、非常に貴重な成果をあげています。

しかし三谷遺跡の調査は端を発したばかりであり、遺跡の全容解明に向けて、今後も数多くの調査が必要とされます。

今回、ここに発掘調査の成果を報告書として刊行する運びとなりました。本書刊行におきましては、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、活用の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の刊行に対し、全面的な協力を得ました徳島市水道局に対しまして、深く感謝を申し上げます。

1997年3月31日

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

委員長 岩崎正夫

例　　言

- 1 本書は、平成2～3年度に徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会が、徳島市水道局拡張事業である徳島市佐古配水場施設増設工事に伴い、徳島市水道局の委託を受け調査した三谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は平成2年9月15日～平成4年3月31日までである。
- 3 工事対象面積は3,000m²、発掘調査面積は2,700m²である。
- 4 発掘調査に伴う図面、写真、遺物、遺物台帳は徳島市教育委員会が保管する。
- 5 調査地の図作成の一部は国際航業株式会社徳島営業所に委託し、個別の遺構実測は調査担当者の勝浦康守のほか、黒田卓、青木健司、齊藤浩二、三間忍、中西和寿、浜直樹、須原義仁が行った。また出土遺物の実測は山口文子、折野絵美、佐藤智恵、勝浦が行い、拓本は黒田、山口、折野、佐藤が行い、清絵は中野勝美、青木、勝浦が行った。
- 6 遺構の写真撮影は航空写真は国際航業株式会社徳島営業所、個別の遺構写真撮影は勝浦が行い、遺物写真撮影は中野、勝浦が行った。
- 7 貝塚出土の7体のイヌについては切り取り作業を行い保存処理を施した。保存処理については、2体を財団法人元興寺文化財研究所に委託、3体は徳島県立博物館学芸員魚島純一の指導・協力を得て勝浦が行った。なお2体については標本処理扱いとした。
- 8 本書の執筆・編集は勝浦が行い、木村早苗（元徳島県埋蔵文化財センター）に玉稿を賜った。
- 9 発掘調査および整理作業に伴い、次の方々に御尽力いただいた。文末ながら記して感謝の意を表します（敬称略）。

岩本芳和 山口良一 盛 喜八 佐藤一二 藤井義宣 正木マサエ 大田アサエ
宮本美子 坂本貞子 齊藤ユキ 森岡太郎 鈴木 寿 山本静香 青木健司
齊藤浩二 三間 忍 中西和寿 浜 直樹 須原義仁 長谷久和 山口文子
折野絵美 佐藤智恵 山本宗昭（以上 調査補助員）
黒田 卓 中野勝美（以上 調査員）

- 10 出土遺物の内、自然遺物については分冊にて報告するものとする。

目 次

卷頭図版

序 文

例 言

本文目次

I 調査経過.....	1
II 基本層序.....	2
III 調査概要	
1 第3層上面検出遺構（第1遺構面）.....	11
(1) 土 壤.....	11
(2) 溝.....	16
(3) ピット.....	17
(4) 掘立柱建物.....	18
(5) 池.....	26
2 第5層上面検出遺構（第2遺構面）.....	27
(1) 自然凹地SX01	32
(2) 自然凹地SX02	39
(3) 自然落込SX03	49
IV 結 語.....	65
(1) 遺跡の性格.....	65
(2) 掘立柱建物群.....	65
(3) 縄文時代晚期突帯文土器の終焉.....	66
付 編	
三谷遺跡出土の初期弥生土器について.....	69
挿図図版	
表 図 版	
写 真 図 版	

挿図図版

- | | |
|--|--|
| 第1図 調査地概略図 | 第22図 挖立柱建物SB08 |
| 第2図 調査地基本層序 | 第23図 池SX01出土遺物 |
| 第3図 第2層出土遺物 | 第24図 古地形推定復原図 |
| 第4図 第2層出土遺物 | 第25図 第3層出土遺物 |
| 第5図 第2層出土遺物 | 第26図 第3層出土遺物 |
| 第6図 調査地I区遺構配置図
(第3層上面=第1遺構面) | 第27図 第3層出土遺物 |
| 第7図 調査地II区遺構配置図
(第3層上面=第1遺構面) | 第28図 調査地I区遺構配置図(第5層上面) |
| 第8図 土壙SK01 | 第29図 調査地II区遺構配置図(第5層上面) |
| 第9図 土壙SK01(1~4), SK02(5), SK03
(6~8), SK04(9,10), SK05(11),
SK07(12), SK08(13)出土遺物 | 第30図 自然凹地SX01出土遺物 |
| 第10図 土壙SK08(14), SK06(15~21), SK11
(22), SK10(23~25), SK12(26~28)
溝SD02(29,31,32), SD01(30), Pit01
(33), SB01SP01(34, 36), Pit02(35),
Pit03(37), Pit04(38), Pit05(39,40)
出土遺物 | 第31図 自然凹地SX02-1出土遺物 |
| 第11図 土壙SK06 | 第32図 自然凹地SX02-1出土遺物 |
| 第12図 土壙SK10 | 第33図 自然凹地SX02-1出土遺物 |
| 第13図 土壙SK13出土遺物 | 第34図 自然凹地SX02-1出土遺物 |
| 第14図 Pit06(41), Pit07(42), Pit08(43,44),
Pit09(45,46)出土遺物 | 第35図 自然凹地SX02-1出土遺物 |
| 第15図 挖立柱建物SB01 | 第36図 自然凹地SX02-2出土遺物 |
| 第16図 挖立柱建物SB02 | 第37図 自然凹地SX02-2出土遺物 |
| 第17図 挖立柱建物SB03 | 第38図 自然凹地SX02-2出土遺物 |
| 第18図 挖立柱建物SB04 | 第39図 自然凹地SX02-2出土遺物 |
| 第19図 挖立柱建物SB05 | 第40図 自然落込SX03出土遺物 |
| 第20図 挖立柱建物SB06 | 第41図 自然落込SX03出土遺物 |
| 第21図 挖立柱建物SB07 | 第42図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第43図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第44図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第45図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第46図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第47図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第48図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第49図 自然凹地SX02-2(54,55),
自然落込SX03(100~114)
出土遺物 |
| | 第50図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第51図 自然落込SX03出土遺物 |
| | 第52図 自然落込SX03出土遺物 |

表 図 版

第1表 口唇部刻目の有無と突帯の位置

第2表 器種構成と比率

写 真 図 版

卷頭1 調査地遠景（東方に城山を望む）

卷頭2 自然凹地SX02-1動物遺体（イヌ）
検出状況

卷頭3 上：自然凹地SX02-1動物遺体（イヌ）
検出状況

下：自然凹地SX02-1動物遺体（イヌ）
検出状況

卷頭4 上：自然凹地SX02-2動物遺体（イヌ）
検出状況

下：自然凹地SX02-2動物遺体（イヌ）
検出状況

卷頭5 上：自然落込SX03

下：自然落込SX03動物遺体（イヌ）
検出状況

図版1 調査地I区検出遺構
(第3層上面=第1遺構面)

図版2 上：土壤SK01土器検出状況
下：土壤SK12土器検出状況

図版3 上：土壤SK09検出状況
下：土壤SK09土器検出状況

図版4 上：土壤SK10検出状況
下：土壤SK10土器検出状況

図版5 上：掘立柱建物SB01
下：掘立柱建物SB04

図版6 上：掘立柱建物SB03
下：掘立柱建物SB05

図版7 上：自然凹地SX02-1貝塚検出状況

下：自然凹地SX02-1土器検出状況
図版8 上：自然凹地SX02-1牙製垂飾検出
状況

下：自然凹地SX02-1動物遺体検出
状況

図版9 上：自然凹地SX02-2

下：自然凹地SX02-2貝塚検出状況
図版10 上：自然凹地SX02-2貝塚断ち割り
下：自然凹地SX02-2貝層断面

図版11 上：自然凹地SX02-2土器検出状況
下：自然凹地SX02-2土器検出状況

図版12 上：自然凹地SX02-2土器検出状況
下：自然凹地SX02-2動物遺体検出

状況

図版13 上：自然凹地SX02-2動物遺体検出
状況

下：自然凹地SX02-2動物遺体検出
状況

図版14 上：自然落込SX03貝塚検出状況
下：自然落込SX03貝層断面

図版15 上：自然落込SX03動物遺体検出状況
下：自然落込SX03動物遺体検出状況

図版16 上：自然落込SX03土器検出状況
下：自然落込SX03骨角器検出状況

図版17 上：調査地II区検出遺構
(第3層上面=第1遺構面)

下：調査地II区振文鏡検出状況
(第2層出土)

図版18 上：調査地II区旧河道検出状況
(第5層上面)

下：調査地II区旧河道検出状況
(第5層上面)

図版19 第2層出土遺物

图版20	第2层出土遗物	图版40	自然凹地SX02-1出土遗物
图版21	第2层出土遗物	图版41	自然凹地SX02-1出土遗物
图版22	第2层出土遗物	图版42	自然凹地SX02-1出土遗物
图版23	第2层(59,63,64,66),土壤SK13(67) 出土遗物	图版43	自然凹地SX02-2出土遗物
图版24	第2层出土遗物	图版44	自然凹地SX02-2出土遗物
图版25	土壤SK01(1~4),SK02(5),SK03(6 ~8),SK04(9,10),SK05(11)出土遗物	图版45	自然凹地SX02-2出土遗物
图版26	土壤SK06(12),SK07(13),SK08(14), SK09(18,19,21),SK10(23,25)出土 遗物	图版46	自然凹地SX02-2出土遗物
图版27	土壤SK12(26~28),Pit06(41),Pit07 (42),Pit08(43,44),Pit09(45,46)出 土遗物	图版47	自然凹地SX02-2出土遗物
图版28	池SX01出土遗物	图版48	自然凹地SX02-2出土遗物
图版29	第3层出土遗物	图版49	自然凹地SX02-2出土遗物
图版30	第3层出土遗物	图版50	自然落达SX03出土遗物
图版31	第3层出土遗物	图版51	自然落达SX03出土遗物
图版32	第3层出土遗物	图版52	自然落达SX03出土遗物
图版33	自然凹地SX01出土遗物	图版53	自然落达SX03出土遗物
图版34	自然凹地SX01出土遗物	图版54	自然落达SX03出土遗物
图版35	自然凹地SX01出土遗物	图版55	自然落达SX03出土遗物
图版36	自然凹地SX01出土遗物	图版56	自然落达SX03出土遗物
图版37	自然凹地SX02-1出土遗物	图版57	自然落达SX03出土遗物
图版38	自然凹地SX02-1出土遗物	图版58	自然落达SX03出土遗物
图版39	自然凹地SX02-1出土遗物	图版59	自然落达SX03出土遗物
		图版60	自然落达SX03出土遗物
		图版61	自然落达SX03出土遗物
		图版62	自然落达SX03出土遗物
		图版63	自然落达SX03出土遗物
		图版64	自然落达SX03出土遗物
		图版65	自然落达SX03出土遗物



三谷遺跡(1)と城山貝塚(2)

報告書抄録

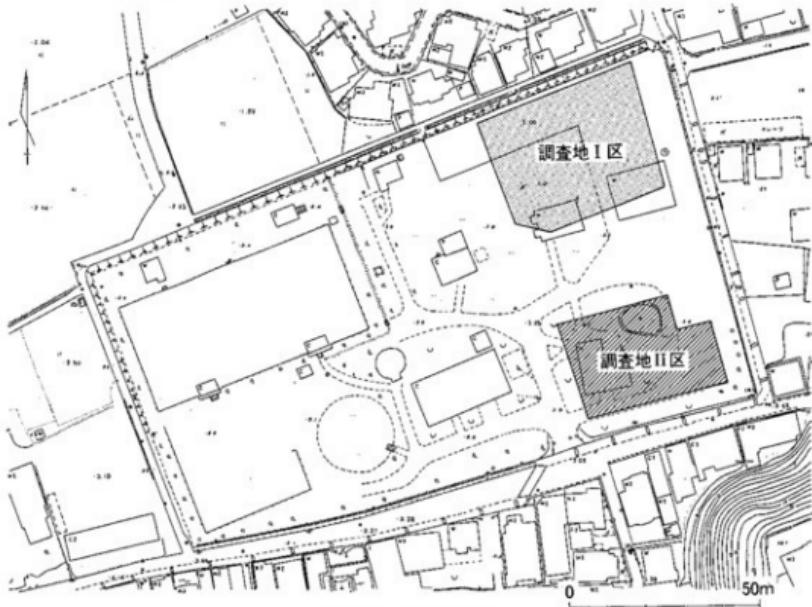
ふりがな	みたにいせき							
書名	三谷遺跡							
副書名	徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	勝浦康守							
編集機関	徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会							
所在地	〒770 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 0886-21-5418							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	期間	面積	原因	
三 谷	徳島県徳島市 南佐古六番町	36201	34° 4' 46"	134° 31' 46"	19901001 19920321	2,700m ²	水道 施設 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三 谷	集落跡 貝塚	縄文 弥生 古墳 中世 近世	旧河道 土壙 掘立柱建物跡 溝 ビット	土器 土器 土器 須恵器 瓦 銅鏡、鐵鏡 銅鏡、陶磁器 動物遺体 (哺乳類) (魚類) (鳥類) (貝類) 植物遺体 (炭化ドングリ) (炭化コメ) 骨角器				

I 調査経過

三谷遺跡は南佐古浄水場遺跡とも呼称され、徳島市佐古配水場周辺に所在する縄文時代晚期～弥生時代前期の遺跡として周知されている。遺跡発見の経緯は、1924年、同配水場内における濾過池建設工事中にあり、郷土史家の森敬介により紹介された。また鳥居龍蔵も遺跡に足を運んだ経緯がある。ただ残念なことに、当時の資料は散逸し詳細については不明である。

「三谷」の名称についてであるが、明治時代には字名として使用されていたが、現在は存在しない。江戸時代に描かれた絵図で製作年代の判明している「名東郡佐古村藏本村分間絵図」（文化6年2月）には、現在、南佐古七番町に所在する椎宮神社の東隣に「三谷」の名が記載されている。さらに17世紀代の阿波・淡路国を描いた国絵図「蜂須賀領国図屏風」にもその名が見られることから、17世紀頃から、現在の南佐古の眉山北斜面に所在した集落名もしくは地名であったものと考えられる。

1924年の遺跡発見の経緯となった徳島市佐古配水場内において、徳島市水道局拡張事務所により調整池等の増設工事が計画されるのに伴い、平成2年4月埋蔵文化財に対する取り扱いについて、徳島市教育委員会との間において協議が行われた。今回の工事対象地域が周知の埋蔵文化財包蔵地である三谷遺跡（南佐古浄水場遺跡）に位置することから、徳島市教育委員会は



第1図 調査地概略図

1:1500

埋蔵文化財発掘調査通知書の提出を指導するとともに、事前の発掘調査の実施について協力を求めた。水道局との協議において、まず今回の調査地が埋蔵文化財の包蔵地であることを確認することを条件に調査を実施することでの合意を得た。試掘調査は調査地の外周に幅2mのトレンチを設定し実施した。この結果、遺構面ならびに遺物が確認されたことを水道局に報告するとともに、全面調査の実施了解を得た。

平成2年度の調査（調査地I区）は、排土搬出の関係上、調査地を東西に二分する方法で実施した。平成2年10月より西側部750m²の調査を開始し、第1遺構面において弥生時代中期～江戸時代に至る遺構・遺物を確認、また第2遺構面において縄文時代晚期～弥生時代前期の貝塚を検出した。平成3年1月に西側部の調査を終了させ、引き続き東側部750m²の調査に着手した。第1・2両遺構面で遺構の広がりを確認し、平成3年3月に調査を終了した。特に貝塚調査は低湿地での作業のため、湧水が激しく、調査進行は決してスムーズであったとは言えない。なお貝塚調査ではコンテナ1000箱分の土壌を取り上げ、洗浄作業を実施することにより微細遺物の取り上げに努めた。

平成3年度の調査は7月より調査地II区（調査地I区の南側）1200m²の調査に着手した。調査地I区で検出された遺構の広がりが期待されたが、眉山北裾部の低湿地帯および旧河川の検出にとどまり、平成3年11月現地調査をすべて終了した。なお発掘調査は、徳島市水道局の委託を受け、徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会が実施した。

II 基本層序

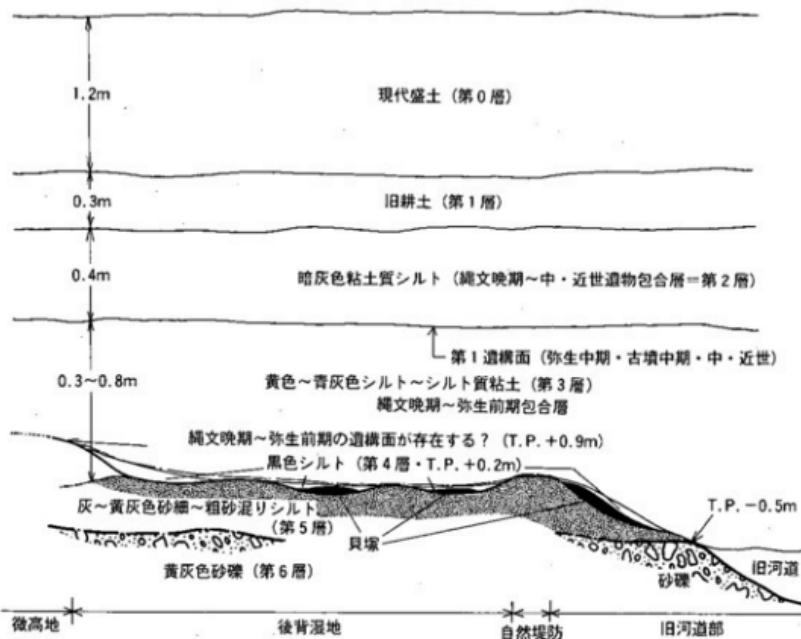
調査地は眉山北裾の現地表面の標高がT.P.+3mを測る沖積地上に位置し、現地表面は北方に対し緩やかに傾斜し、佐古小学校付近ではT.P.+1.7mまで低下する。調査地では現代盛土層下に第1～6層が堆積する。以下、上位より概略する。

第1層 佐古配水場建設以前の旧耕作土で層厚30cmを測る。

第2層 暗灰色粘土質シルトで層厚40cmを測る。縄文時代晚期～江戸時代に至る遺物が出土することから、後世における大規模な削平を受けた擾拌層と考えられる。

出土遺物には、広口壺1、二重口縁壺2、59、鉢3～5、小型丸底土器6～9、土師器高坏10、11、57、58、須恵器坏12～20、33～40、坏蓋21～25、41～49、土師器坏26、皿27、28、足高台29、黒色土器A類高台付坏30、31、壺32、須恵器無蓋高坏50、壺51～54、短頸壺55、鉢56、壺60～63、平瓶64、提瓶65、66、横瓶67、銅鑓・鐵鑓・銅鏡（写真図版24）がある。

それぞれについては詳しく述べないが、年代観としては1～11、57～59は弥生時代

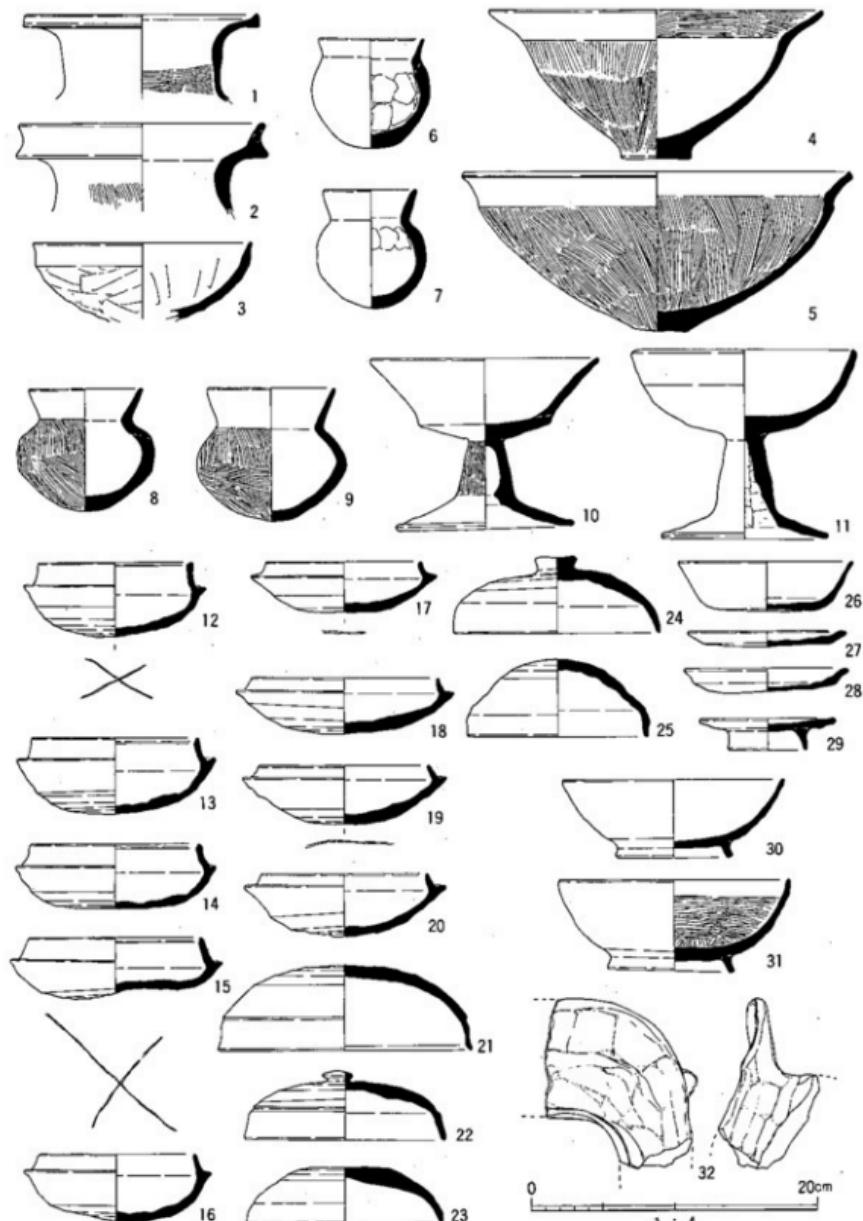


第2図 調査地基本層序

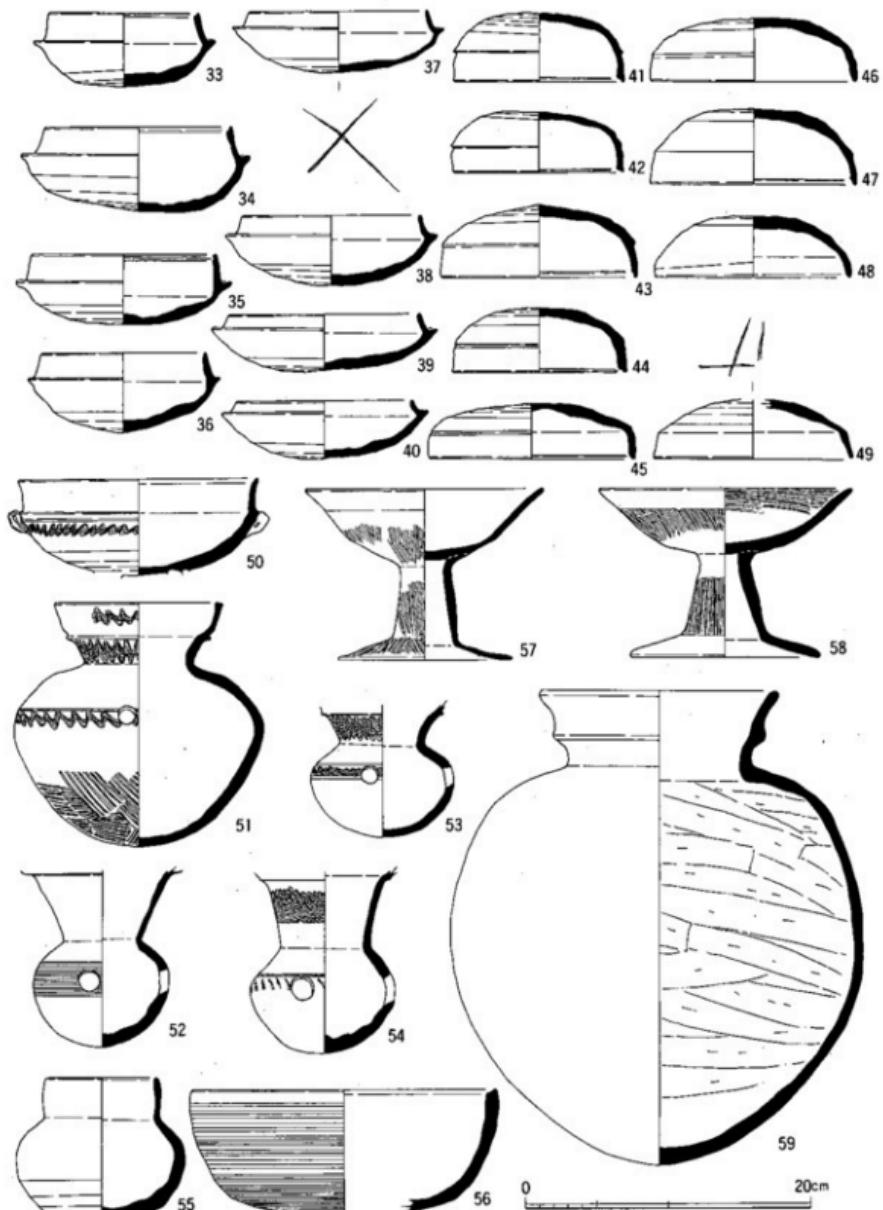
後期終末～庄内式併行期、12～25、33～56、60～67は陶邑TK47～TK209、26～31は10世紀後半に比定されるものである。調査地には少なくとも、これら複数の時期の遺構が存在する複合遺跡として存在していた可能性が考えられるが、後世における削平を全面に受けているものと理解される。

第3層 黄色～青灰色シルト～シルト質粘土であり層厚30～80cmを測り、層厚5cm程度の細砂が部分的に挟在し、弥生時代中期～江戸時代に至る遺構検出ベース層（第1遺構面）であり、縄文時代晩期および弥生時代前期の遺物が出土する。調査地Ⅰ区の西部では、ほぼ黄色シルトの堆積が見られるが、東部では土壤が還元作用を受け、漸移的に青灰色シルト質粘土へ変化する。また調査地Ⅱ区においても、北西隅部で黄色シルトが堆積する以外は、全域で青灰色シルト質粘土に変化する。

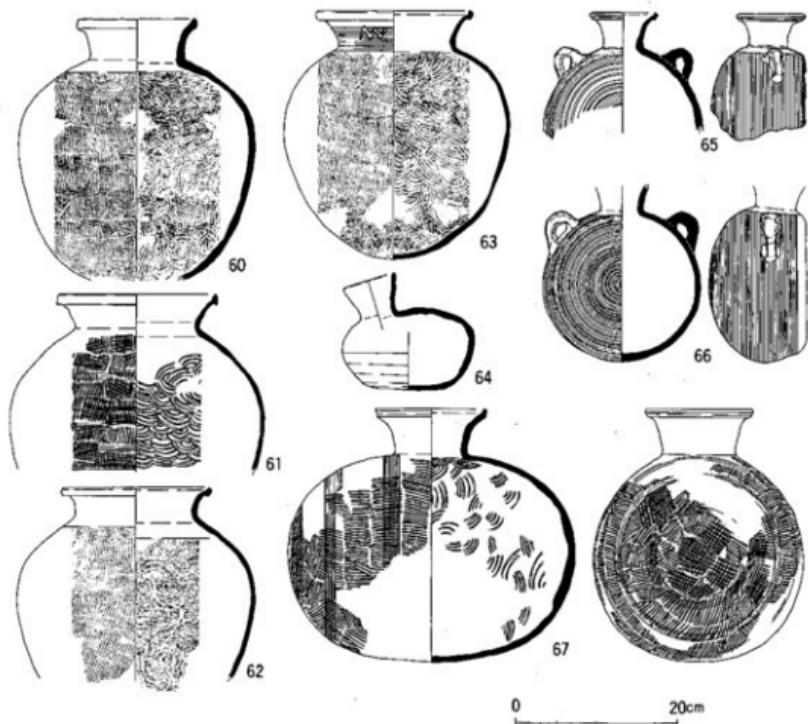
本層は鮎喰川下流域の諸遺跡における遺構検出ベース層であり、地点によっては層厚が8m以上に及ぶことも確認されている。色調による分層は困難であり、また土質においても変化は漸移的であり、明瞭に分層されるものではない。しかし縄文時



第3図 第2層出土遺物



第4図 第2層出土遺物

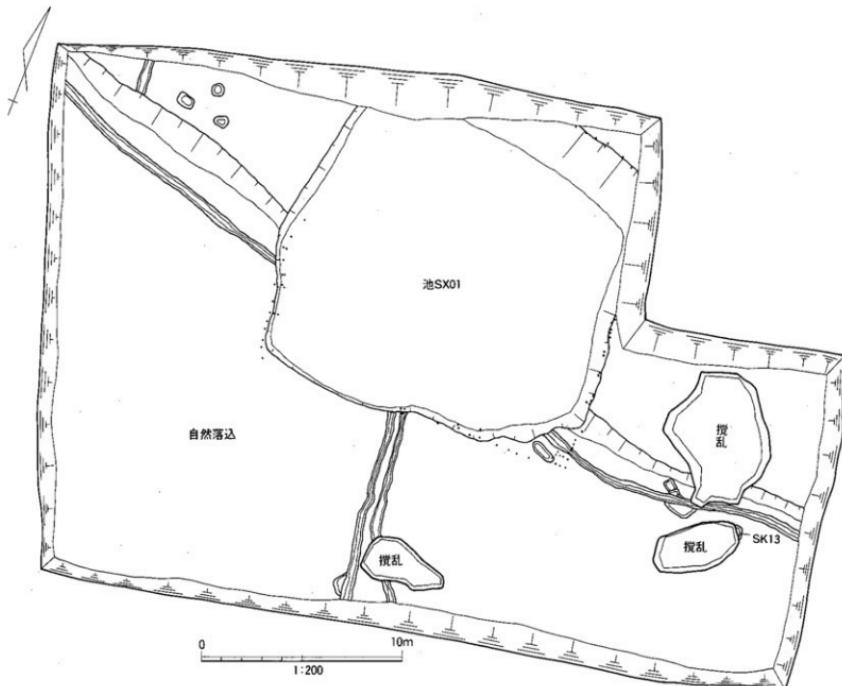


第5図 第2層出土遺物

- 代晚期～弥生時代前期の生活面（調査では第2遺構面とする）が本層中に存在することは確実である。堆積過程に関しては明確ではないが、ただ同色同質土の連続堆積であることから、遺構面を認定した上での発掘調査は極めて困難な問題とされる。
- 第4層** 黒色シルトであり層厚20cmを測る。縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物が出土する。調査地I区西部に堆積が認められ、貝塚形成後の後背湿地に堆積する。
- 第5層** 灰～黄灰色細砂～粗砂混じりシルトであり層厚は30cmを測る。後背湿地を形成する堆積層であり、自然凹地もしくは自然落込には貝塚が形成される。第3層中に存在するであろう縄文時代晚期～弥生時代前期の生活面が本層上面に対応する。すなわち基本的生活領域としての微高地と物資の廃棄場所等としての後背湿地との関係である。
- 第6層** 黄灰色砂礫であり河川堆積層（地山）である。



第6図 檿地I区遺構配置図（第3層上面=第1遺構面）



第7図 調査地II区造構配図（第3層上面=第1造構面）

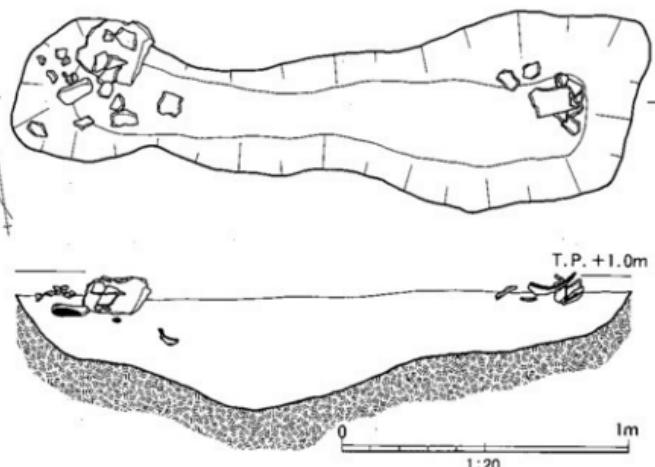
III 調査概要

1 第3層上面（第1遺構面）検出遺構

(1) 土 壤

① 土壌SK01

第3層中に
おいて縄文時
代晩期～弥生
時代前期の遺
構面が存在す
ると前述した
が、土壌SK01
は本来第3層
下面において
検出される遺
構である。た
だ遺構面の認
定が困難であ
り、検出は任
意面である。



第8図 土壌SK01

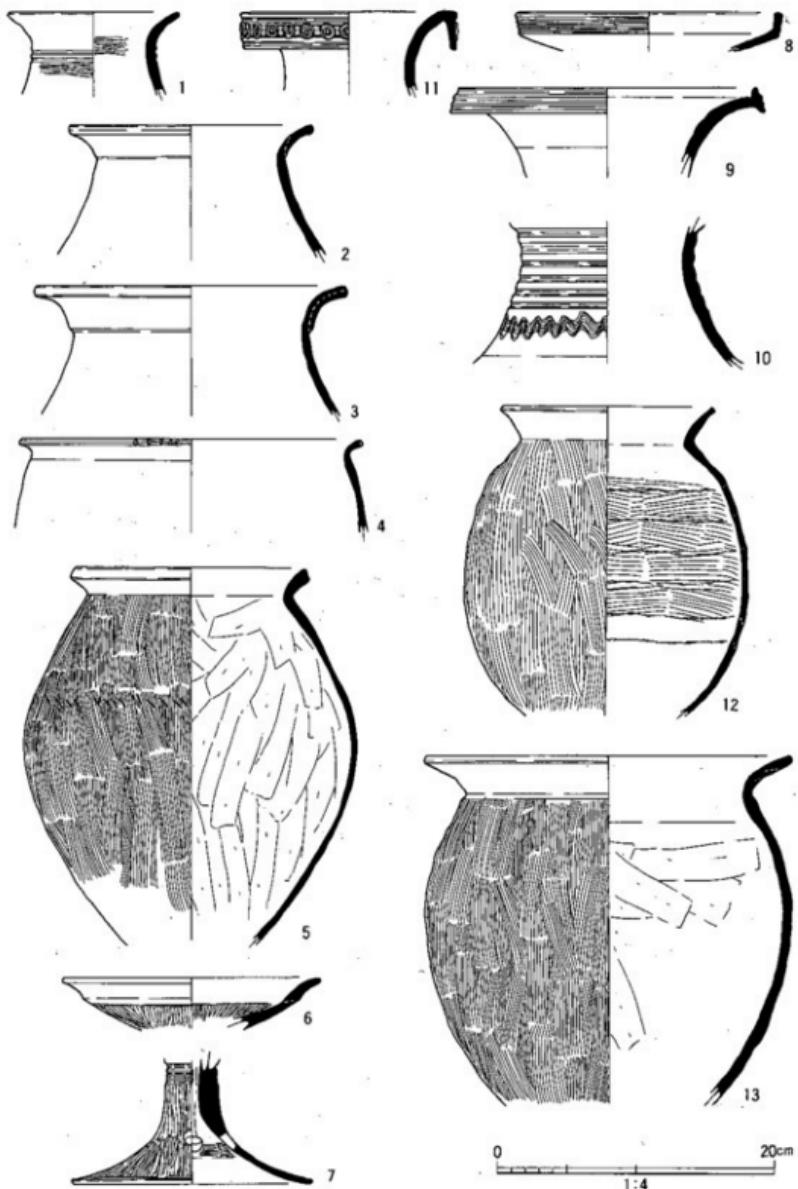
長辺2.1m、短辺70cmの平面形が隅丸長方形を呈し、両端部での深さは20cmを測るが、中央部では40cmと少し落ち込む。埋土はオリーブ黒色シルトであり炭片が比較的多く含まれている。両端部で土器が集中する状況で検出されているが、土壌の中央部が攪乱で破壊されている結果のものと考えられる。

出土遺物には弥生土器壺1～3、壺4がある。1は頸部に2条の沈線、2・3は頸部に粘土貼付時の不明瞭な段を持ち、口縁部は端部近くで大きく外反する形態である。4は如意形口縁を呈し、口唇部に刻目が施される。

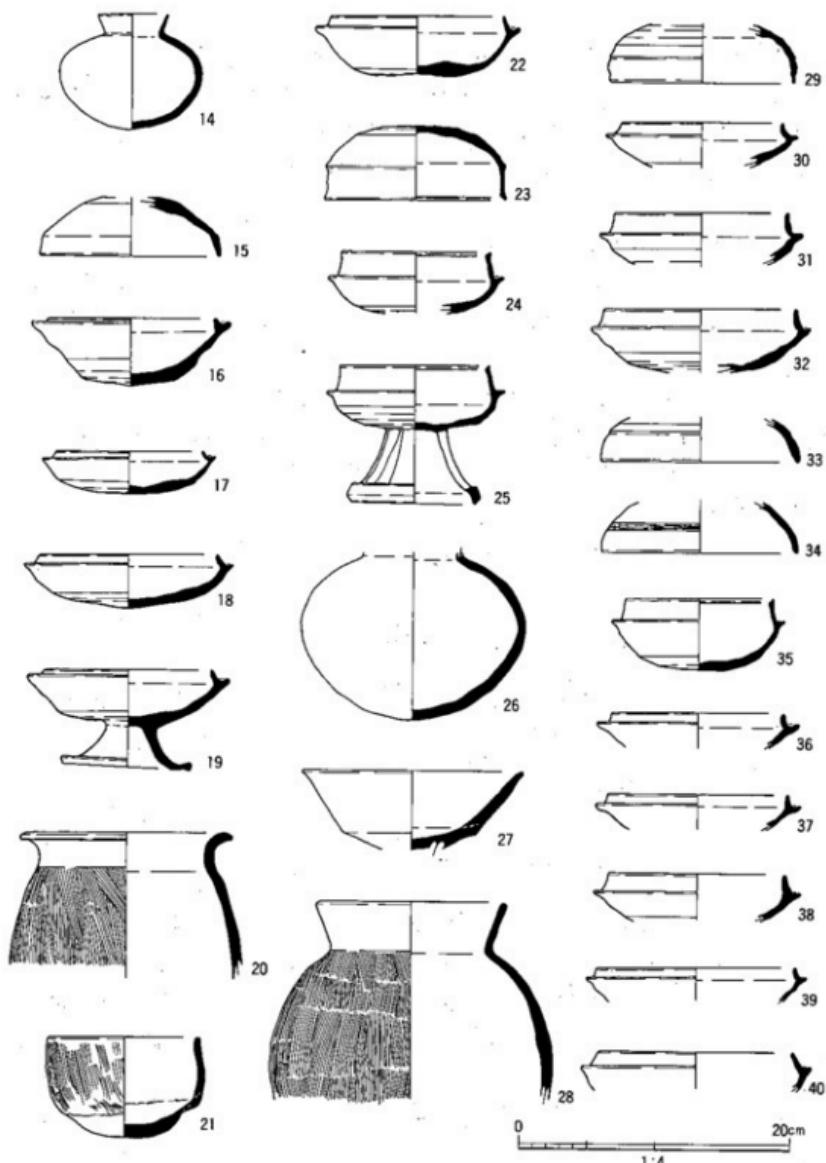
② 土壌SK02

長径60cm、短径50cmの平面形が不整円形を呈し、深さ10cmを測る。

出土遺物には弥生土器壺5がある。5は「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、端部に向かい厚みを増す。口縁端部の形状は方形で端部は面取る。体部中央に最大径を持ち、体部中央よりやや上位に刺突文が巡る。体部外面は縦位のハケ、体部内面は縦位のヘラミガキ、内面上位には斜位もしくは横位のヘラミガキが施される。



第9図 土壙SK01(1~4), SK02(5), SK03(6~8), SK04(9,10), SK05(11), SK07(12), SK08(13)出土遺物



第10図 土壌SK08(14), SK06(15~21), SK11(22), SK10(23~25), SK12(26~28), 溝SD02(29, 31, 32), SD01(30), Pit01(33), SB01SP01(34, 36), Pit02(35), Pit03(37), Pit04(38), Pit05(39, 40)出土遺物

③ 土壌SK03

調査地内において、長辺1.2m、短辺70cmの平面形は両端が収束する溝状を呈し、深さ50cmを測る。出土遺物には弥生土器高杯6～8がある。6は杯部の口縁部が大きく外反する形態である。8は口縁部が直立し、口縁部外面に3条の擬凹線を持つ。7は脚裾部が大きく広がる形態であり、4個の円形透かしを穿つ。杯部と脚部の接合は差込式である。

④ 土壌SK04

長径80cm、短径50cmの平面形が隅丸長方形を呈し、深さ20cmを測る。

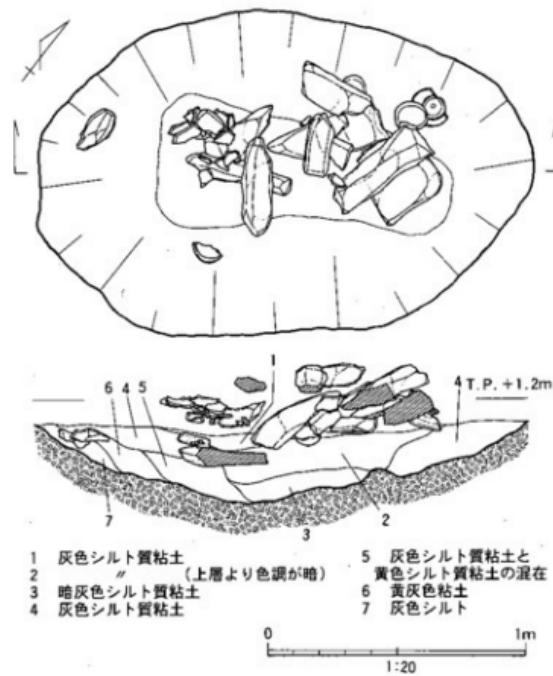
出土遺物には弥生土器壺9、10がある。9は口縁端部を上下に拡張し端面には3条の凹線が巡る広口壺である。10の頸部は6条凹線文と櫛描波状文により加飾される。

⑤ 土壌SK05

長径60cm、短径40cmの平面形が長円形を呈し、深さ10cmを測る。

出土遺物には弥生土器壺11がある。11は口縁部を下方に垂れ下げ、外面に5条の凹線文を巡らし、円形竹管浮文で加飾する。また口縁部上面には櫛描波状文が施される。

⑥ 土壌SK06



第11図 土壌SK06

長径1.9m、短径1.2mの平面形が不整長円形を呈し、深さ40cmを測る。上面には板状もしくは棒状の石材と土器が散在する。原位置を保っているもののか否かは不明確である。

出土遺物には須恵器壺蓋15、壺16～18、高壺19、土師器壺20、鉢21がある。15は天井部と体部の境界に不明瞭な稜線を持ち、口縁端部は丸くおさめる。外面ヘラケズリの範囲は1/2、ヘラケズリの方向は外→内への左回りである。16の立ち上がり

りは低く内傾する。外面へラケズリの範囲は1/3、ヘラケズリの方向は外→内への右回りである。17、18の立ち上がりは矮小化し、体部は浅く扁平である。17の外面へラケズリの範囲は2/3、ヘラケズリの方向は内→外への右回り、18の外面へラケズリの範囲は体部2/3、ヘラケズリの方向は外→内への左回りである。19は裾部が大きく広がる低脚部を持つ。

⑦ 土壌SK07

一辺40cmの平面形が隅丸方形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には土師器壺12がある。

12は長胴の体部を有し、口縁端部内面をわずかに肥厚させ、端部は面取る。体部外面は縦位のハケ、体部内面は横位のハケが施される。

⑧ 土壌SK08

径40cmの平面形が円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には土師器壺13がある。

13は口縁部が大きく外反し、端部をわずかに肥厚させる。体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリが施される。

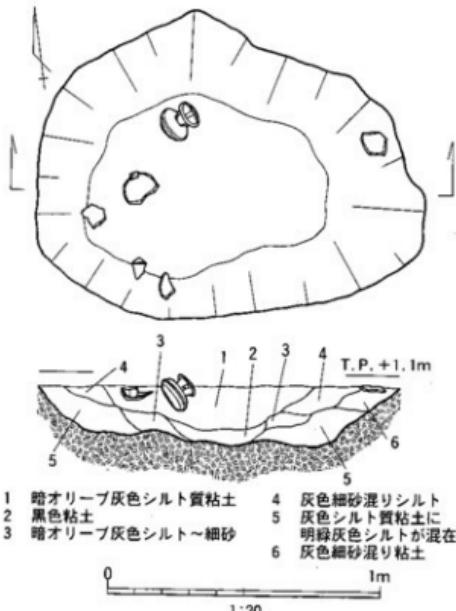
⑨ 土壌SK09

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物には土師器壺14がある。14は扁平球体の体部に直立する短い口縁部を持つ。

⑩ 土壌SK10

長径1.4m、短径1.0mの平面形が不整長円形を呈し、深さ20cmを測る。平面形ならびに断面形、底部の形状は土壌SK06に類似する。

出土遺物には須恵器壺蓋23、壺24、高壺25がある。23の天井部のヘラケズリの範囲は3/4、ヘラケズリの方向は内→外への右回りであり、口縁端部の内傾する段はシャープさに欠ける。24の体部のヘラケズリの範囲は3/5、ヘラケズリの方向は内→外への右回りである。口縁端部は段を有するがシャープさに欠ける。25の壺部のヘラケズリの範囲は4/5、ヘラケズリの方向は内→外への右回りであり口縁端部は段が不明瞭に残るが、ほぼ内傾する形状である。



第12図 土壌SK10

⑪ 土壙SK11

長辺2.6m、短辺70cmの平面形は収束する溝状を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には須恵器坏22がある。22は受け口が上方を向き、立ち上がりは内傾し矮小化する。

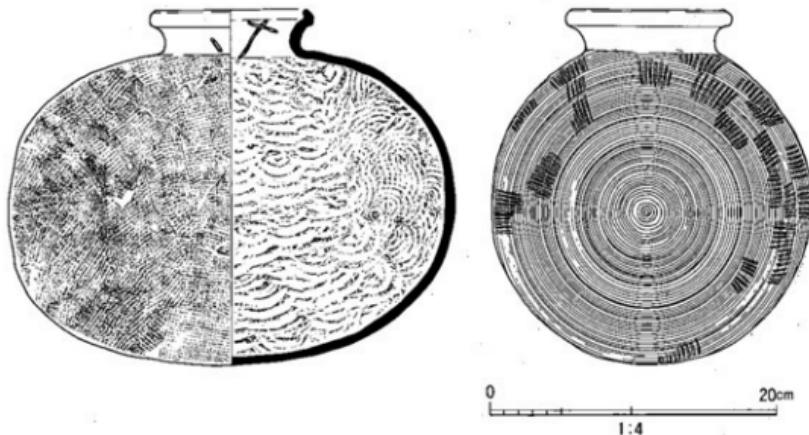
⑫ 土壙SK12

径60cmの平面形が不整円形を呈し、深さ20cmを測る。長辺4.0m、短辺3.0mの平面形が方形を呈する住居跡状の遺構内に存在する。

出土遺物には土師器壺26、高坏27、28がある。26は口縁部を欠損するものであり、扁平球体の体部を持つ。27は坏底部と体部の屈曲の稜線は鈍く、体部は直線的に立ち上がる。脚部と接合は差込式である。28は外面縦位のハケ、内面にはヘラケズリ+ユビナデが施される。

⑬ 土壙SK13

大部分が擾乱により破壊され形状は明確ではない。出土遺物には須恵器横瓶47がある。47は外面にカキメが施され、内面には工具圧痕を残す。頸部内面にヘラ記号を持つ。



第13図 土壙SK13出土遺物

(2) 溝

① 溝SD01

幅40~70cm、深さ20cm、断面形が逆台形を呈する収束する溝である。出土遺物には須恵器坏30がある。30の受け口は水平に伸び、口縁部は矮小化する。

② 溝SD02

幅40cm~50cm、深さ20cm、断面形が逆台形を呈し、溝SD01に並行する収束する溝である。

出土遺物には須恵器坏蓋29、坏31、32がある。29は天井部と口縁部の境界に1条の凹線を巡ら

し、端部は退化した段が残存する。31、32は内傾する口縁部を持ち、端部は丸くおさめる。32の外側ヘラケズリの範囲は3/4、ヘラケズリの方向は左回りである。

(3) ピット

① Pit01

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には須恵器杯蓋33がある。33は天井部と口縁部の境界に1条の凹線を巡らし、口縁端部内面は不明瞭な段を持つ。

② Pit02

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ50cmを測る。出土遺物には須恵器杯35がある。35は外側ヘラケズリの範囲は3/5、ヘラケズリの方向は内→外への左回りである。口縁端部の段は消失し内傾する。

③ Pit03

長径30cm、短径20cmの平面形が長円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には須恵器杯37がある。37は受け口が上方を向き、立ち上がりは短く内傾する。

④ Pit04

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には須恵器杯38がある。38は口縁部は内傾し端部を丸くおさめる。

⑤ Pit05

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物には須恵器杯39、40がある。39の立ち上がりは矮小化する。40は受け口が水平であり、口縁部は内傾する。

⑥ Pit06

径40cmの平面形が円形を呈し、深さ15cmを測る。出土遺物には土師器皿41がある。41の底部切離しは回転糸切りである。

⑦ Pit07

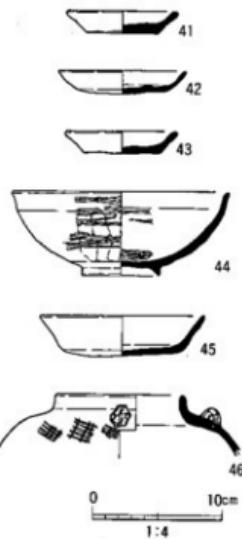
径20cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物には土師器皿42がある。42の底部切離しは回転ヘラ切りである。

⑧ Pit08

径30cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物には土師器皿43、瓦器碗44がある。43の底部切離しは回転糸切りである。44は機内産であり、外側ユビオサエ+ヘラミガキ、内面は磨滅しており明瞭ではない。

⑨ Pit09

径40cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る。出土遺物に



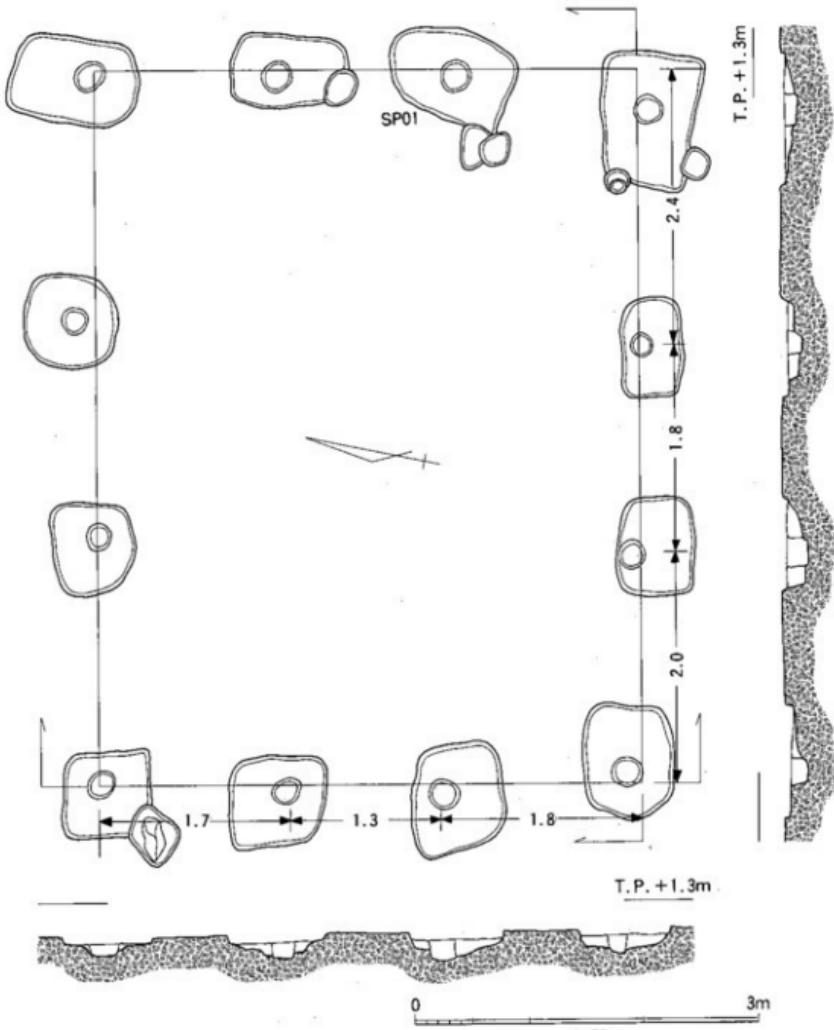
第14図 Pit06(41), Pit07(42), Pit08(43, 44), Pit09(45, 46)
出土遺物

は土師器壺45、須恵器壺46がある。45は回転台土師器である。

(4) 堀立柱建物

① 堀立柱建物SB01

桁行3間×梁行3間の東西棟の側柱建物である。柱間寸法は南桁行が西から2.0-1.8-2.4m、西梁行が南から1.8-1.3-1.7mを測る。柱穴掘形の平面形は、長辺1.0~1.6m、短辺60cm~1.



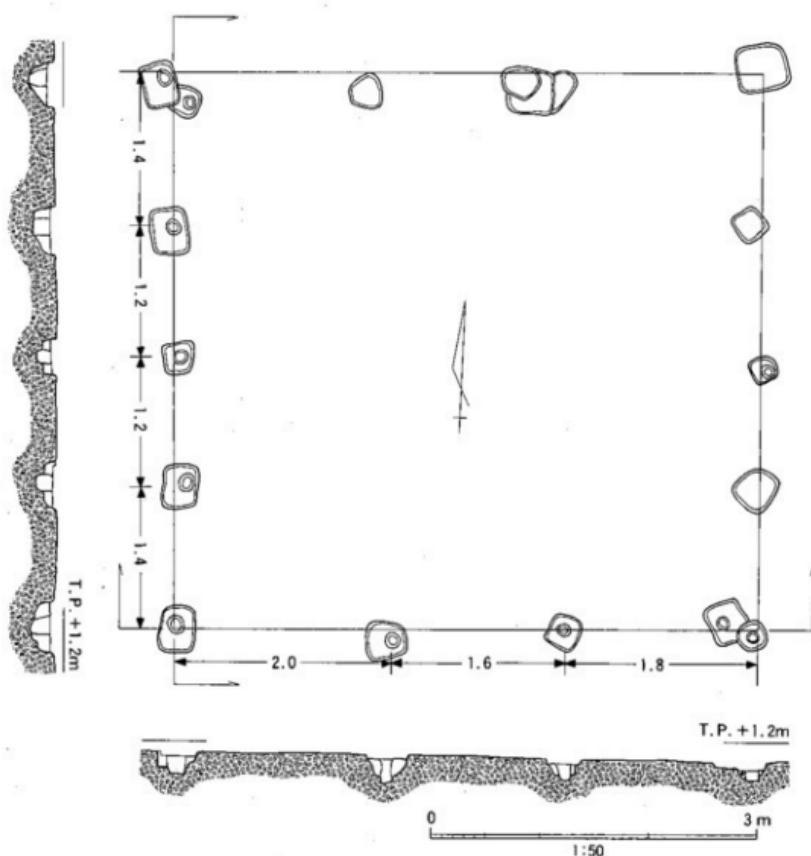
第15図 堀立柱建物SB01

0mの平面形が隅丸方形あるいは不整長方形を呈するもの、あるいは一辺70~80cmの隅丸方形を呈し、深さは20~30cmを測る。平面形の規模に対し掘形の深度が浅く、遺構面の削平が考えられる。柱穴部は径40cmの円形を呈する。

柱穴SP01より須恵器壺蓋34、壺36が出土している。34は天井部と口縁部の境界に3条の鈍い凹線をとどめ、口縁端部を丸くおさめる。36の口縁部立ち上がりは矮小化する。

② 掘立柱建物SB02

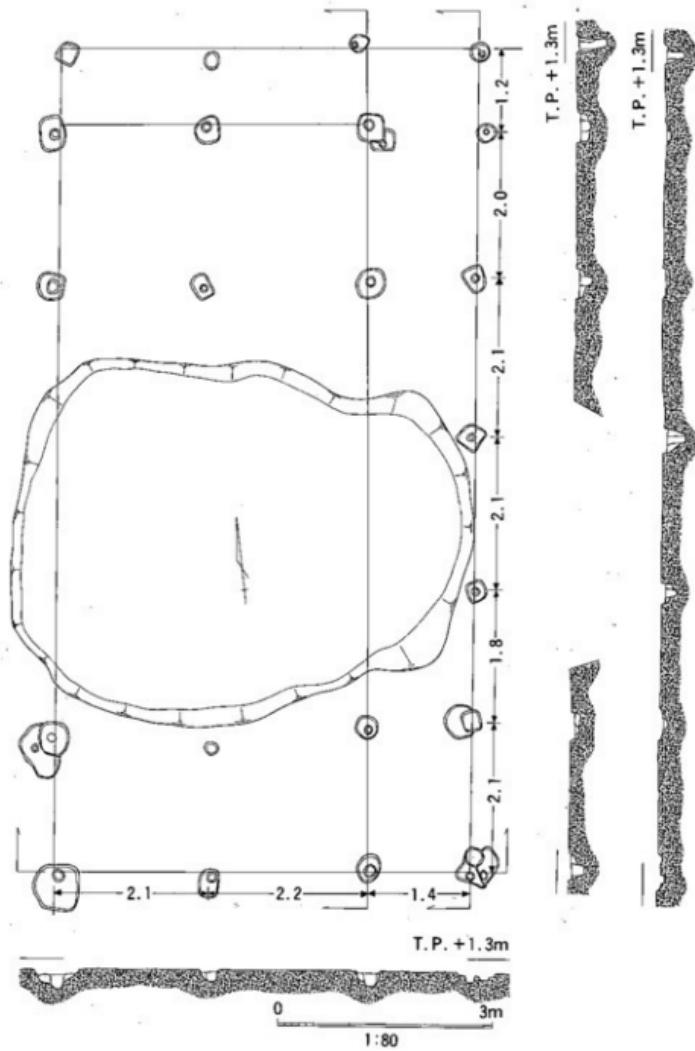
桁行4間×梁行3間の側柱建物である。柱間寸法は西桁行が北から1.4-1.2-1.2-1.4m、



第16図 掘立柱建物SB02

南梁行が西から2.0-1.6-1.8mを測り、桁行と梁行が同寸である。柱穴掘形の平面形は、長辺40~50cm、短辺30cmの平面形が隅丸長方形あるいは一辺20~30cmの隅丸方形を呈し、深さは20~30cmを測る。

③ 据立柱建物SB03



第17図 据立柱建物SB03

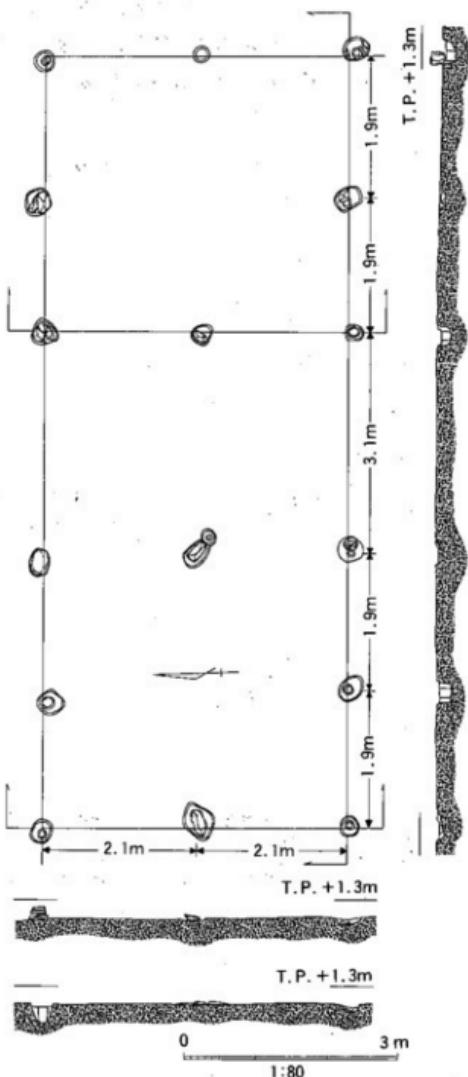
擾乱により一部破壊されているが、桁行5間×梁行2間の南北棟の総柱建物の北・東側に庇が付設される。柱間寸法は東桁行が南から2.1-1.8-2.1-2.1-2.0m、庇部は1.2m、南梁行が西から2.1-2.2m、庇部は1.4mを測る。柱間寸法は2.1mを基準とした場合、それに前後する数値で得られることから、比較的企画性の高い建物であると考えられる。

柱穴掘形は、一辺30~60cmの平面形が隅丸方形あるいは長辺40cm、短边30cmの隅丸長方形を呈し、深さ15~40cmを測る。柱穴部は径20cmの円形を呈する。

④ 挖立柱建物SB04

柱間寸法は南桁行が西から1.9-1.9-3.1-1.9-1.9m、西梁行が南から2.1-2.1mの等間である。桁行柱間寸法の内、3.1mを除くと1.9mの等間であること、また梁行の西から3列目と4列目に柱穴が配置されることから、桁行2間×梁行2間の建物が2棟が存在していたとも考えられるが、桁柱配置に乱れが見られないことから、桁行5間×梁行2間の東西棟建物であるとも考えられる。

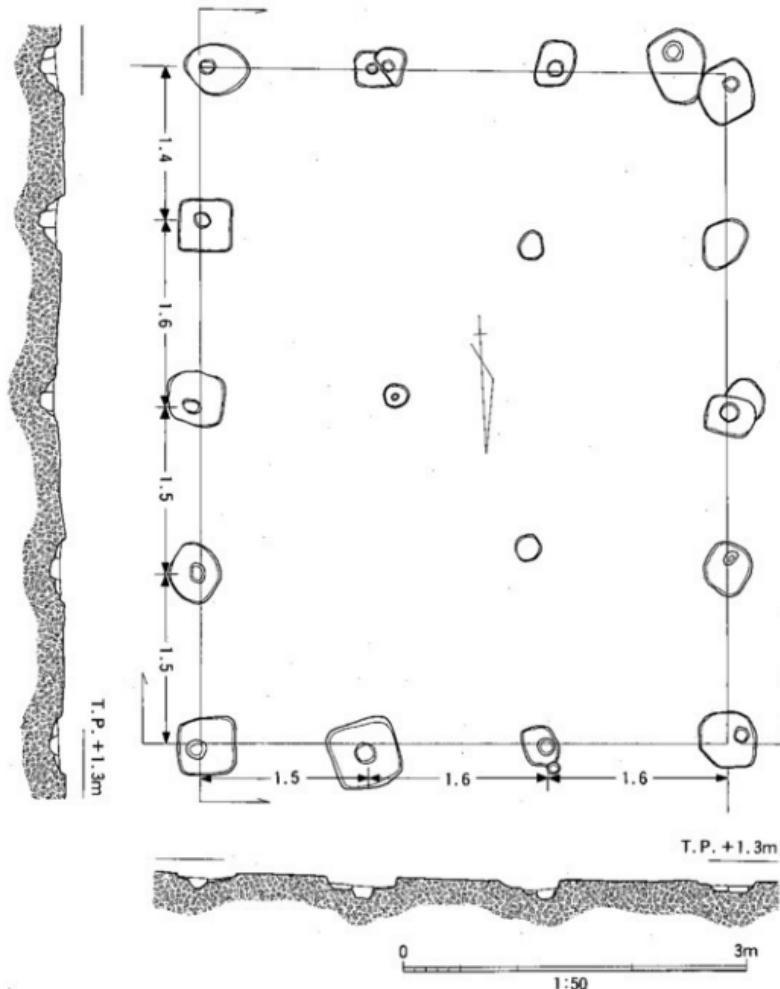
柱穴掘形は長径50cm、短径30cmの平面形が長円形あるいは径25~35cmの円形もしくは不整円形を呈し、深さ5~30cmを測る。柱穴には底部に結晶片岩製の根石を持つものや柱に接して側立させているものが見られる。ただし遺構面が削平されているため、柱穴外に露出している状態で検出されているものもある。掘立柱建物SB01と切り合い関係を持ち、柱穴の規模および埋土においても相違を示し、時期的には新相に位置づけられるものであろう。



第18図 挖立柱建物SB04

⑤ 据立柱建物SB05

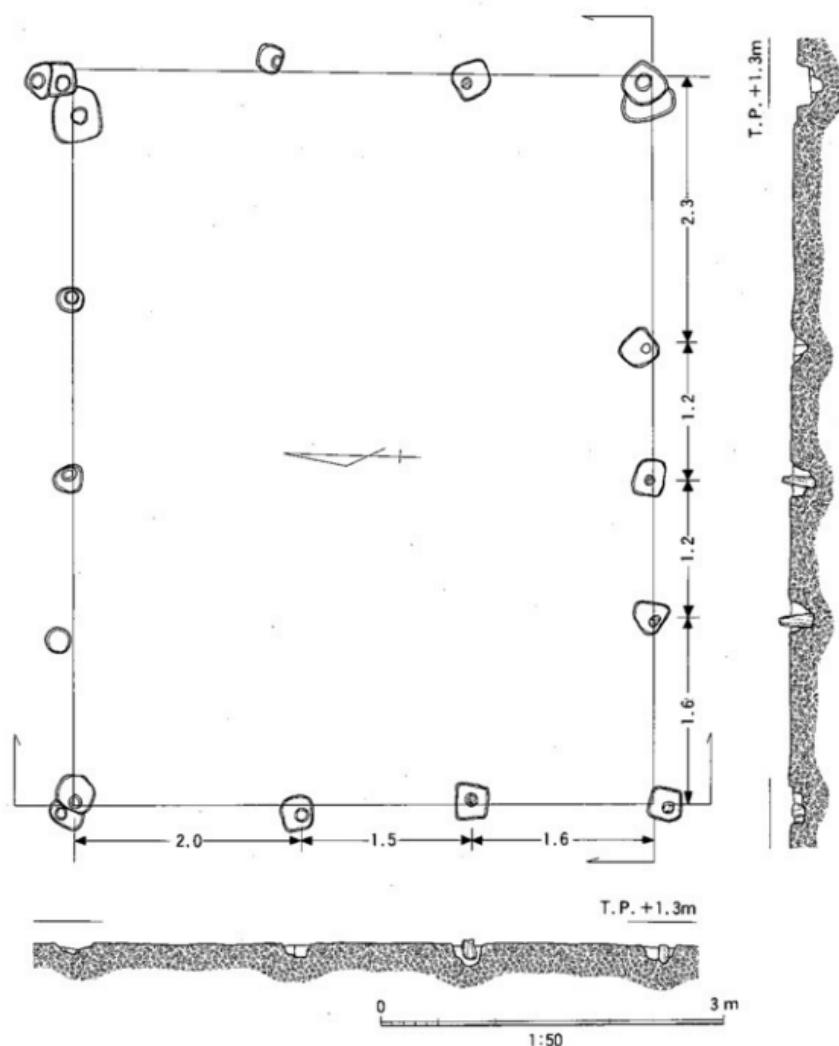
桁行4間×梁行3間の南北棟の側柱建物である。柱間寸法は東桁行が北から1.5-1.5-1.6-1.5m、北梁行が東から1.5-1.6-1.6mを測る。柱間寸法は1.5mあるいは1.6mの数値を示すことから、小規模であるが、企画性を持った建物であると考えられる。ただ南桁行と西梁行の柱穴の配置ならびに形態に整然性が見られない。柱穴掘形は一辺30cm~60cmの方形あるいは長辺45cm、短辺30cmの長方形を呈し、深さは10~20cmを測る。柱穴部は径15~20cmの円形を呈する。



第19図 据立柱建物SB05

⑥ 挖立柱建物SB06

桁行4間×梁行3間の東西棟の側柱建物である。柱間寸法は南桁行が西から1.6-1.2-1.2-2.3m、西梁行が南から1.6-1.5-2.0mを測る。東梁行の柱間寸法に特に乱れが見られる。柱



第20図 挖立柱建物SB06

穴掘形は一辺30cmの方形あるいは径20cmの円形を呈し、深さ10~25cmを測り、柱根を残存するものが見られる。柱穴部は径10cmの円形を呈する。

⑦ 挖立柱建物 SB07

桁行3間×梁行

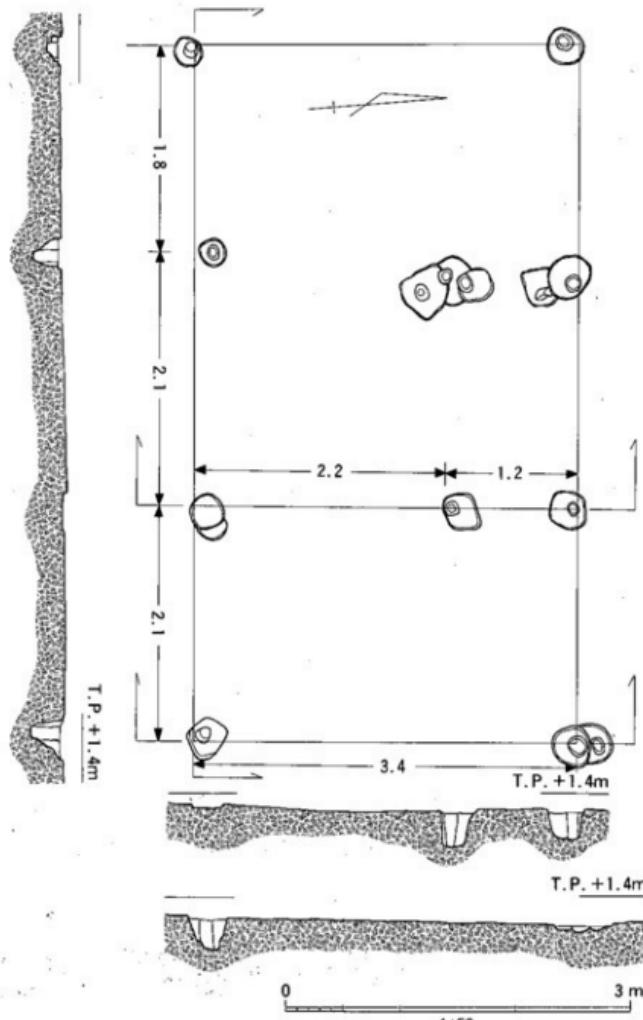
1間の東西棟建物である。柱間寸法は南桁行が東から2.1-2.1-1.8m、東側梁行3.4mを測る。

柱穴掘形は一辺30cmの方形もしくは径30cm円形を呈し、深さ5~35cmを測る。柱穴部は径10cmの円形を呈する。

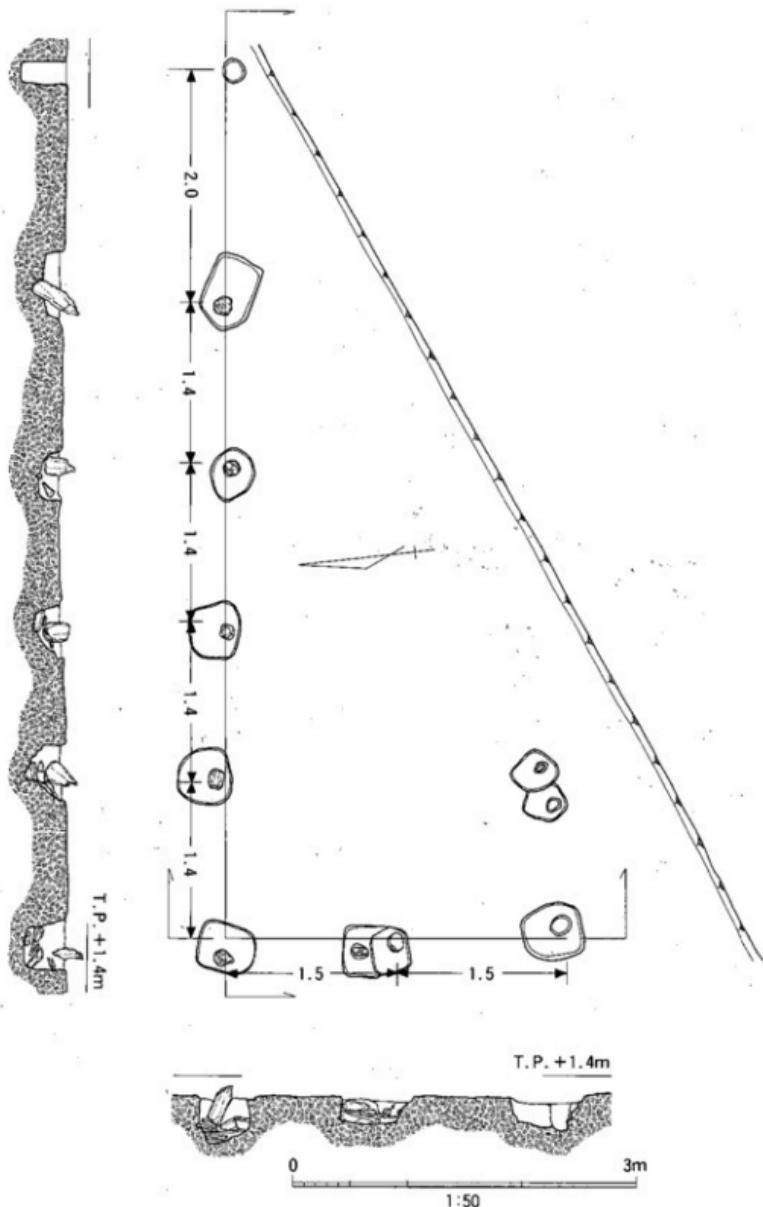
⑧ 挖立柱建物

SB08

桁行5間×梁行2間の東西棟の側柱建物であり、南桁行が調地外へ広がる。柱間寸法は北桁行が西から1.4-1.4-1.4-1.4-2.0m、西梁行が北から1.5-1.5mを測る。柱穴掘形は一辺45cmの方形もしくは長辺50cm、短辺45cmの不整長方形を呈す。



第21図 挖立柱建物SB07

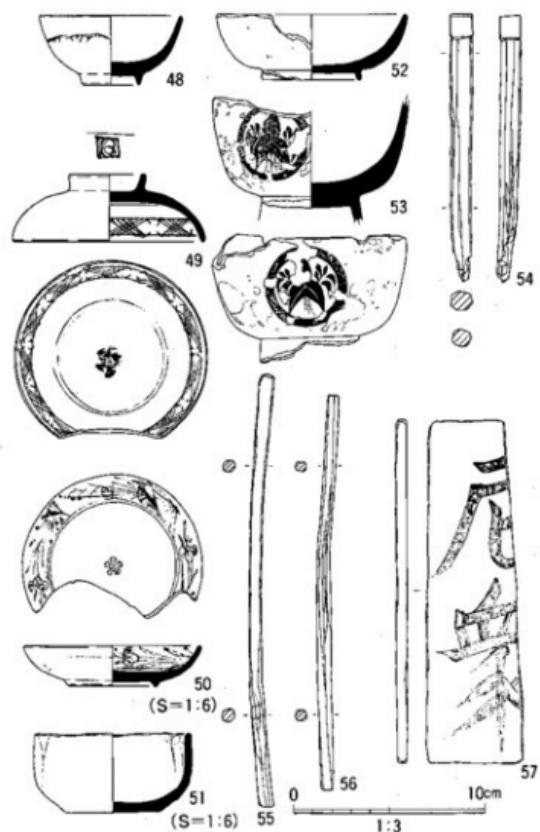


第22図 挖立柱建物SB08

深さ25~40cmを測る。北桁行の柱穴には柱根の残存が見られ、底部に結晶片岩を組み合わせた根石が設置される。柱穴底部に砂地が見られる箇所では根石は設置されていない。地盤土壤により建物の基礎工法の簡素化を図っているのだろうか。柱穴部は径10~15cmの円形を呈する。

(5) 池SX01

コンクリートによる改修工事を受け現存していた池の旧態であり、一辺17mの平面形が方形を呈する。周縁部には杭列が巡らされる。文化6年(1809)製作の「名東郡佐古村・藏本村分間絵図」には、調査地に方形の池が画かれており、すでにこの時期には存在していたものと考えられる。また絵図では池は道沿いに画かれており、現在の佐古配水場の東を南北に通る道は絵図に画かれている道と一致するものではないことが考えられる。



出土遺物には染付小碗48、染付蓋49、青磁染付皿50、陶器鉢51、漆椀52、53、木釘54、木箸55、56、墨書き57がある。48は小振りであり、紅皿などとして使用されていた可能性が考えられる。49は内面にはコンニャク印判による五弁花文が施されており、押印段階でつぶれている。外面には一重方形枠を持つ渦巻が描かれている。48は見込みにコンニャク印判による五弁花文を施し、蛇の目釉剥ぎが見られる。53は家紋入りである。57は完形品ではないが、残存部分からは「尼衆」?であろうか。肥前陶磁器はおおむね18世紀後半~19世紀代の年代相を示し絵図と矛盾するものではない。

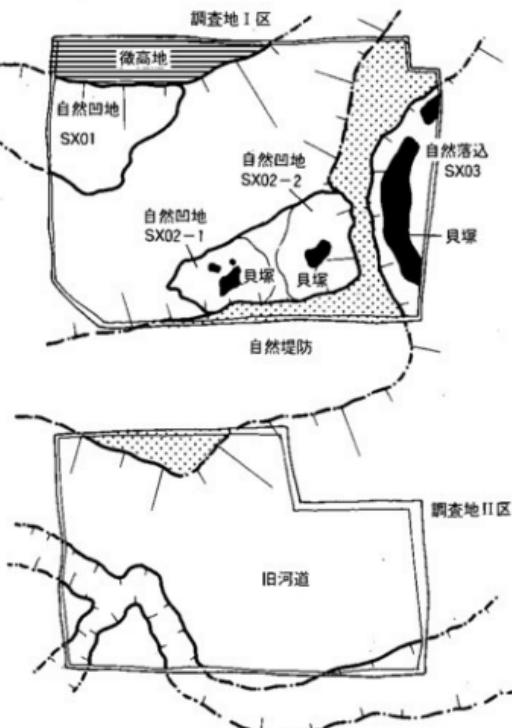
第23図 池SX01出土遺物

2 第5層上面検出遺構（第2遺構面）

調査地における基本層序についてはすでに述べているが、それに基づき第5層上面における古地形の推定復原を第24図に示した。今回の調査地は旧河道ならびに自然堤防さらに後背湿地帯に位置し、北西隅部にわずかな微高地が見られる。微高地を除く低湿地帯は第5層の堆積により形成された地形であり、微高地は第3層の堆積過程における「ある一時期」の産物である。微高地はヒトの基本的生活領域として、住居跡などが存在していると考えられる空間であるが、今回の調査では残念ながら、調査の対象に成り得ていない。

第5層の堆積は自然堤防ならびに後背湿地を形成し、後背湿地の凹地は主としてヒトの生活過程で生ずる不要物資の廃棄場所となり貝塚が形成されている。ここでは第5層上面検出遺構（第2遺構面）と称しているが、自然凹地および旧河道の斜面が廃棄場所として利用されているだけであり、通常の遺構に対する認識とは異なるものである。上層（第3層）検出遺構との関連において、便宜上使用しているに過ぎないことをあらかじめ断っておく。

ところで、第3層の堆積過程のある一時期に生活面が存在し、またその層位的な調査法の困難さも述べてきたところであるが、低湿地帯上に堆積する第3層における生活面の存在の可能性は十分に考えられるところである。しかし今回の調査では、第3層を単純に包含層として取り扱い、下位層出土遺物と層位的な判別を行うことしか成し得ていない。ここでは、第3層出



第24図 古地形推定復原図

土遺物である、深鉢1～5、15～17、壺6～8、13、14、鉢9～11、浅鉢12、18、19、壺20～34、鉢35、36、底部片37、土鍾38、壺39～47、体部片48～52について概略しておく。

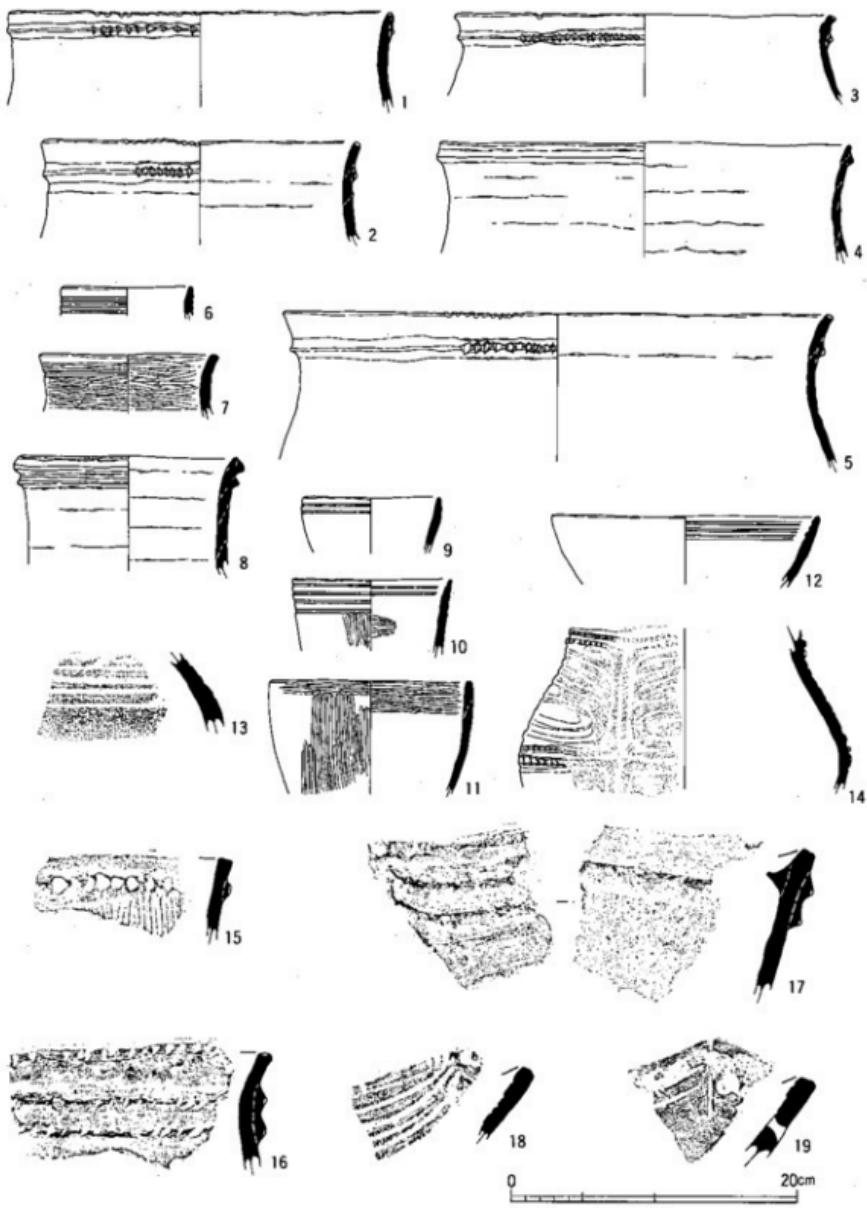
1、3の突帯の形状は幅狭の断面形が半円形状であり、刻目は深く突帯の下部に達する。2の突帯の断面形は半円形が崩れ扁平になり、突帯の刻目は深い。4の突帯の位置は口縁端部直下にあり、断面形は垂れ下がりの三角形を呈する。口唇部および突帯に刻目は入らない。5の突帯は幅広の断面三角形で刻目は深く、突帯の位置は1～4よりさらに下がる。口縁部および頸部にはナデもしくはケズリ後にナデが施され、2、4は内面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。粘土紐の接合はすべて内傾接合である。15は口縁端部を平坦に面取り、頸部に継位の沈線による文様をつける。16は口唇部に刻目を入れ、口縁端部よりやや下がった位置に幅の広い突帯を貼付け、突帯中央部をナデによる押さえ付けにより、見かけ上2条の突帯を作出する。17は波状口縁を呈すると考えられ、外面に2条、内面に1条の突帯を口縁部より下がった位置に貼付ける。外面の突帯貼付法は16と同様である。

6は口縁部直下の外面に3条沈線、7は1条沈線を巡らす。8は口縁端部に接した位置およびやや下がった位置に突帯を持つ。14は体部片であり、削出しによる突帯により長方形の区画が割り付けられ、区画内に浮線文が施される。13は肩部に5条+ α の沈線が入る。

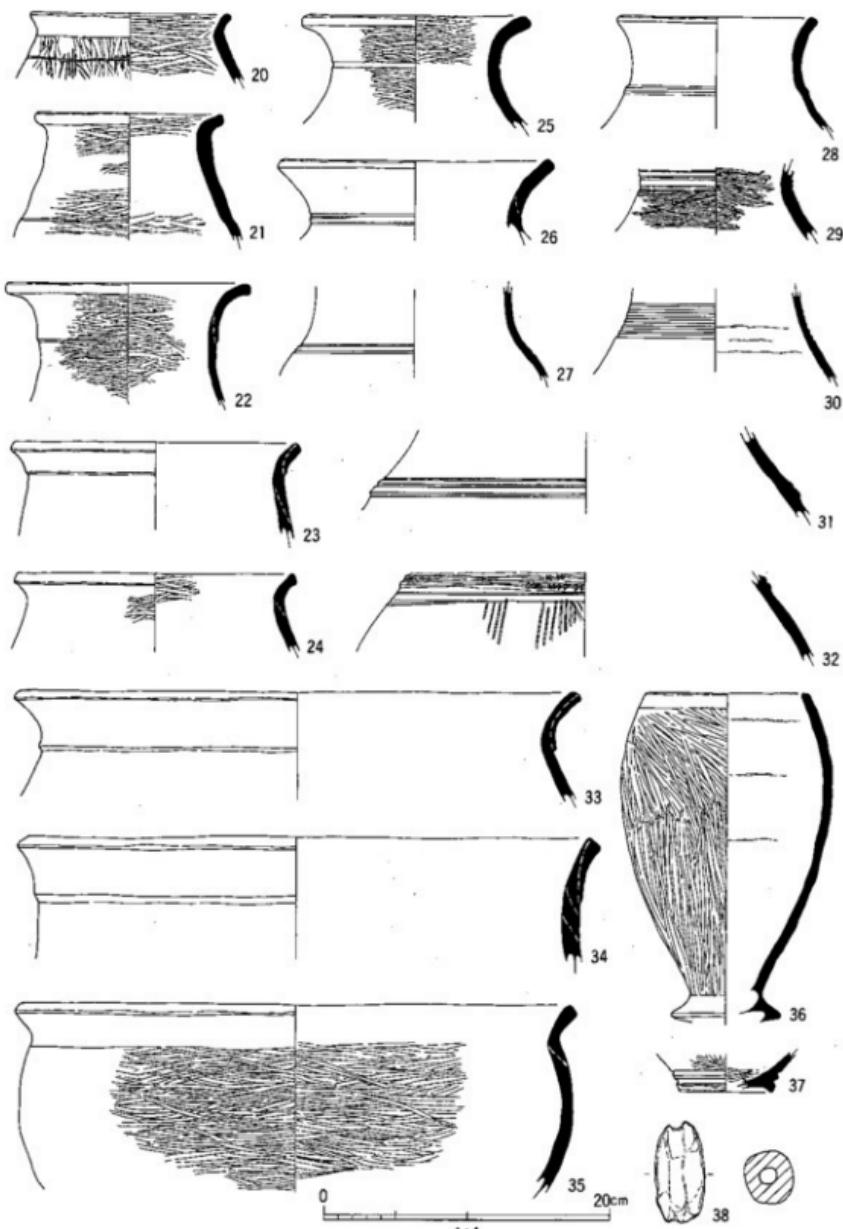
9～11は少し長胴であり、9は口縁部直下の外面に2条の沈線、10は外面に4条、内面に2条の沈線が入る。11は無文であり、口縁部を内外面ともに横位のミガキ、体部外面には継位のミガキが施される。12は平口縁、18、19は波状口縁である。12は内面に3条の沈線が入る。18は内面に5条の沈線が入り口縁端部に刻目を入れる。19は内面に3条の沈線が入り、口縁部下に穿孔を受けている。

20は口縁部が短く外反し、頸部直下にヘラによる文様が描かれる。21は肩部に粘土紐接合時の段を持つが、頸部の段は消失している。22、23、33、34は頸部に粘土紐接合時の段を有するが、不明瞭である。口縁部の屈曲は端部近くに至り大きく外反する。25は頸部に1条沈線、26は2条沈線、27は肩部に2条沈線、28は頸部に1条削出突帯、29は2条削出突帯、30は頸部下位に6条沈線、31は肩部に2条削出突帯、32は肩部に2条削出突帯に刻目を入れ、その下位に多条沈線による山形文が描かれる。36は外面ケズリ後にミガキが施され、粘土紐は内傾接合である。37は外面に2条沈線が入る。38は筒形土鍾である。

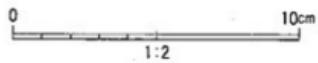
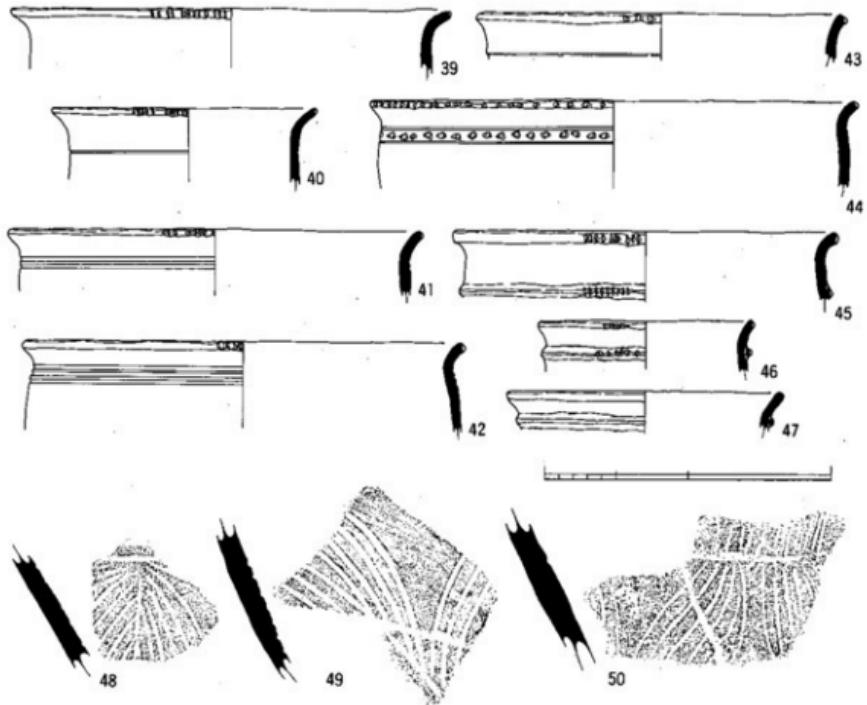
39～47は如意形口縁を呈し、口唇部の刻目は口唇部端に入り、不明瞭なものが多い。40、43は頸部に1条沈線、41は2条沈線、42は3条沈線が施される。44は2条の沈線間に刺突文に入る。45～47は頸部に1条貼付突帯を持ち、45、46には刻目が入るが小さく不明瞭である。48、49は有軸木葉文、50は無軸木葉文、51は6条、52は3条による山形文が描かれる。



第25圖 第3層出土遺物



第26図 第3層出土遺物



第27図 第3層出土遺物

(1) 自然凹地SX01

調査地I区の北西隅部の微高地の落ち際に位置する自然凹地であり、調査地外西方へ広がる。凹地の高低差は最大30cmを測る。動物遺体は出土しているが、貝塚の形成は見られない。

出土遺物には縄文土器深鉢1～5、浅鉢6～9、弥生土器壺10～13、15、16、高杯17、体部片18～23、打製石鎌24～26、両刃磨製石斧27、石棒28～30がある。

1は1条突帯であり口唇部に刻目が入る。突帯は幅狭の断面形が半円形状を呈し、刻目は浅い。頸部にナデが施されることにより、胴部のケズリと明瞭な稜線により境界が生ずる。

2は2条突帯であり、口唇部に刻目が入る。突帯の形状は崩れ、扁平もしくは幅細であり、刻目の入れ方も乱雑である。口縁部下の突帯の位置はかなり下がる。3は2条突帯であり、幅細の突帯に刻目は深く入り、肩部の刻目の入れ方は乱雑である。4は突帯の位置が口縁端部に接し、断面形が垂れ下がりの三角形を呈し、口唇部に刻目は入らない。

5は口縁部下に2条突帯をもち、突帯は幅細の粘土紐を別々に貼付けるものであり、幅広の粘土紐をナデることにより、見かけ上の2条に仕上げるものではない。

6～8は波状口縁であり、6は外面に2条の幅広の沈線、7、8は内面に3条沈線を入れる。いずれも口縁端部は平坦であり、7の口縁端部には刻目が入る。

9は黒色研磨の純形を呈する。口縁部直下に3条沈線が引かれ、沈線間に縦位の刻目が入る。体部上半には三叉文を利用した区画が割り付けられ、区画内に無軸の木葉文が描かれる。

10は頸部に沈線化した不明瞭な段を持ち、胎土色は褐色系である。11は肩部に2条沈線が入り、胎土色は黒色系である。12は肩部に段を持ち、段部付近に3条沈線が入り、胎土色は白色系である。13は削出による2条突帯に刻目が入る。胎土色は黒色系である。14は頸部および肩部に不明瞭な段を残し、頸部に3条、肩部に4条の沈線が巡り、体部には3条沈線による円弧文が描かれる。胎土色は褐色系である。

15、16は如意形口縁であり、頸部に1条の沈線が入るが、16の沈線の位置は下降している。口縁端部下端に小さな刻目が施される。いずれも胎土色は白色系である。

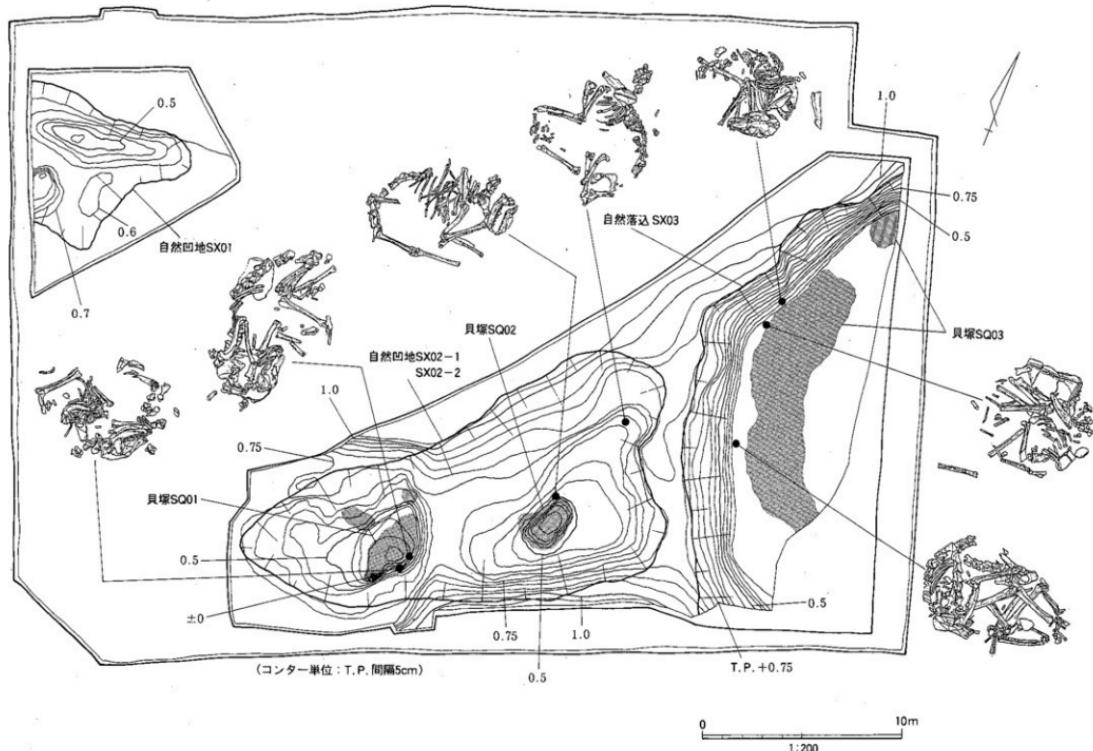
17は杯部と脚部の境界に1条の貼付刻目突帯を持つ。胎土色は白色系である。

18は有軸木葉文、19は無軸木葉文、20、21は円弧文、22は山形文の下位に沈線間に2段の刺突文、23は3条沈線間に刺突文が施される。18の胎土色は白色系であるが、19～23の胎土色は褐色系である。

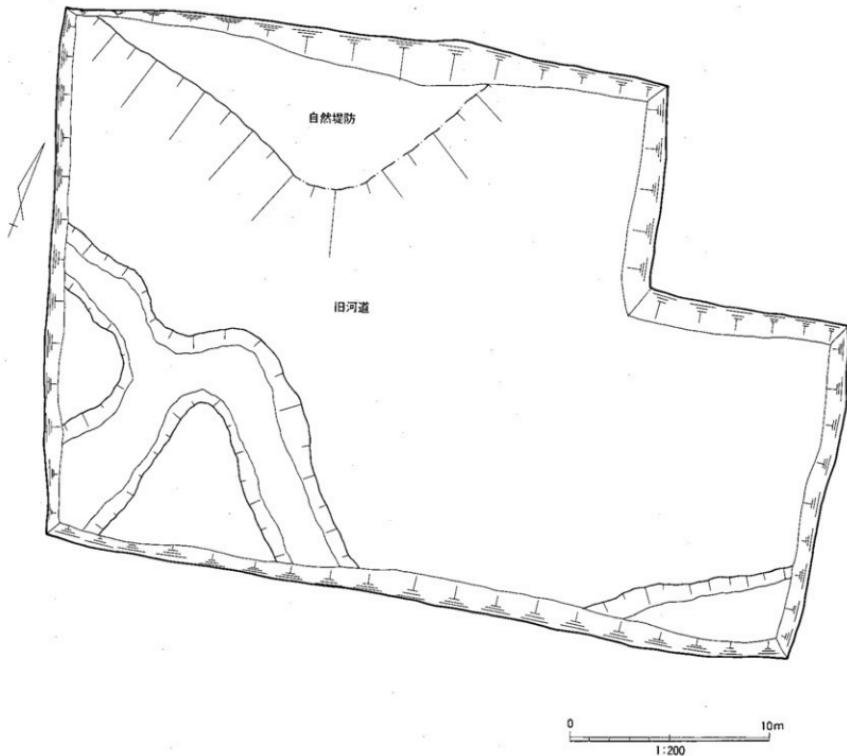
24～26は短冊形を呈する緑色片岩製である。

27は尖基部を呈する縄文系の両刃磨製石斧である。刃部は使用により潰れている。緑色岩製である。

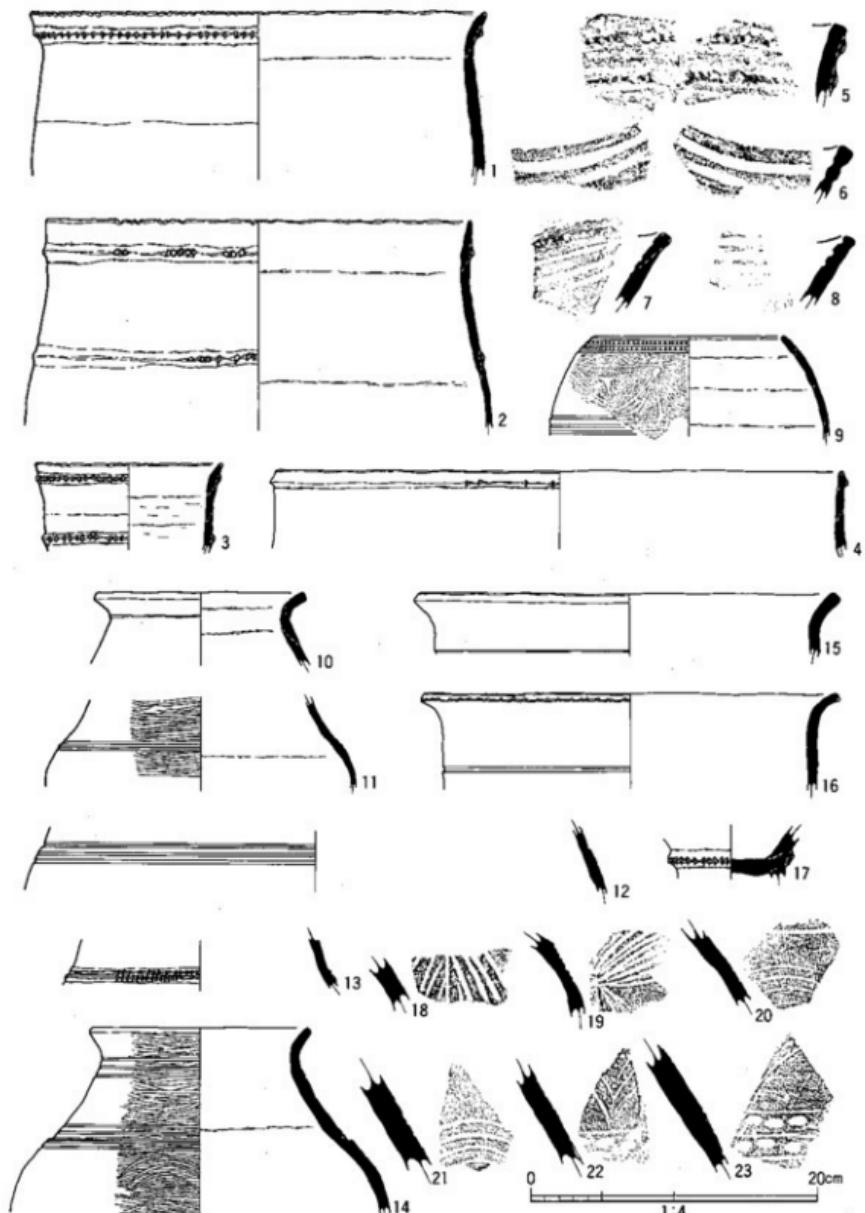
28、30は緑色片岩製、29は緑色岩製であり、29は研磨により器形を整え、30は両側面に敲打による成形痕が見られる。



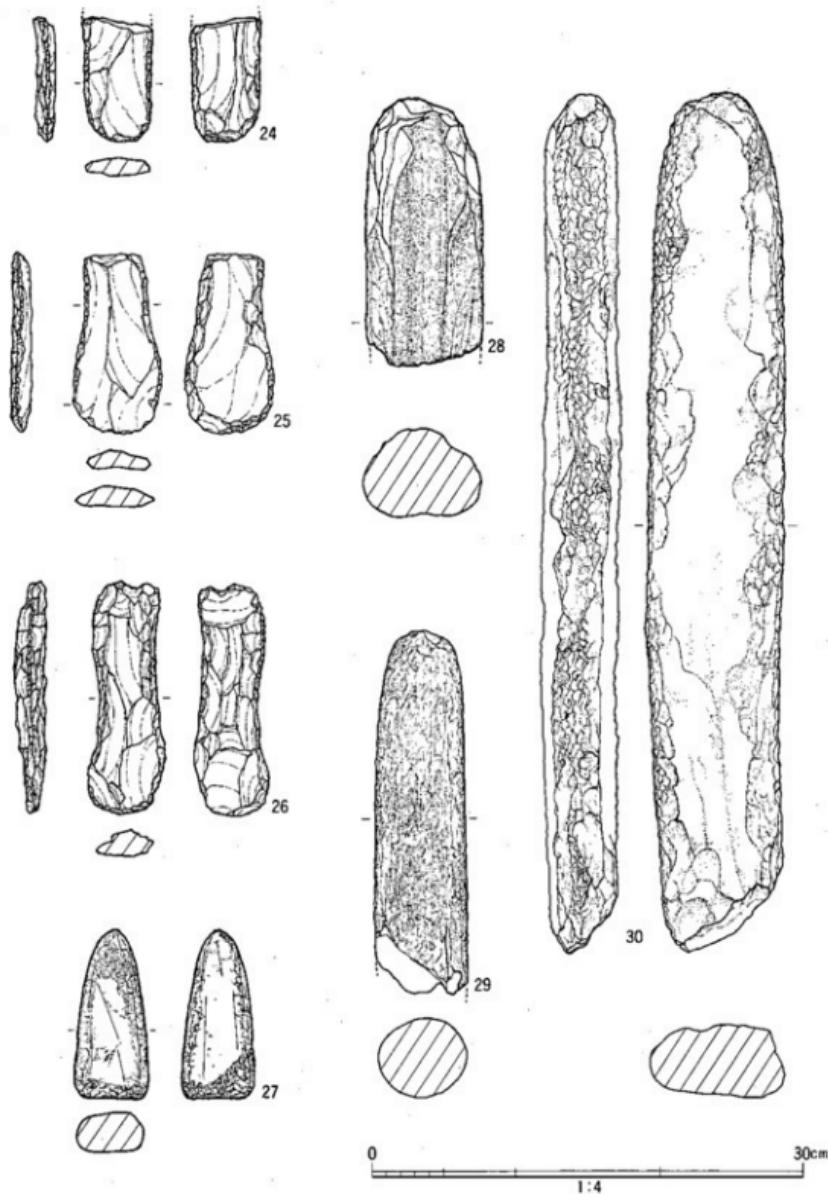
第28図 調査地1 区遺構配置図（第5層上面）



第29図 調査地Ⅱ区遺構配置図（第5層上面）



第30図 自然凹地SX01出土遺物



第31図 自然凹地SX01出土遺物

(2) 自然凹地SX02

長径23m、短径10mの平面形が不整長円形を呈する自然凹地であり、センターから判断するとSX02内には二つの凹地が隣接して存在する。西側の凹地をSX02-1、東側の凹地をSX02-2とする。

SX02-1は長径9.5m、短径6.5mの平面形が不整長円形を呈し、高低差は最大70cmを測り、南東隅部付近のセンター間隔が急激に狭くなる。この部分に長径5m、短径3mの不整長円形を呈し、層厚25cmを測る貝塚が形成される（貝塚SQ01）。また北側斜面には長径1.5m、短径1mの長円形を呈するもの、また径1mの円形を呈し、層厚5cmを測る小規模な貝塚も見られる。貝層下に埋葬状態のイヌ2体を確認している。ただし埋葬に伴う掘形は見られない。

出土遺物には深鉢1～4、底部片5～7、浅鉢8～10、舟形土器11、壺12、13、15～18、甕14、底部片19～22、打製石鋸23～27、扁平両刃石斧28、円柱状石斧29、石棒30～35、叩石30、磨製石斧37、石鏡38～52、石錐53のほか大量の自然遺物がある。

1、2は1条突帯であり、口縁端部よりやや下がった位置に断面形が幅広の三角形を呈する突帯を持つ。刻目は突帯の中位にとどまるが、下部に至るものも見られる。口唇部への刻目は入らない。頸部にはナデが施され、1は頸部と胴部の境界に明瞭な稜線が生ずるが、2の稜線は不明瞭である。3、4は口唇部に刻目を入れ、3の突帯は断面形が幅狭の三角形、4は形状が崩れ扁平化したものである。いずれも刻目は下部まで深く入り乱雑である。5は丸底の底部に輪状の粘土紐を接合し平底にしている。6、7は尖底である。

9は肩部に3条沈線を入れる黒色研磨土器である。10は底部と体部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が短く外反する黒色研磨の浅鉢である。体部には縦線による区画内に三叉文が入る。11は舟形を呈するもので、内外面にミガキが施される。

12、13は頸部に段を持つものであり、12の頸部のハケ調整は粘土紐接合以前のものである。13は体部外面に横位のヘラミガキが施される。いずれも胎土色は白色系である。

14は如意形口縁を呈し、口縁部端面下端に刻目が入る。胎土色は白色系である。

15は頸部に1条沈線、16は3条沈線、18は1条削出突帯、17是有軸木葉文が描かれる。

19、21、22は外面に横位のヘラミガキ、20はヘラミガキ+ハケが施される。胎土色は15、17～22が白色系、18は黒色系である。

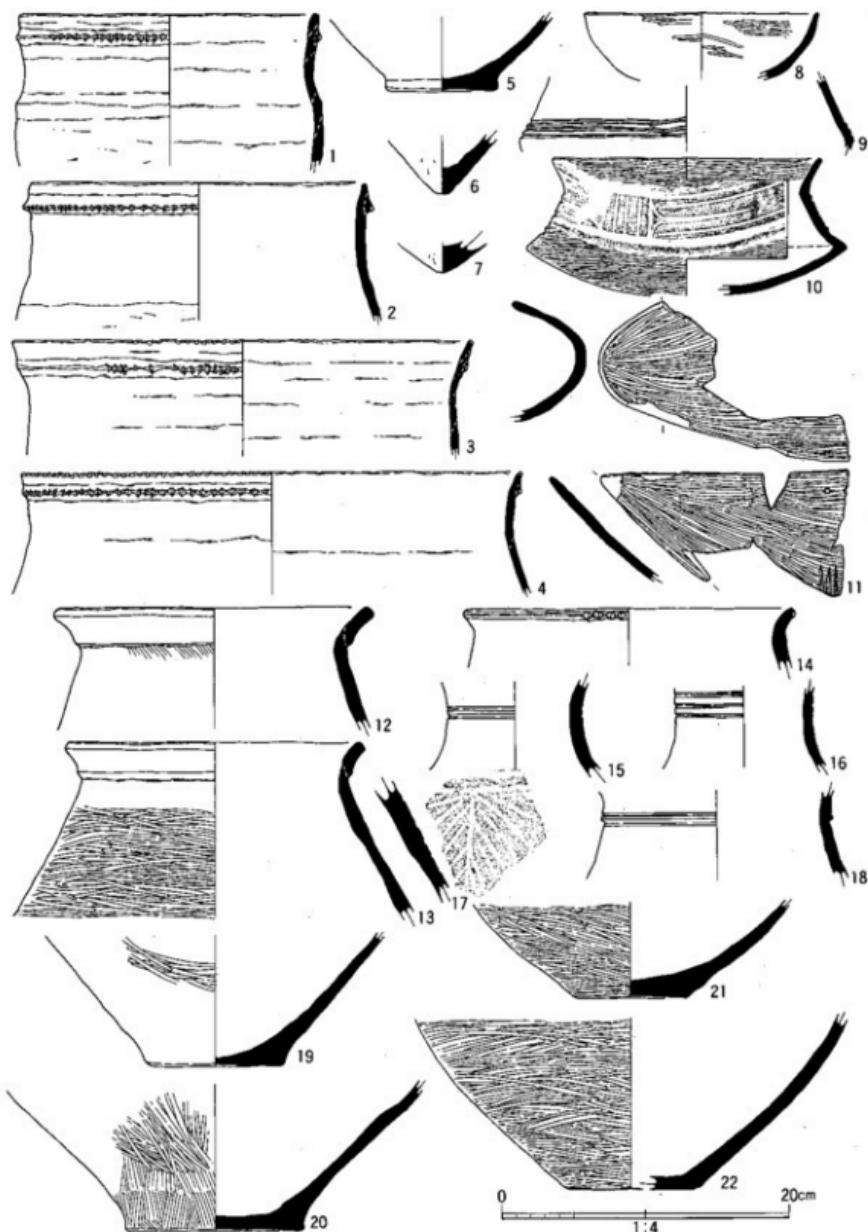
23は短冊形を呈する緑色片岩製、24～27はバチ形を呈し、24、26は緑色岩製、25、27は藍閃片岩製である。

28は泥岩製、29は泥質片岩製である。

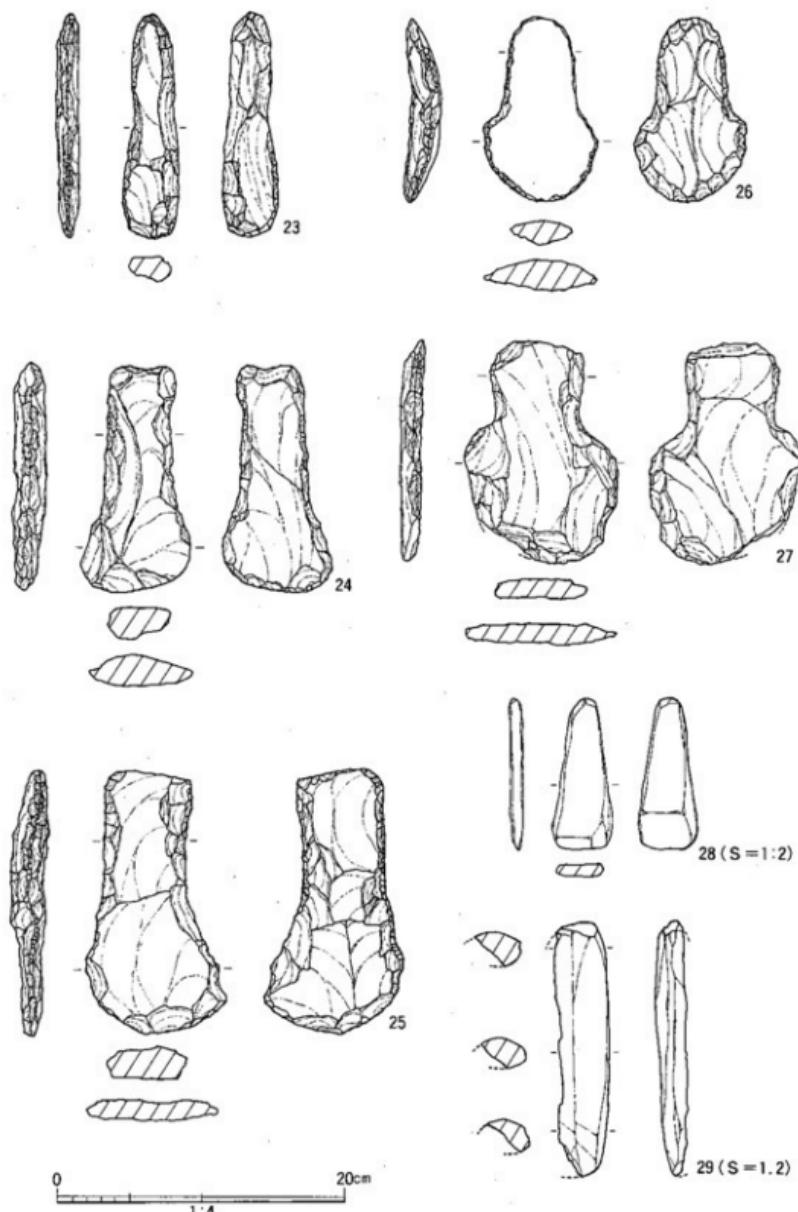
30、32、34は藍閃片岩製、31は泥質片岩製、33、35は点絞泥質片岩製である。

36、37は安山岩製である。

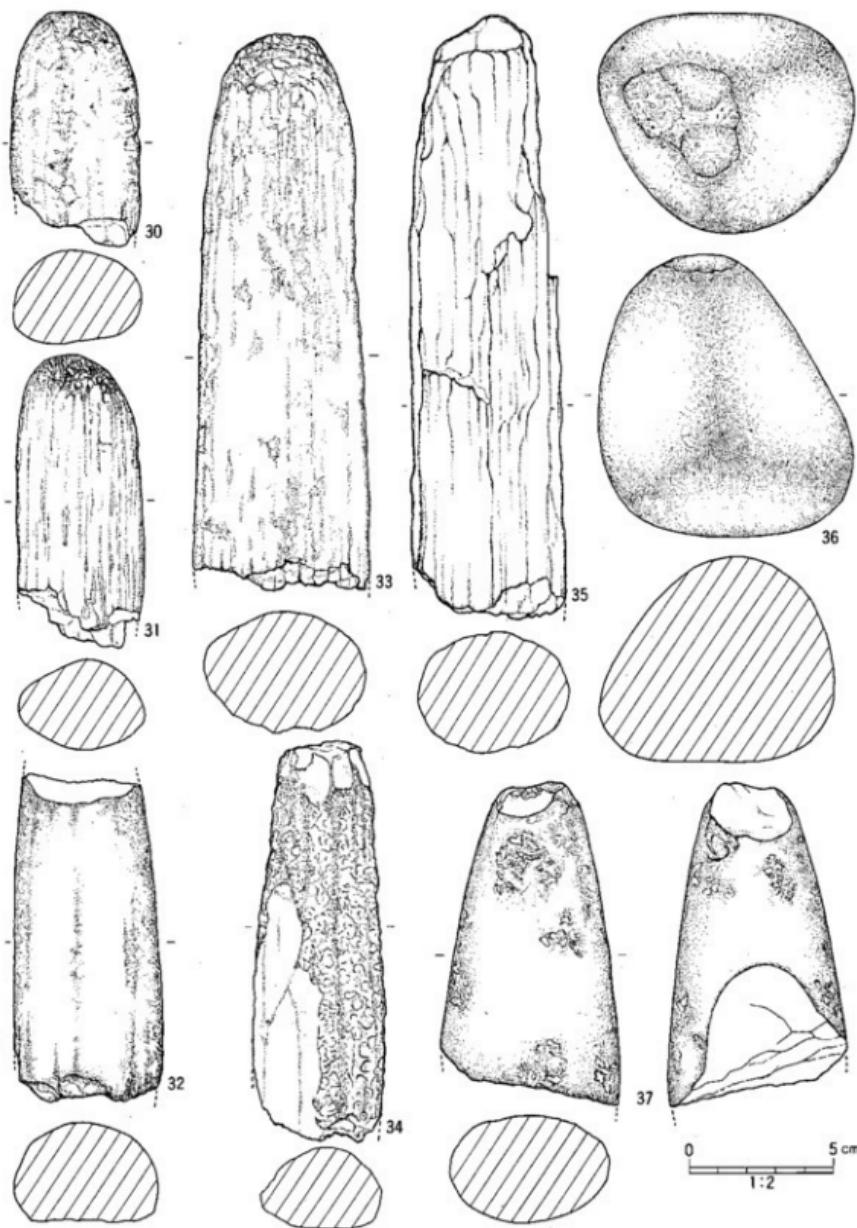
石鏡、石錐はサスカイト製である。石鏡は凹基無茎であり、39、40、41、51のように主要剥離面を大きく残存せるものがあり、調整ならびに整形による手法が見られる。



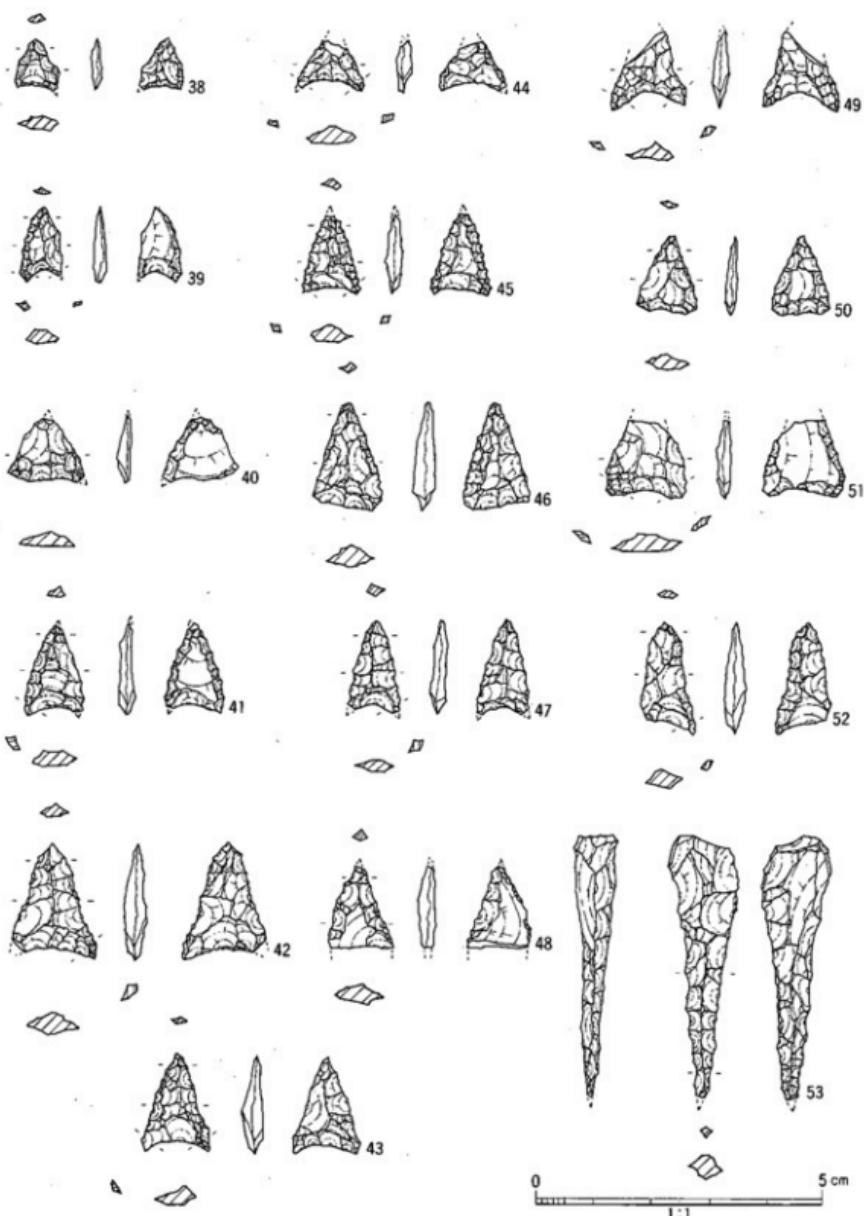
第32図 自然凹地SX02-1出土遺物



第33図 自然凹地SX02-1出土遺物



第34図 自然凹地SX02-1出土遺物



第35図 自然凹地SX02-1出土遺物

SX02-2は長径10m、短径5mの不整長円形を呈し、高低差は最大40cmを測り、ほぼ中央部の凹地のセンターに重複して、長径3m、短径2mの平面形が長円形を呈し、層厚15~20cmを測る貝塚を形成する（貝塚SQ02）。貝塚部および北東斜面にイヌの埋葬が行われる。ただし埋葬に伴う掘形は確認されていない。

出土遺物には、深鉢1~8、10~15、29~32、壺9、17、鉢16、18、19、25、浅鉢20~24、33、底部片26~28、体部片34、35、36、37、43、壺38、39、44~47、鉢40、高环41、42、打製石器48~51、叩石52、石棒53、石鐵54、石錐55がある。

1~3は2条突帯であり、突帯は幅狭であるが、断面形が高さのある整然とした三角形を呈し、刻目は小さくて浅い。口縁部の突帯は端部よりやや下がった位置にあり、口唇部への刻目は施されない。

1、2は肩部から頸部への屈曲が顕著でなく、連続的に立ち上がる。3は頸部が内傾し、口縁部が外反するプロポーションであり、胎土色が白色系を呈する異例なものである。

4~7の突帯は幅狭で低位な断面形が三角形を呈するものであり、刻目は大きく深く入るもののが見られる。いずれも口唇部へ刻目が入る。

8の突帯の断面形は扁平な半円形状を呈し、刻目は大きく深く入る。4、8は肩部から内傾し口縁部が外反する形態であり、5~7は肩部での屈曲が明瞭ではなく、口縁部が強く外反する形態を呈する。

10~15は1条突帯であり、頸部にはケズリ後にナデを施すことにより、10、11のように体部との境界に明瞭な稜線が生ずるものがある。

12~15の稜線は不明瞭であるが、ナデによる境界の分別は明確である。突帯幅狭で低位な断面形が三角形を呈するもの、扁平な半円形状を呈するものであり刻目は大きくて深いものや小さくても不連続で乱雑なものである。10の口唇部には刻目は入らないが、10~15の口唇部には刻目が入る。

29、30は口縁端部を平坦に面取り、頸部に縦位の沈線による文様が入る。

31は口縁端部よりやや下がった位置に幅広の粘土紐を貼付け、ナデを施すことにより中央部を窪ませ、見かけ上2条突帯を作出するものである。口唇部には刻目が入る。

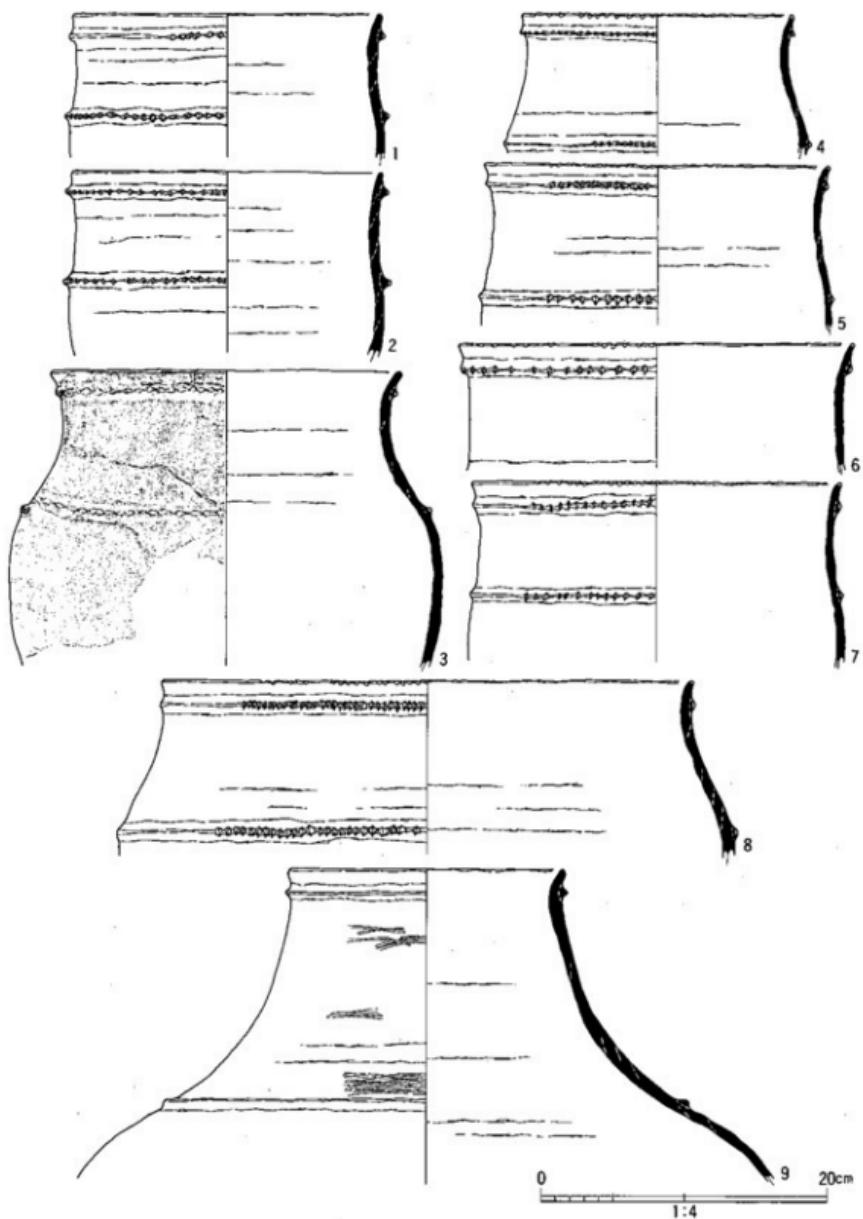
32は波状口縁の深鉢であると考えられ、口縁端部直下に口縁部に同調するように、波状に2条の刻目突帯を付け、さらに縦位にも突帯を付けるものである。

9は口縁部直下および肩部に突帯を持つ。

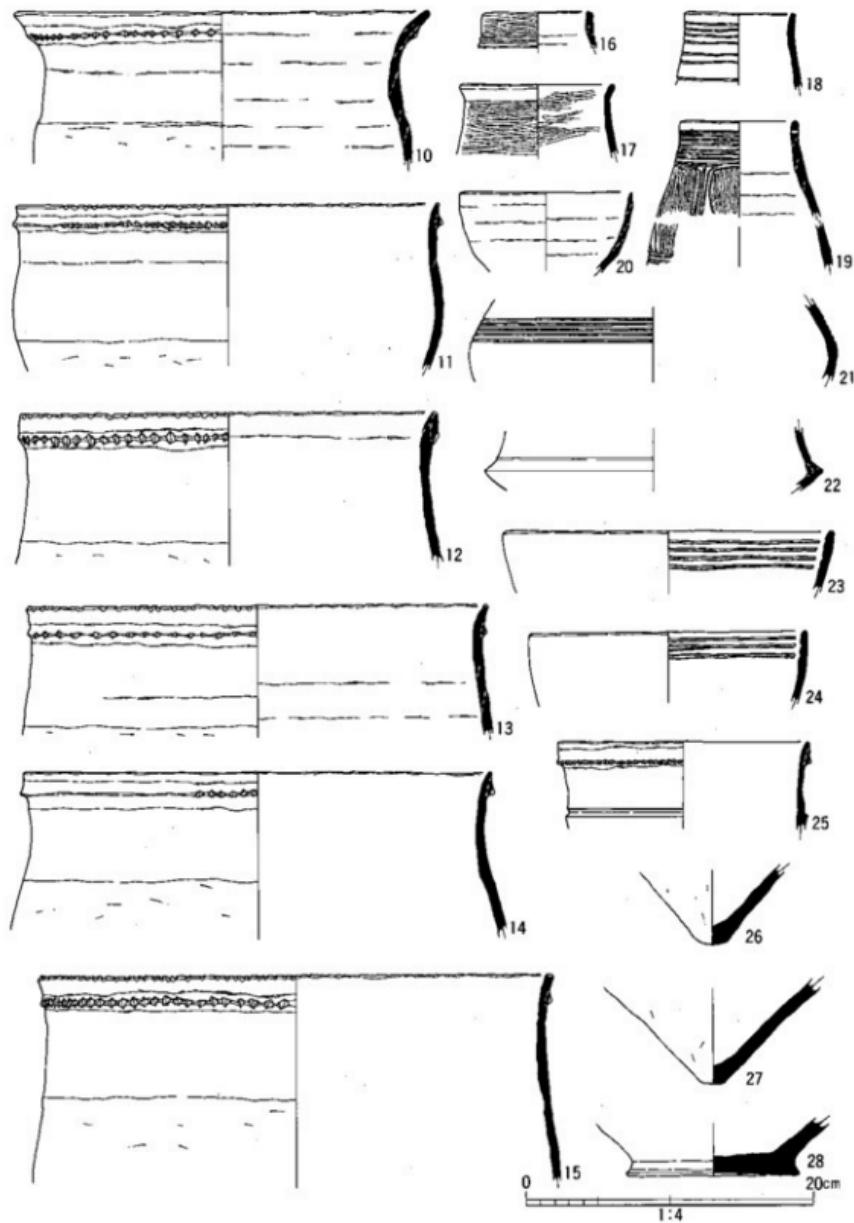
17は口縁部が短く外反し、内外面にミガキが施される。

16、18は頸部に多条沈線が入るものと考えられる。

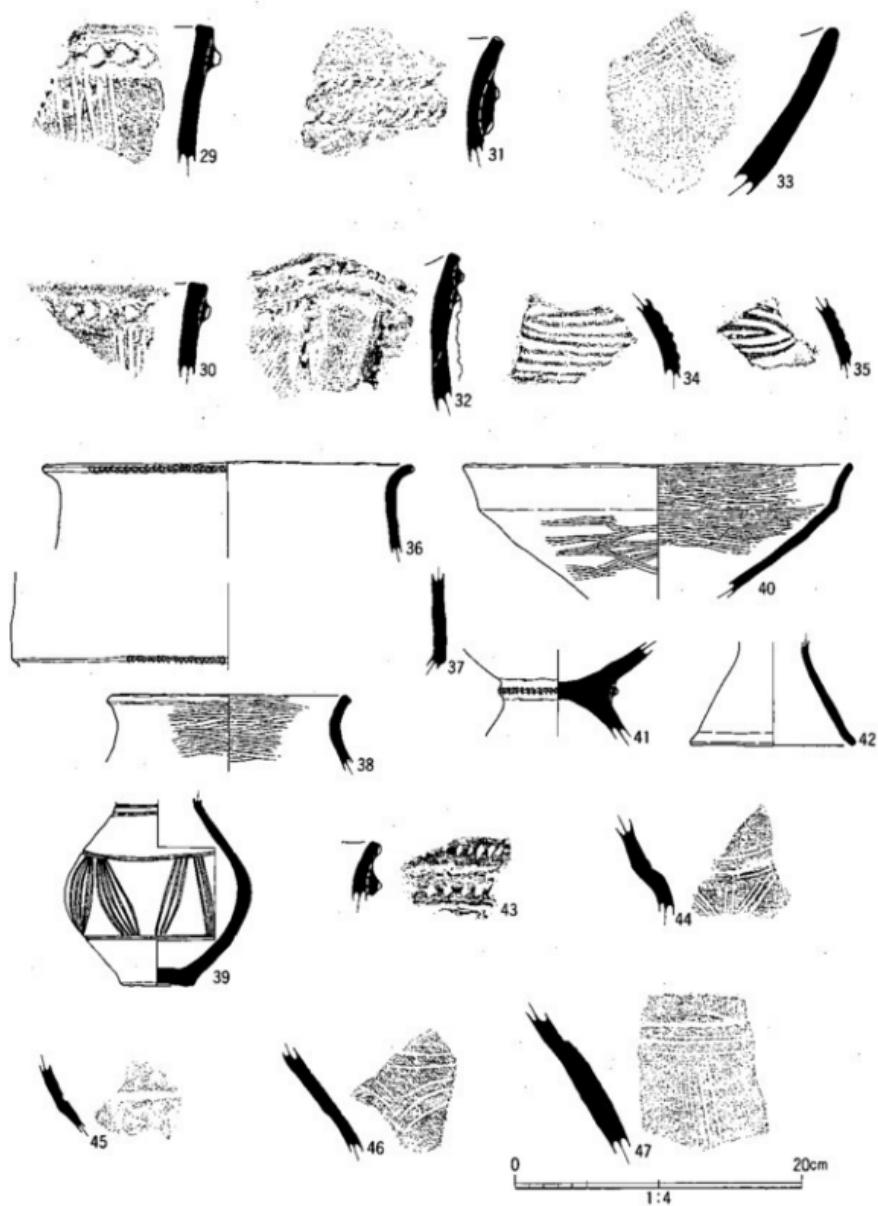
19は頸部に7条の沈線が巡り、体部は横位の沈線により区画された後、三叉文を利用した縦位の沈線により7つの区画に分けられる。口縁端部に穿孔がみられる。



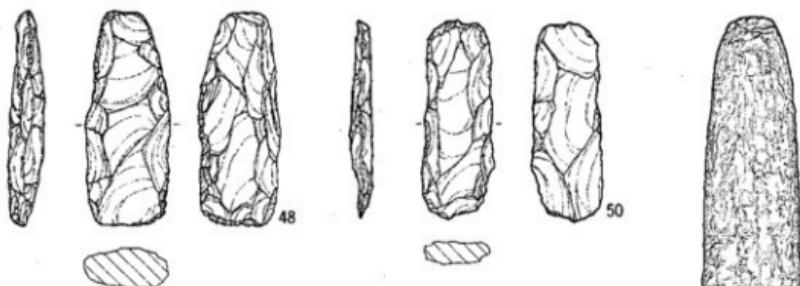
第36図 自然凹地SX02-2出土遺物



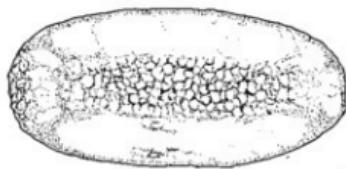
第37図 自然凹地SX02-2出土遺物



第38図 自然凹地SX02-2出土遺物

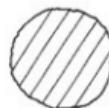


0 30cm
1:4



10cm

0 1:2



第39図 自然凹地SX02-2出土遺物

- 21は肩部に5条沈線に入る。
- 22は自然凹地SX02-1出土の浅鉢10と同形態であり、ベンガラによる赤色塗彩が施される。
- 20、23、24は平口縁であり、23、24の口縁部内面には4条の沈線に入る。
- 25は口縁部直下に刻目突帯、肩部に1条沈線に入る。
- 26、27は尖底、28は丸底部に輪状の粘土紐を接合したものである。
- 33は波状口縁であり、口縁部内面に3条沈線、縦位に2条沈線に入る。
- 34、35は浮線文である。
- 36は如意形口縁を呈し、口唇部の刻目は下端に入る。37は胸部に段を持ち、刻目が入るものであろうか。いずれも胎土色は白色系である。
- 39は頸部に2条+ α の沈線、体部には横位に沈線による区画内に無軸の木葉文が描かれる。胎土色は褐色系である。
- 40は杯部が直線的に斜上方へ立ち上がり、外反しながら屈曲し、明瞭な稜線が生ずる。体部内外面に横位のヘラミガキが施される。胎土色は褐色系である。
- 41は杯部と脚部の境界に1条の刻目突帯を持つ。胎土色は白色系である。42は脚部であると考えられる。胎土色は褐色系である。
- 43は口縁部直下に1条の刻目突帯を付け、口唇部への刻目は下端に入る。
- 44、47は肩部に段を持つものであり、44は段に並行して3条沈線、47は4条沈線を巡らし、体部には沈線文様が描かれる。44はベンガラによる赤色塗彩が施される。45は肩部に1条沈線を入れ、その下位に沈線文様が入る。46は円弧文が描かれる。43~47は胎土色がいずれも褐色系である。
- 48~50は短冊形、51はバチ形を呈し、48は砂質変岩製、49、50は緑色片岩製、51は石英変岩製である。52は砂岩製、53は泥質片岩製である。
- 54、55はサヌカイト製である。54は凹基無茎、55は先端を欠損するが、先行剝離面を大きく残存させている。
- (3) 自然落込SX03
- 調査地II区での古地形を考慮すれば、調査地II区の東部で北上し、調査地I区の東部で、北東方向へ流れを変える旧河道の斜面部にあたるものと考えられ、落込の高低差は1m以上を測る。落込ラインに沿って、幅3m、長さ15mの帶状に層厚50cmの貝塚が形成される。ただ2.5mの間、貝塚が形成しない箇所が見られる。貝塚形成部より上位の斜面に、最低個体数3体のイヌが埋葬状態で発見されている。ただし埋葬に伴う掘形は確認されていない。
- 出土遺物には深鉢1~22、39~41、壺23~25、29、鉢26、27、34~38、42~48、浅鉢30~33、壺49~57、58~62、鉢63、64、底部片65~67、体部片68~77、打製石錐78~82、打製穂摘具?84磨製石斧85、叩石83、石棒86~94、台石95、凹石96~98、砥石99、石鐵100~165、石錐166がある。

深鉢は2条突帯であり、突帯は断面形が低位の三角形、扁平な半円形状を呈するもので、刻目は突帯下位、あるいは体部にまで達するものであり、口唇部には刻目が入る。プロポーション的には頸部以上が内傾し口縁部が外反するもの（1～3、6、8、14、17～19）、肩部から内窓気味に立ち上がるるもの（5、7、9～11、13、15、16）、胴部から頸部へ連続的に立ち上がり口縁部で外反するもの（4、12）がある。

20は波状口縁であり、口縁部内面に刻目突帯をもつ。口縁部下の突帯刻目はユビオサエによる4単位の大刻目を基準にその間に小刻目を付けるものである。21は波状口縁に同調し、口縁部と肩部の突帯も波状を呈する。22は口縁部と口縁部の突帯が波状を呈する。

23は波状口縁であり、口縁部下に2条突帯を付ける。突帯刻目は20と同様、ユビオサエによる4単位の大刻目を基準に小刻目を配するものである。口唇部にも刻目が入るが、内外両端部に施されるものである。

29は円形小刺突文が縱横に規則的に配され、区画内にはヘラによる多条沈線が文様的に描かれる。外面にはヘラミガキが施され、内面には内傾する粘土紐の接合痕を明瞭に残す。

24、25は頸部に沈線を持ち、25は内外面に横位のヘラミガキが施される。

26の体部上位には沈線による円弧状の文様、体部中央に4条の沈線を巡らす。この内中央2条の沈線間には刻目が入る。体部下半の文様は自然凹地SX02-2鉢19の体部に見られる文様に類似する。

27は口縁部下に刻目突帯、肩部に1条沈線を入れる。28は肩部に5条の沈線を持ち、内外面ともにヘラミガキが施される。

30、31はボール状を呈し、30は外面にヘラミガキが施され、内傾する粘土紐の接合痕が内外面に顕著に見られる。31の口縁部下には1条刻目突帯が付く。32、33は皿状を呈する。33の口縁部内面には2条沈線が入る。

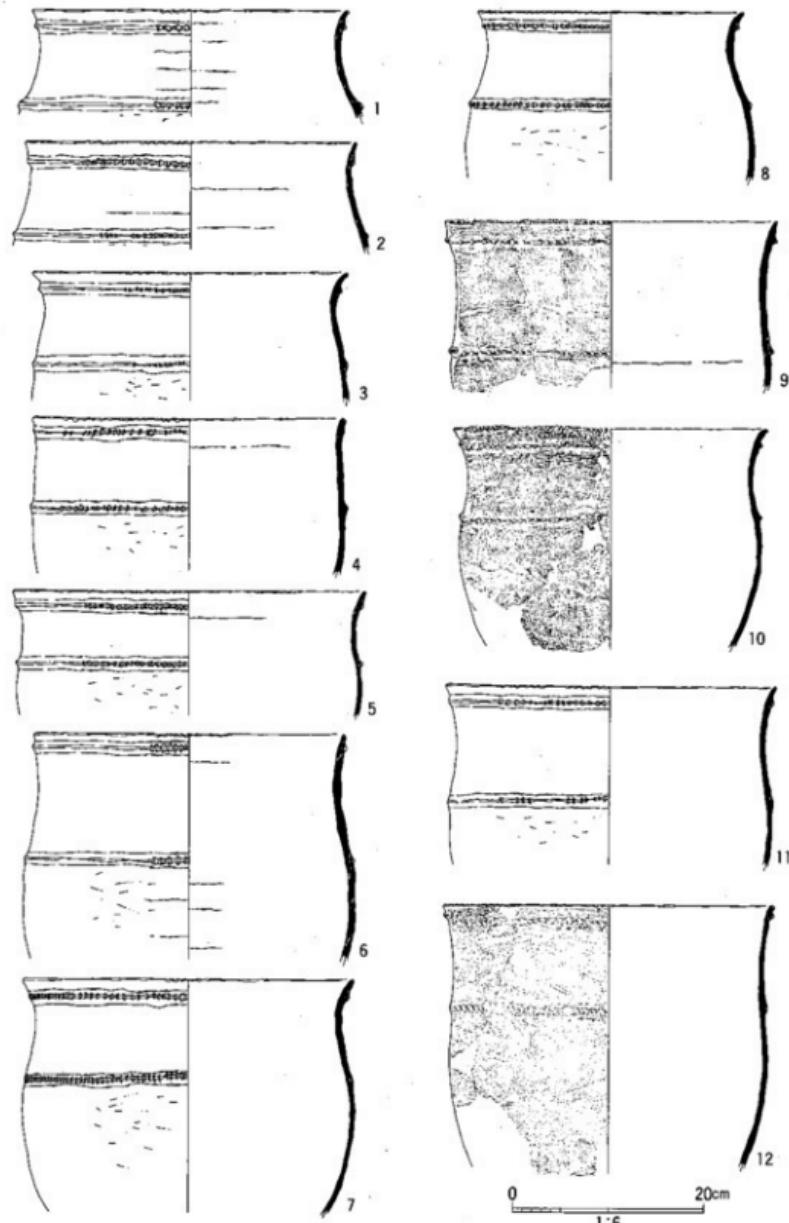
34、35は砲弾形であり、35は外面に縦位の2条沈線、口縁部内面に横位の2条沈線が入る。

36は砲弾形であり、口唇部に十数個の刻目が一単位となり間隔を開けて刻目が入る。この刻目が体部の縦位沈線を引く際の目安となり、区画作出のための基準的な割付の役目を果たしている。縦位の沈線を引いた後、円弧状の沈線文様を入れる。

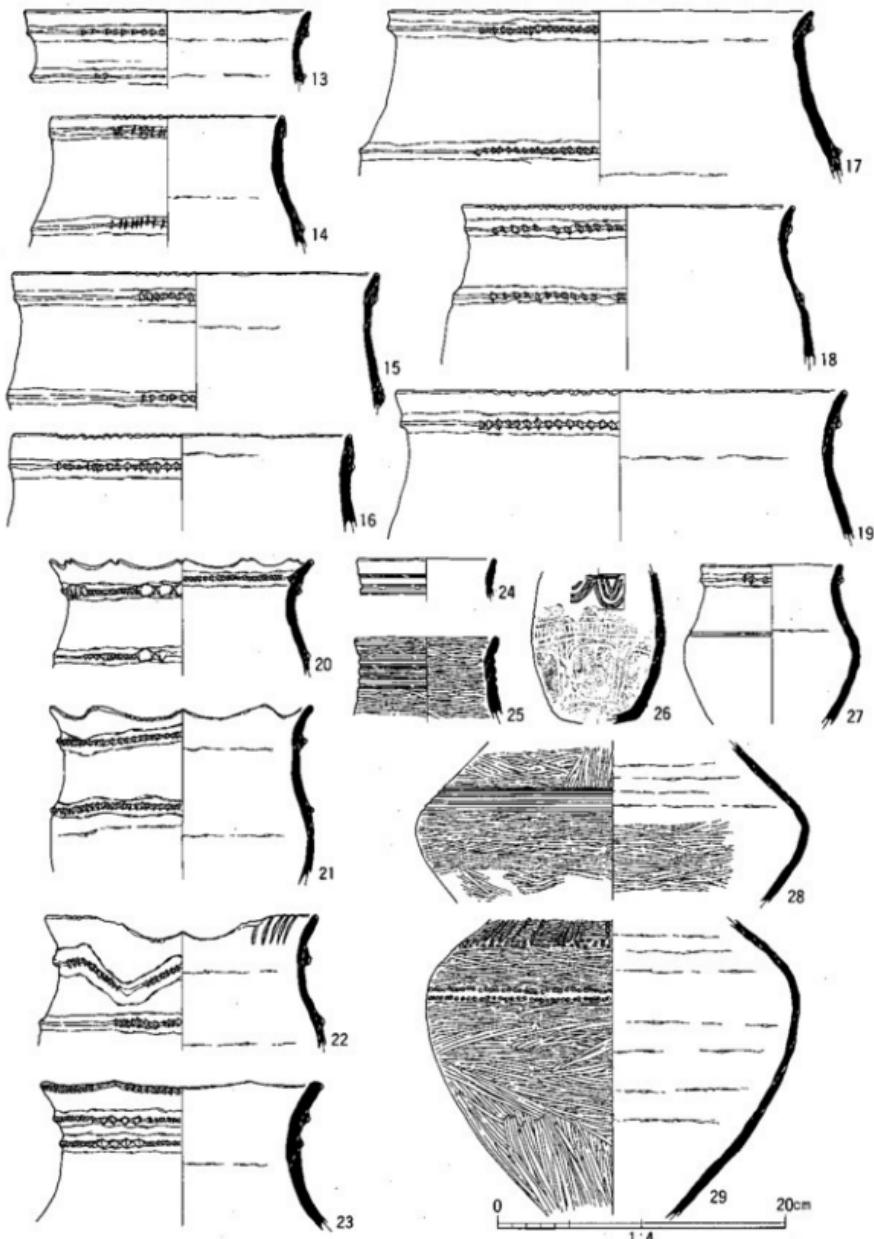
37は頸部と肩部に1条沈線が入る。38は波状口縁であり、口縁部内面に5条沈線が口縁部の形状に同調する。内外面共にヘラミガキが施される。底部は平底である。

39は口縁部下に幅広の粘土紐を貼付け、ナデにより2条の突帯を作出するものであるが、突帯は明瞭ではない。口唇部へ刻目が入る。

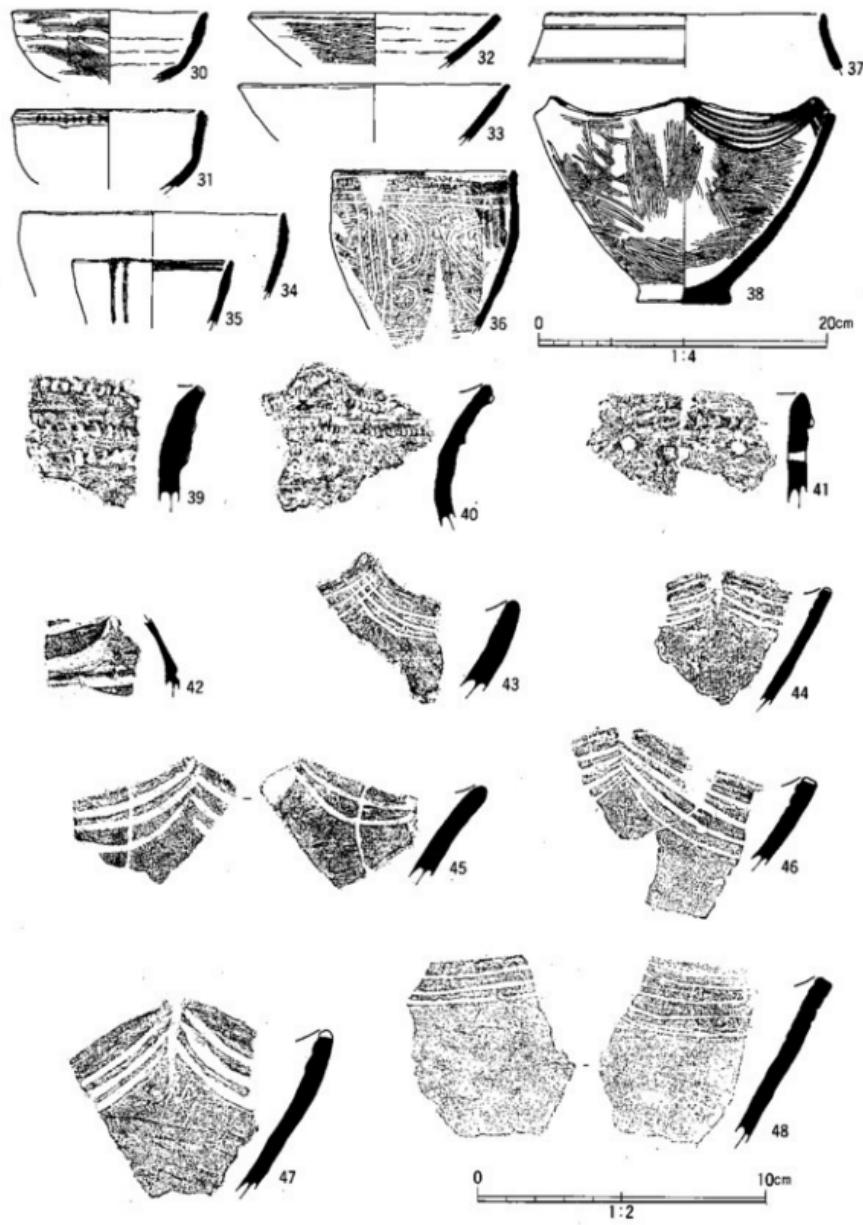
40は波状口縁であり、口縁部直下の突帯は口縁部の形状に同調するが、下位の突帯は横位に貼付けられる。41は孔列文土器である。42は浮き彫りのモチーフをもち、ベンガラにより赤色塗彩される。43～48は波状口縁を呈し、口縁部下内外面に沈線が入る。



第40図 自然落込SX03出土遺物



第41図 自然落込SX03出土遺物



第42図 自然落込SX03出土遺物

49~52は頸部が短く外反し、頸部に段は持たない。内外面に横位のヘラミガキが施される。いずれも胎土色は白色系である。

53は頸部に段をもつが、シャープさはない。口縁部の外反は頸部よりやや立ち上がった部位で屈曲する。胎土色は褐色系である。

54は頸部に段をもち、口縁部の外反は53と同様に頸部よりやや立ち上がった位置で屈曲する。頸部にハケが施されているが、粘土紐接合以前の調整であり、体部外面および口縁部内面には横位のヘラミガキが施される。胎土色は白色系である。

55は頸部に段をもち、口縁部は短く外反し、頸部直上で屈曲し、53、54の屈曲位置より下位で、口縁部径は小さい。肩部に1条沈線が見られる。体部外面および口縁部内面に横位のヘラミガキ、体部内面にはハケが施される。胎土色は白色系である。

56は小型であり、短く外反する口縁部と肩部付近に沈線を持つ。体部外面および口縁部内面と体部内面に横位のヘラミガキが施される。胎土色は白色系である。

57は頸部下に5条+ α 沈線が入る。胎土色は褐色系である。

58~61は如意形口縁を持ち、58は頸部に1条の刻目突帯を持つ。58、59の口唇部への刻目は下端に入る。胎土色は褐色系である。

60は短く外反する口縁部から直線的に窄まる体部を持ち、口縁部に刻目は入らない。胎土色は白色系である。

61は如意形口縁であり、口唇部への刻目は3個一単位のものが間隔をとり口唇部下端に入る。体部は少し膨らむ。胎土色は白色系である。

62は胴部に段をもつものであろうか。体部外面にヘラミガキが見られる。

63は体部上位で屈曲による明瞭な棱線をもち、口縁部は短く外反する。内外面共に横位のヘラミガキが施される。胎土色は褐色系である。

65、67はハケ、66はヘラミガキが施される。

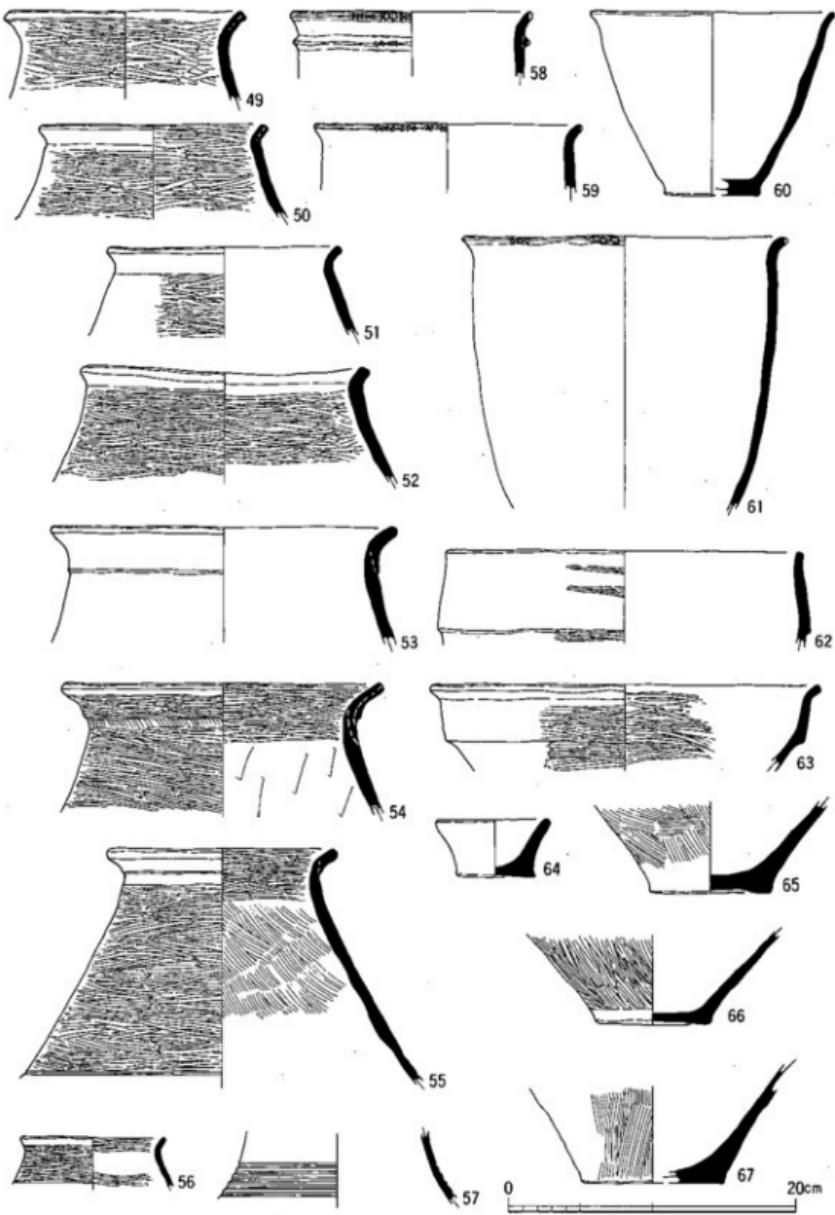
68~71は3条沈線による山形文、72、73は3条沈線文様、74~76は木葉文、77は円弧文が施される。

78~82は短冊形を呈し、78、80~82はサヌカイト製、79は石英変岩製である。

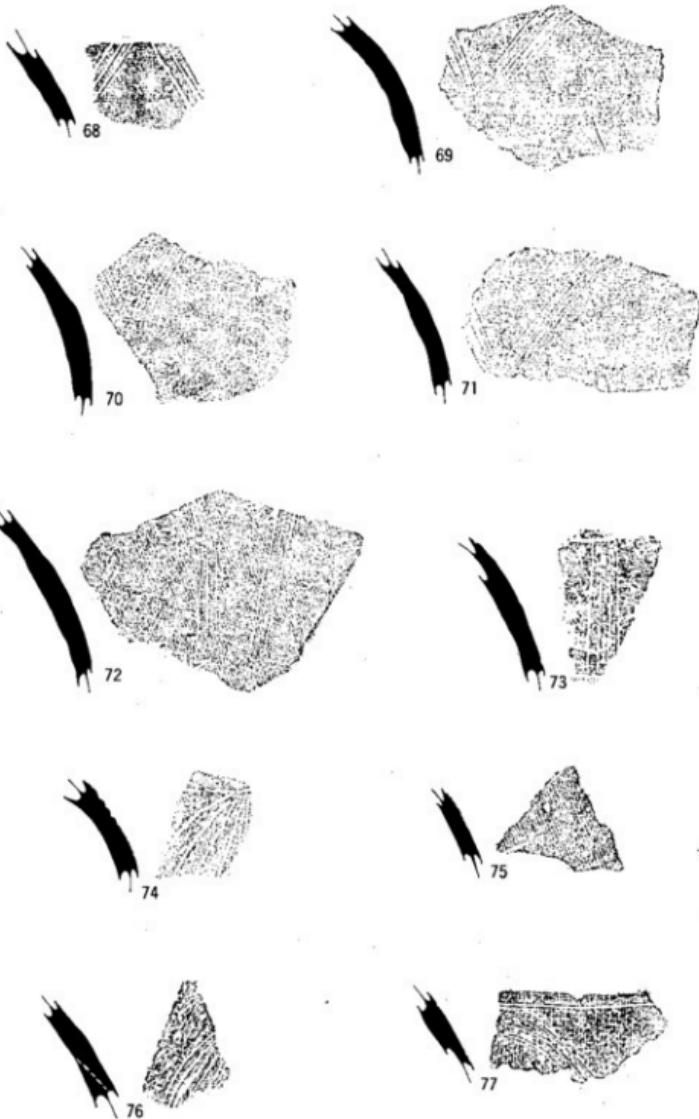
83は砂岩製、84は泥岩製で両端が折れており、石鎚の可能性が考えられる。85は緑色岩製である。

86、88、89は泥質片岩製であり、86、88は先端を男根状に整形している。87は緑色片岩製、90は砂質片岩製、91、92、94は藍閃片岩製、93は点紋緑色片岩製、95は緑色片岩製である。96~99は砂岩製である。

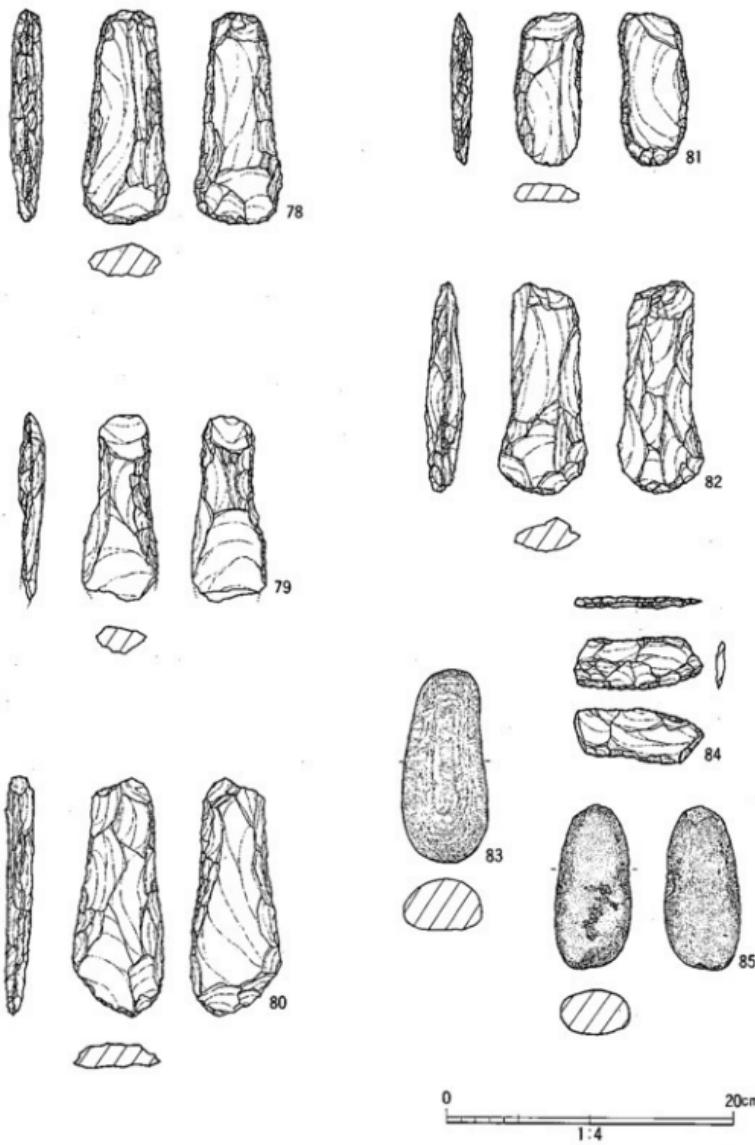
石鐵148は石英製であり、他はすべてサヌカイト製である。先行剥離面および主要剥離面を器面に大きく残存させるものが見られる。



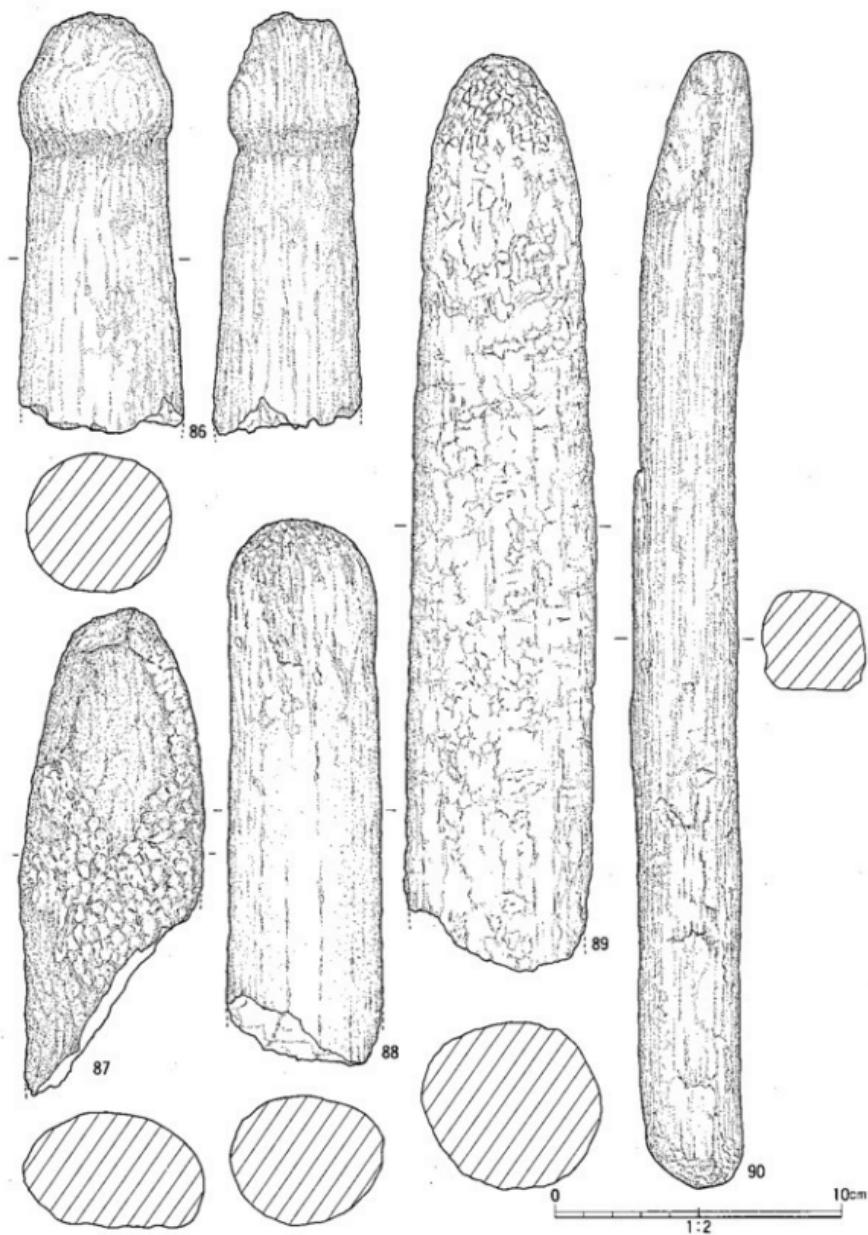
第43図 自然落込SX03出土遺物



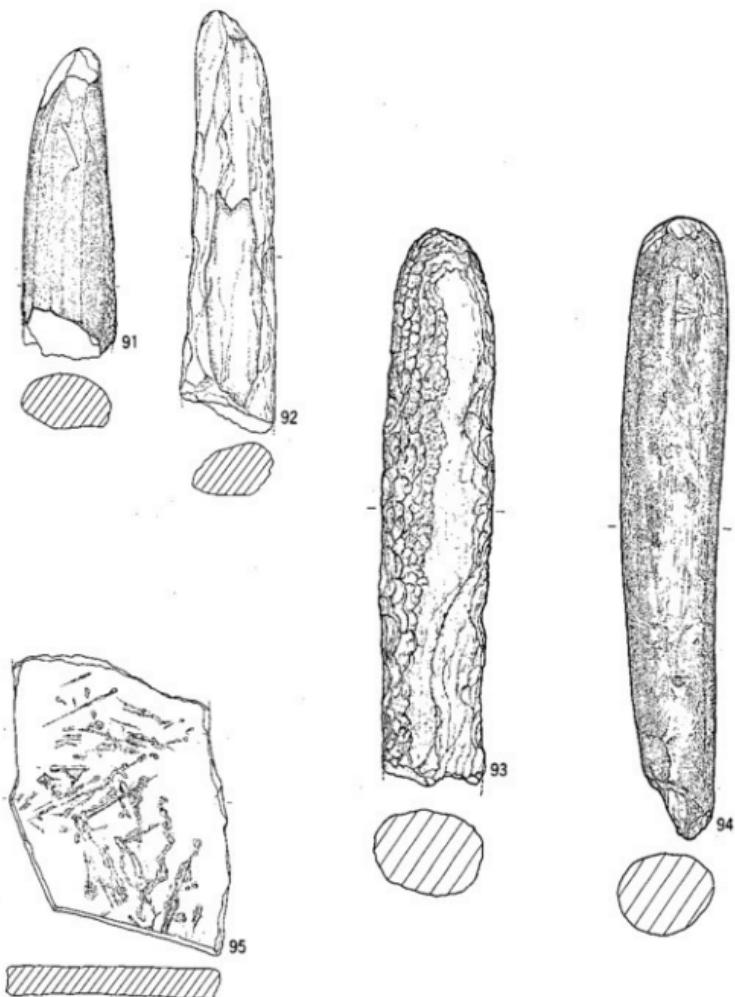
第44図 自然落込SX03出土遺物



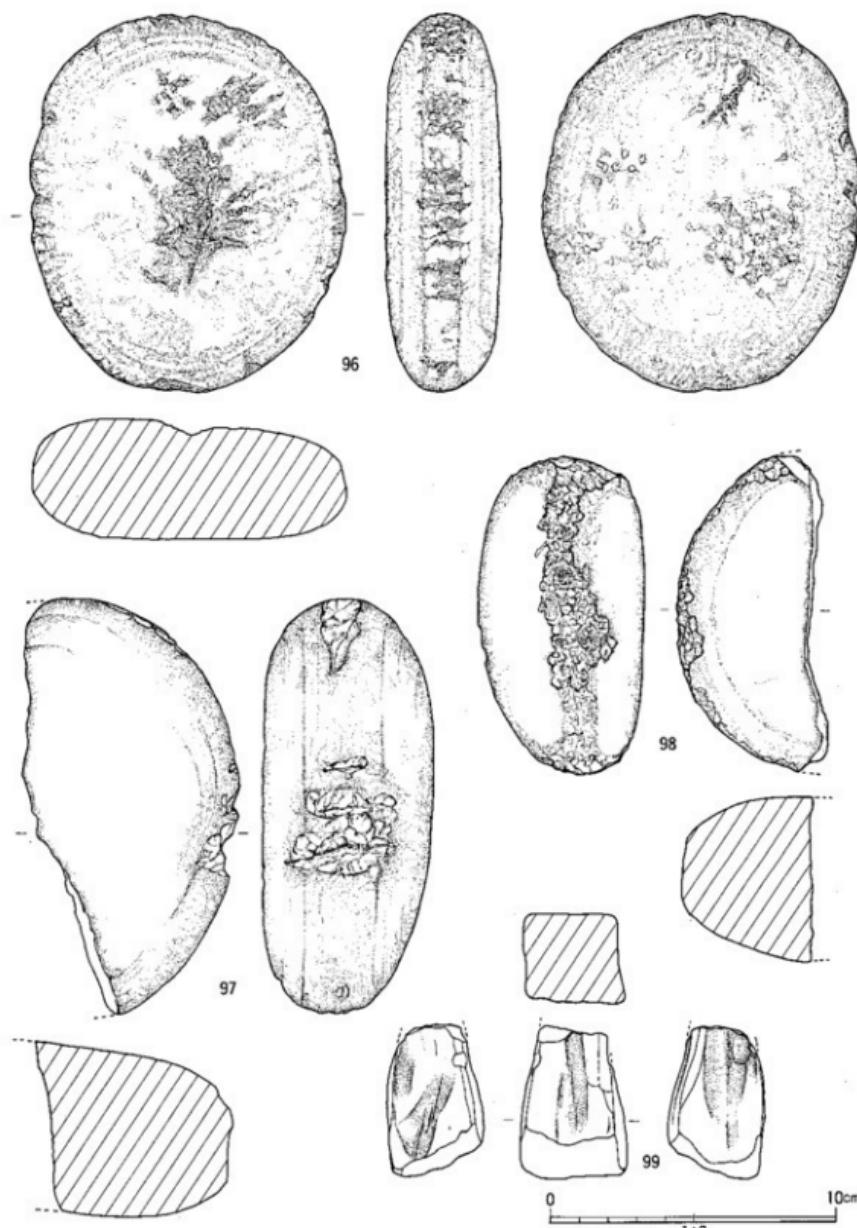
第45図 自然落込SX03出土遺物



第46図 自然落達SX03出土遺物



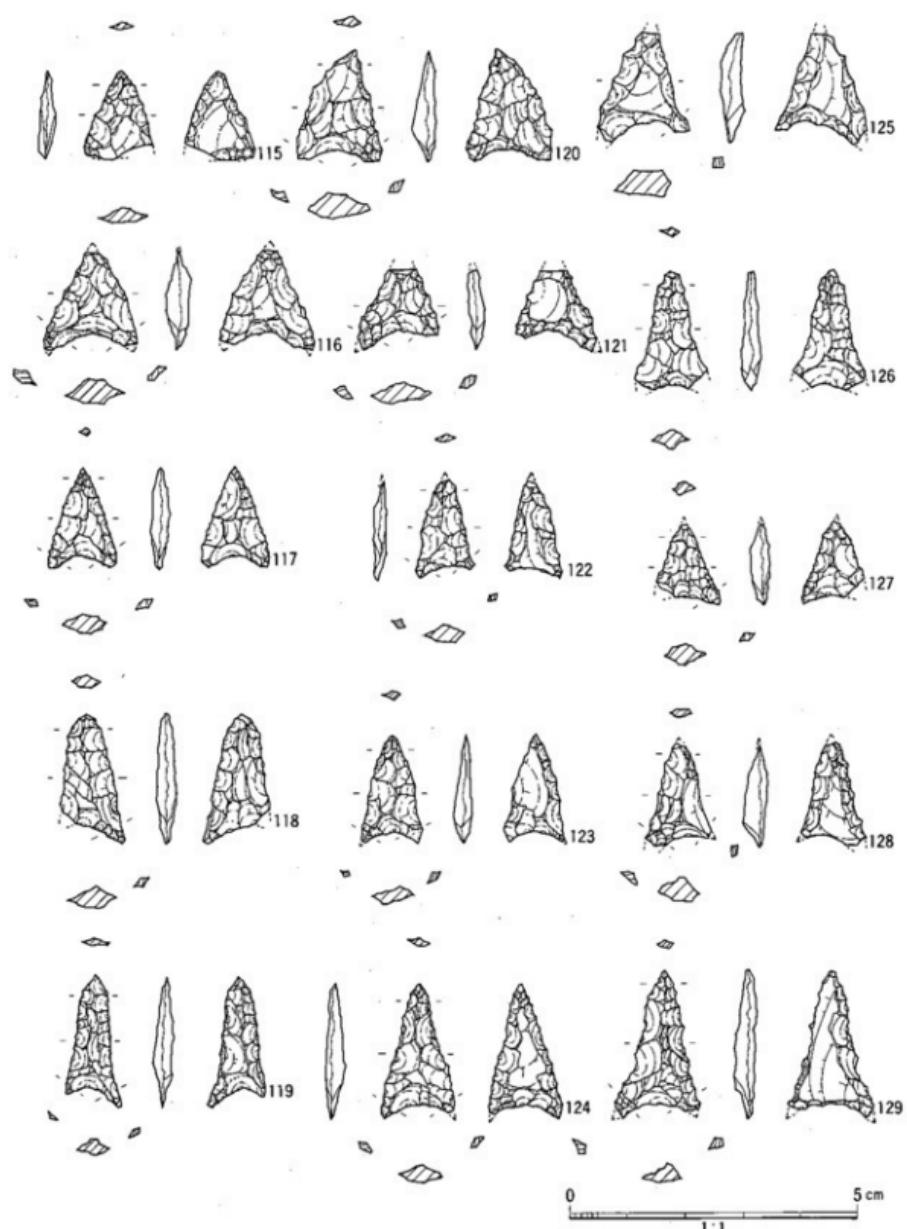
第47図 自然落込SX03出土遺物



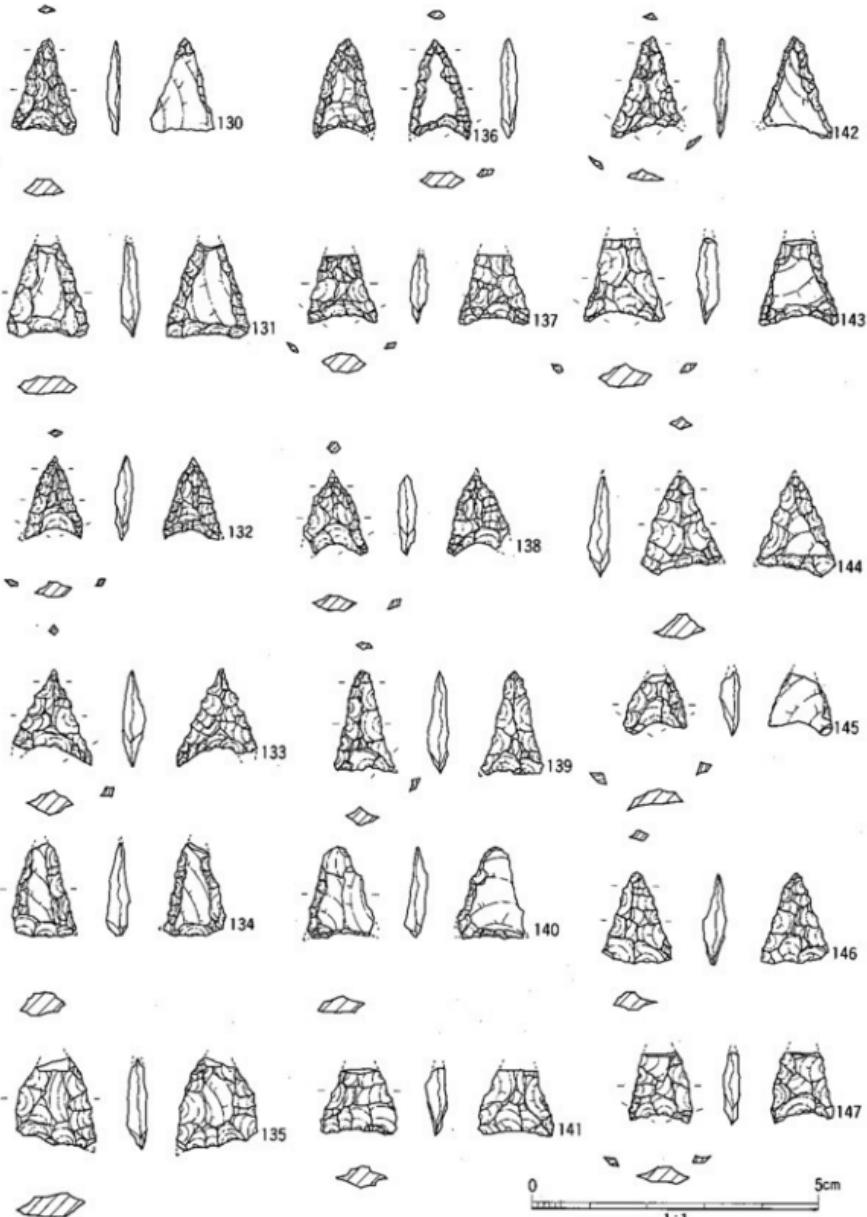
第48圖 自然落達SX03出土遺物



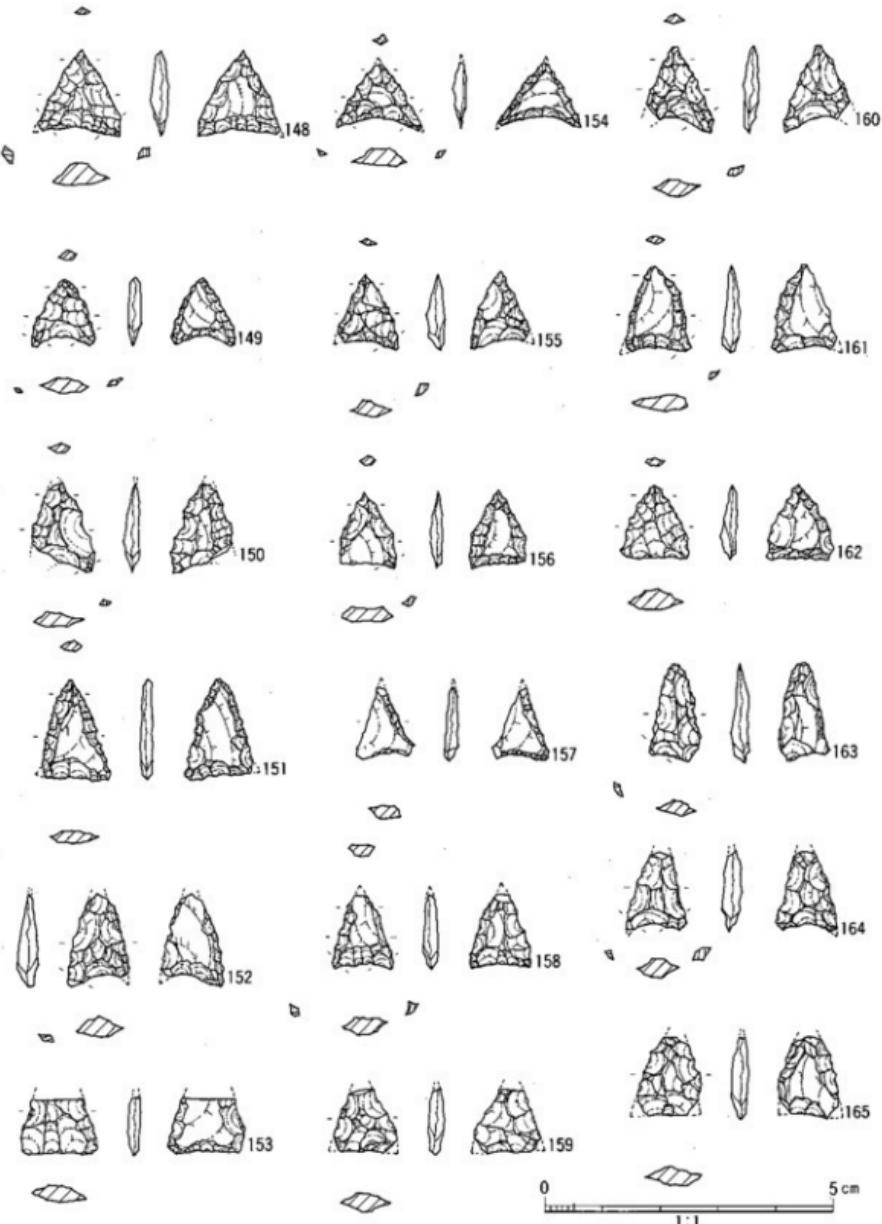
第49図 自然凹地SX02-2(54,55)、自然落込SX03 (100~114) 出土遺物



第50圖 自然落達SX03出土遺物



第51図 自然落込SX03出土遺物



第52圖 自然落達SX03出土遺物

IV 結 語

(1) 遺跡の性格について

1924年の遺跡発見以来、三谷遺跡は眉山北麓に所在する諸集落遺跡の中でも時期的には古相を示し、吉野川下流域における集落遺跡の萌芽的な存在として評価されてきた経緯がある。しかしながら、包含層出土遺物あるいは遺構の時期的な多様性は、遺跡の性格として、単に從来の評価にとどまらず、多時期にわたる集落遺跡としての認識を必要としている。ただ極めて残念なことに、包含層出土遺物ならびに遺構検出は良好な状況ではなく、低湿地帯に位置する遺跡でありながら後世の削平を著しく受けている。

幸運なことは、縄文時代晩期～弥生時代前期の生活面は削平を免れており、特に当時の生活領域において低位地にあたる後背湿地帯は完全に包含層により保護されており、当時の様相を的確に把握する資料を包含するものとして貴重である。また偶然にも今回の調査地の大部分が後背湿地に位置していたため、黒色粘土質シルトが広い範囲で堆積することが間層的な役割を果たしたこと、また、黒色粘土質シルトの堆積が見られない場合にも、下層が細～粗砂層であるため当時の生活面の認定が容易とされた。

問題は微高地上での生活面の検出である。同質同色土が堆積する過程の「ある一時期」に生活面が存在することは確実であるが、生活面上に間層となる異質層の堆積が見られず、同一層が連続的に堆積することから、生活面の認定は極めて困難な状況である。このため、厳密な層位に基づく調査は行い難く、任意面での調査に成らざるを得ない状況がある。今回の調査では、土壤SK01の検出がこれに該当する。この堆積土は吉野川下流域右岸に所在する諸遺跡に普遍的に見られるが、今後はこの層に対して厳密な調査を行わなければならないであろう。

(2) 堀立柱建物群跡

堀立柱建物は総8棟確認している。SB01とSB02～08は柱穴規模、掘形埋土から時期を異にするものと考えられる。SB01についてはTK209型式の年代観が与えられるが、SB02～08については柱穴出土遺物に時期判別されるものが見当たらず年代観については不明である。ただ周囲で多数確認されているピットと比較して埋土・形状・規模が類似することから、瓦器を伴う時期が考えられる。これらの堀立柱建物はいずれも正方位指向であるが建築に関する要因は異なるものに求められよう。

調査地II区には正方位に直行する南への自然落込が見られる。この自然落込は旧河道部に水成層が堆積したものであるが、水成層の供給が充分ではなく自然落込として存在しているものである。堀立柱建物SB01の棟方位やSB01の付属遺構と考えられる溝SD01・02の配置は自然落込に平行もしくは直行させているものであり、これらは微地形に左右される方位であった可能

性が考えられる。

では時期的に後出するであろうと考えられる掘立柱建物SB02～08については、それらの年代観を瓦器を伴う時期（12世紀中葉）と仮定した場合、掘立柱建物SB01の存続時期との間に約550年もの年代差が認められる。その間微地形が変化せず存続していたとは考え難く、自然落込部への堆積活動が進み、土地の平坦化が促進されたであるとの考えが妥当であり、そこには微地形に則する土地利用とは異なる集落の造営が考えられる。

文化6年（1804）に描かれた「名東郡佐古村藏本村分間絵図」には、これらの建物群と同方向での地割が示されていることから、当代における地割が継承されているものと考えられる。ただし条里地割の諸問題を考えるには、数多くの発掘調査を通じて得られる情報を厳密に分析し、当時の地形を復原する作業が必要である。

（3）縄文時代晚期突帯文土器の終焉

突帯文土器は口縁部片が大部分であり、肩部まで復原されるものは少量である。そのため全体的なプロポーションについては明確にし難い。口縁部について言えば、たとえば外反するとか、直立するなどの形態、口縁部突帯の断面形、刻目の状況などが分類の属性対象となることは十分考えられることであるが、これらの属性が必ずしも分類上有効な意味を持ち得るかということに対し積極的に賛成しきれない二つの状況が資料個体に認められる。

一つに破片の一部位をもって、その個体を代表とすると考えることには危険が多い。比較的残存状況の良好な資料観察において、部位が異なれば必ずしも同じ状態を示さないということ。二つに例えば口縁部突帯の断面形という属性について検討する時、三角形、台形、半円形などの分類名称が想定されるが、これらの形状を明確に定義し、個体資料が表現する形状を定義に従い厳密に分類することは困難が伴う。すなわち個体資料の形状が分類名称に単純に該当しないものがあり、通常的な分類項目では対応できない。さらに形状の分類基準が曖昧になれば観察者の主觀が入り込む余地があり、少なくとも客観的分析の精緻性に欠ける。これは口縁部突帯の刻目の形状あるいは刻み方についても同様の問題を生ずる。

しかしながら他地域における突帯文土器の分析上、このような属性が型式設定に至る明解な見解を導く上で必要な分析であり得るということは存在するが、少なくとも三谷遺跡の突帯文土器に関しては、口縁部の諸属性は分析上、必ずしもすべてが有効ではないと考えられる。すなわち三谷遺跡の突帯文土器については、口縁部の形状、口縁部突帯あるいは刻目の形状は、製作過程における製作者の意識に比較的関係ないものとして理解されるべきものではないだろうか。しかし口縁部片に分析上有効な属性が全く求められないわけではなく、口唇部の刻目の有無と口縁部突帯の位置については、最も客観的な立場で議論ができる可能性を含んでいるものと考えられる。

	刻目有無	①	②	③	④	⑤	刻目有無	①	②	③	④	⑤
自然凹地SX01% (個体数)	無 45.5 (25/55)	3.6 (2/55)	32.8 (18/55)	7.3 (4/55)	1.8 (1/55)	0	有 54.5 (30/55)	5.5 (3/55)	23.6 (13/55)	18.2 (10/55)	7.2 (4/55)	0
自然凹地SX02-10% (個体数)	無 22.2 (12/54)	3.7 (2/54)	11.1 (6/54)	7.4 (4/54)	0	0	有 77.8 (42/54)	0	33.3 (18/54)	27.8 (15/54)	16.7 (9/54)	0
自然凹地SX02-2% (個体数)	無 22.4 (54/241)	2.9 (7/241)	8.2 (20/241)	9.4 (23/241)	1.5 (4/241)	0.4 (1/241)	有 77.6 (187/241)	0.4 (1/241)	20.7 (50/241)	45.7 (110/241)	10.8 (26/241)	0
自然落込SX03% (個体数)	無 15.7 (50/319)	0.3 (1/319)	8.2 (26/319)	6.0 (19/319)	1.2 (4/319)	0	有 84.3 (269/319)	1.6 (5/319)	23.5 (75/319)	40.4 (129/319)	17.9 (57/319)	0.9 (3/319)
第3層	無 9.2 (19/206)	0.9 (2/206)	6.3 (13/206)	2.0 (4/206)	0	0	有 90.8 (187/206)	0.9 (2/206)	22.8 (47/206)	39.3 (81/206)	23.9 (49/206)	3.9 (8/206)

(①=~9mm ②=10~14mm ③=15~19mm ④=20~24mm ⑤=25mm~)

第1表 口唇部刻目の有無と突帯の位置

第1表は自然凹地および自然落込さらに第3層出土資料の口唇部の刻目の有無と口縁部の突帯の位置を示したものである。口縁部突帯の位置は5mmごとに分類しており、口唇部中央部から突帯中央部までの直線距離を計測したものである。

まず口唇部刻目の突帯の有無についてであるが、自然凹地SX01では口唇部の刻目の有無の比率が無：有=45.5：54.5で刻目を持つものが過半数を示すもの大きな差は見られない。ところが自然凹地SX02-1・SX02-2では刻目を持つものが77%を示し、自然落込SX03では84%、さらに第3層では90%という高い数値を示す。層位学的な攪拌が認められない状況において、刻目を施す傾向は新相として把握することが可能である。

次にこの状況に突帯の位置を付加すれば、自然凹地SX01では口唇部に刻目を持たず、突帯の位置が10~14mmに集中する。ところが自然凹地SX02-1では口唇部に刻目を持つ10~14mmや15~19mmに集中する。さらにSX02-2では15~19mmと、突帯位置が1ランク下降するものが主流となる。自然落込SX03では15~19mmが主流であるが、さらに突帯の位置が20~24mmに低下するものが増加し、第3層ではその現象はさらに進行する。やはり層位学的な考慮においても、突帯位置の下降指向は新相として捉えることができる。

さらに第2表は自然凹地、自然落込資料の器種構成を示したものである。注意すべきは壺と深鉢・壺の比率である。壺については縄文系を若干含むものの遠賀川式系の比率、また深鉢・壺については縄文系深鉢の比率とほぼ考えてよい。壺の比率について見れば、自然凹地SX01では20%、自然凹地SX02-1では18%を占めるが、自然凹地SX02-2の段階では7.6%と急激な低下を示している。また自然凹地SX02-2では深鉢・壺が86.5%と最高値を示し、いずれも自

	深鉢・甕	浅鉢	鉢	壺	高坏
自然凹地SX01(%) (個体数)	69.8 (60/86)	5.8 (5/86)	2.3 (2/86)	20.9 (18/86)	1.2 (1/86)
自然凹地SX02-1(%) (個体数)	80.0 (56/70)	0 (0/70)	1.4 (1/70)	18.6 (13/70)	0 (0/70)
自然凹地SX02-2(%) (個体数)	86.5 (250/289)	4.1 (12/289)	1.0 (3/289)	7.6 (22/289)	0.8 (2/289)
自然落込SX03(%) (個体数)	85.4 (330/386)	4.9 (19/386)	1.5 (6/386)	8.2 (32/386)	0 (0/386)
第3層(%) (個体数)	85.8 (223/260)	1.5 (4/260)	1.2 (3/260)	11.5 (30/260)	0 (0/260)
計	84.2 (919/1091)	3.7 (40/1091)	1.4 (15/1091)	10.5 (115/1091)	0.2 (3/1091)

第2表 器種構成と比率

然凹地SX02-2の段階に変化画期を認めることができる。これは口唇部刻目の有無と突帯の位置の変化画期に一致する。

ところで、縄文晩期～弥生前期の遺跡における器種構成における壺の比率が20%を示すのは板付II式でも古い段階の状況を示すものであり、板付II式の古い段階以降、器種構成における壺の比率が30～40%と高い数値が得られ、壺の比率は増加を示すのが通常変化とする指摘がある^①。しかし三谷遺跡では、壺の比率が低下する一方、深鉢の比率の増加が認められるという先述した変化とは逆転現象を示している。

結論は決して急がないが、このように三谷遺跡における深鉢の口縁部における刻目の施文の流行および口縁部突帯の下降傾向、さらに器種構成における壺と深鉢の比率関係の背景には、遠賀川式を受け入れながらも、その文化性を萌芽・発展させ得なかった地域事情が、前代の土器様相に執着し、遠賀川式系とは異なる亞流式としての突帯文土器を誕生させたとすることは少し言い過ぎであろうか。

註(1) 田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』1994年。

付 編

三谷遺跡出土の初期弥生土器について

木 村 早 苗

は じ め に

徳島県下で弥生時代前期の土器を出土する主要な遺跡は、三谷遺跡の他に、庄遺跡（徳島大学医学部構内）・黒谷川郡頭遺跡などがある。これらのうち三谷遺跡は、弥生土器出現の直前型式である刻目突蒂文土器と共に、前期の弥生土器では最も古い様相を保っていることなどから、徳島における縄文から弥生への移り変わりを考えるうえで非常に重要な遺跡である。本稿では、三谷遺跡から出土した弥生前期初頭の土器の様相について簡単に概観する。

さて、弥生時代前期初頭の土器と一言でいっても、これまで縄文晩期末の土器とされてきた刻目突蒂文が、現在の研究では弥生土器として捉えようとする動きがあり、その結果、縄文時代末期の土器と弥生初頭の土器との分離が困難になってきている。そうした編年研究上の混乱がある中で、三谷遺跡の多種多様な土器の中から、弥生時代前期の土器のみを抽出し論ずることは、私にとって難題である。本来ならば弥生時代前期の土器と限定せずに、三谷遺跡から出土した全ての土器を同一基準で分類し、その様相を明らかにすべきである。しかし、諸般の都合上、本稿では從来“遠賀川式系土器”と呼称されてきたもののみを取り上げることを了承していただきたい。ここで中心的に扱う形式は、如意形口縁をもつ壺形土器と壺形土器とする。

1 壺形土器

壺形土器は、自然凹地SX01・自然凹地SX02-1・自然凹地SX02-2・自然落込SX03・第3層から出土がみられる。ここで各々の出土地点ごとの土器の様相を述べたいところであるが、紙面の都合上、まずすべての出土地点の土器の内容を総合的に概観する。次に、各出土地点ごとに壺形土器の形態や調整などに差異があるかないのか、もし差異が存在するならば、時間的なものなのかどうかを確認し、各出土地点において、時間的な流れが認められるかどうかを見てゆく。

如意形口縁の壺の特徴を部位ごとにみると、口縁端部は面取りするもの・丸くおさめるものがあり、数は後者が多い。口縁端部の刻目はほとんどの土器に確認することができた。刻目の位置は、全面に刻目を入れるもの・下半を意識して刻目を入れるものがあり、比率的には半々である。しかし後で述べるが、この比率は出土地点により微妙に異なる。口縁部の屈曲度合いは全体的に緩やかなもので、明確な稜線をもって屈曲外反するものは少ない。その一方で、緩やかに外反した口縁部が長く伸びて外傾するものが比率的に多いのが、口縁形態の特徴と言え

る。次に胴部形態である。胴部上半部が、直立し立ち上がるものが主流である。また、このタイプ以外に、胴部上半部分が強く外側に張りだすものもある。文様は無文のものが大半で、有文のものは少ない。有文の内容は、横位の沈線文を持つもの・刺突列点文・貼付突帯文などである。横位沈線文の条数は、1条～3条までである。調整の主流はナデ仕上げである。一部に刷毛目、もしくは刷毛目に近く木目がはっきりしない板状工具の使用も認められる。接合は土器の断面観察で確認できたものに関して言えば、幅2～3cm前後の細い粘土帯による外傾接合である。

以上が、各出土地点の総合的な変形土器の様相である。

次に、各出土地点ごとに形態や比率に変化が見られるか検討を行った。違いや変化であると思われる各部位ごとの要素を抽出したものが下の結果である。

	口縁端部の形態	口縁刻目	口縁屈曲部の強さと口縁の長さ
自然凹地SX01	丸いものが主流	下面が主流	屈曲弱い・明瞭な稜線なし
自然凹地SX02-1	〃	〃	〃
自然凹地SX02-2	〃	全面が主流	〃
自然落込SX03	〃	〃	稜線あり出現・口縁が長いもの増加
第3層	丸いものがさらに急増	〃	〃

	胴部形態（胴部の張り）	文様
自然凹地SX01	胴部上半が直立的なもの主流	沈線1条
自然凹地SX02-1	〃	
自然凹地SX02-2	胴部上半が胴部の張りが強いもの出現	貼付突帯文
自然落込SX03	〃 ↓	
第3層	〃 胴部の張りが強いもの増加	沈線3条（沈線条数の増加）・沈線文の増加

各部位において変化が見られる事柄を要素として捉え、項目別、出土地点毎に単純に表わした。

上記の表に挙げた出土地点ごとの違いや変化というものは非常に微妙なものであり、決して大きい変化とはいえない。しかし、胴部の張りが強くなるものが次第に出現・増加すること、口縁屈曲が強くなり稜線を持つものがでてくること、沈線文の条数が次第に増加し、文様に多様性が生まれることなど、新しい要素が自然凹地SX01→第3層にかけて増えてきているように思

える。よって壺形土器の変遷から、自然凹地SX01→自然凹地SX02-1→自然凹地SX02-2→自然落込SX03→第3層という時間的な流れを想定しうる。

2 壺形土器

三谷遺跡から出土する壺には、多くの種類がある。“遠賀川式”と呼称されてきた板付系統の土器、北部九州地域で夜臼式と称される土器と類似したタイプの刻目突帯文系統の土器、そして同じく刻目突帯文の時期に近畿や東部瀬戸内地域を中心として多く見られる深鉢変容形土器、浅鉢変容形土器の4系統の土器である。まず、上記の4系統を主文類として型式分類を行った上で、三谷出土の壺の様相を板付系統の土器中心に概観する(ただし、破片資料が多いため、分類は口縁形態を中心として分類した)。

① 分類 I類を板付式系統、II類を夜臼式系に類似したもの、III類は深鉢変容形、IV類を浅鉢変容形とする。II類は主に、頸部が内傾・直立しながら立ち上がり、口縁部で短く外反するもので、頸部の角度などで細分が可能であるが、ここでは一括する。

Ia類：粘土帶を貼り付けた有段の口縁部を持つもの。Ib類：接合の高低を利用することにより有段部の口縁部を持つもの。Ic類：頸部と口縁部の境に削り出し突帯を持つもの。Id類：沈線により口縁と頸部の境を区画するもの。Ie類：口縁と頸部の境の区画を失ったもの。

② 形態比 まず各出土地点の総括した全体比は、板付系I類と、刻目突帯系としてまとめられるII・III・IV類の合計したものと半々であった。これを各出土地点ごとに見てみると、どの地点でもI類とII～IV類のいずれかは共伴して出土するが、その割合は地点により異なる。自然凹地SX01と自然凹地SX02-1ではI類が多く(7割)、自然凹地SX02-2から第3層にかけてはI類が少ない(4割)という結果になった。

よって前述した壺の変遷から、自然凹地SX01から第3層にかけて次第に新しいタイプのI類が増加すると思われたが、逆に減少する結果となった。

そしてI類内の型式比を見た場合、ほとんどの地点で、口縁部に有段部を持つa類・b類が有段の退化型式である沈線文のd類や、口縁部の境がないe類と共に伴していることが分かった。また、有段部(a+b類)が多い地点では沈線文(d類)が少ないと、逆に有段部が少ない地点には沈線文などが多いなど、有段を持つa・b類と有段部が退化したc類・d類・e類との比率の相關関係を指摘する事が出来ないことも分かった。よって從来の前期の壺の編年の基準になっていた〈有段口縁〉→〈削出突帯文〉→〈沈線〉→〈沈線数増加〉という新旧の流れに合致しない事になり、I類の細かい型式比率において壺で想定された時間的変遷を明確にするにはやや困難であった。そこで次に、壺においては時間的変化が全くないのか視点をかえて再考する。

③ 各型式の地点毎の変化の有無

変化が見られる型式についてIaから順に述べる。まず貼付け有段部をもつIaは自然凹地S

X02-1・自然落込SX03・第3層にあり、自然凹地SX02-1のものは口縁有段部が屈曲せず平坦であった。自然落込SX03のものは有段部が平坦でなく屈曲外反するものになる。第3層では、やや屈曲が強くなり大きくカーブを描いて外反するものが出てくる。次に接合による有段部をもつIbでは自然凹地SX01・自然凹地SX02-1と第3層にあり、あまりはっきりした差異はないが第3層のものの中に口縁有段部が長くなつて大きくL字状に外反するものが見られる。削出突帯のIcは第3層のみに見られ、他の地点では見られない。口縁の境がないIdは自然凹地SX01・自然凹地SX02-1・自然凹地SX02-2と第3層にある。自然凹地SX01では頸部が強く内傾しながら立ち上がり、口縁部の屈曲が明瞭に短く外反するものであった。自然凹地SX02-2では頸部が直立気味に立ち上がり口縁部の屈曲は弱くなる。第3層では沈線以外では頸部と口縁部の境が不明瞭になり、胴部から口縁端部にかけて緩やかに内湾しながら外反するものに変化している。

以上に述べた型式の形態の違いは大変に微妙なものであるが、出土地点により変化があったと考えられはしないであろうか。

④ 文様にみる変化

それでは次に文様に視点を移してみる。三谷の壺に見られる文様には、横位沈線文・重弧文・山形文・木葉文(有軸・無軸)・綾杉文・縦線と横線の組み合わせた沈線文・刺突文・貼付突帯文などがある。全体の中での比率は、横位沈線文が最も多く(4割)、ついで重弧文、貼付突帯文の順が多い。各出土地点ごとの変化の主な特徴を述べると、まず自然落込SX03と第3層では沈線数が増加することが1点目にあげられる。そして貼付突帯文は、自然凹地SX01・自然凹地SX02-1ではみられないが自然凹地SX02-2・自然落込SX03・第3層にはあり、その量は自然凹地SX02-2→SX03→第3層の順にわずかであるが増加している。特に第3層では突帯文と山形文との組み合わせなども見られ、装饰化が進んでいると言える。こうした沈線数の増加や貼付突帯文の出現と増加という動きは、前期末から中期初頭にかけて多くみられる、籠描沈線文や柳描沈線文そして突帯文などを多く用いた装饰化の強い大型の壺へつながって行くものと想像できる。よって文様次元においても、自然凹地SX01から第3層にかけて変化を追うことが出来た。

土器の型式比では一見、古いもの新しいものが共存し、各地点に時間差が存在しないように思える。しかしこうした混在状態、つまり板付系I類と刻目突帯文系的なII類やIII類などの共存、そして有段口縁部を持つ壺と沈線区画の口縁部を持つ壺の共存という様相が、縄文から弥生への過渡期の徳島で存在していた可能性があると考えたい。

板付系的なI類と、刻目突帯文系的な他の型式の同時存在で考えられる根拠に、サイズの違いがあげられる。I類のものには大型品・中型品が多いのに対し、その他の型式は中・小型品が中心となっている。つまり、サイズの違いは機能の違いも考えられる事から、I類とそ

の他のタイプのものは機能上の使い分けがなされていて、相互補完的に同時存在していたことが想像できる。

次いで有段部口縁部と沈線文区画の口縁部を持つ壺の共伴であるが、三谷遺跡内の土壙SK01においても、貼付有段部(I a)と接合の高低を利用する有段口縁(I b)と口縁に2条の沈線区画を持つ壺(I d)が同時に出土していると聞いており、遺構内資料においても有段部と沈線の同時存在が裏付けられている。よって、他地域の事例のようにまず有段部口縁をもつ壺が入ってきてから沈線に変わったのではなく、すでに口縁部区画が沈線化された新しい壺の情報と、有段部の口縁を持つ古いタイプの壺の情報が、さほど時間差をもたずに三谷遺跡に入ってきた可能性もある。そして、三谷遺跡は古いものと新しいものを同時に受け入れ、各々を微妙に変化させていった段階の遺跡と思われる。

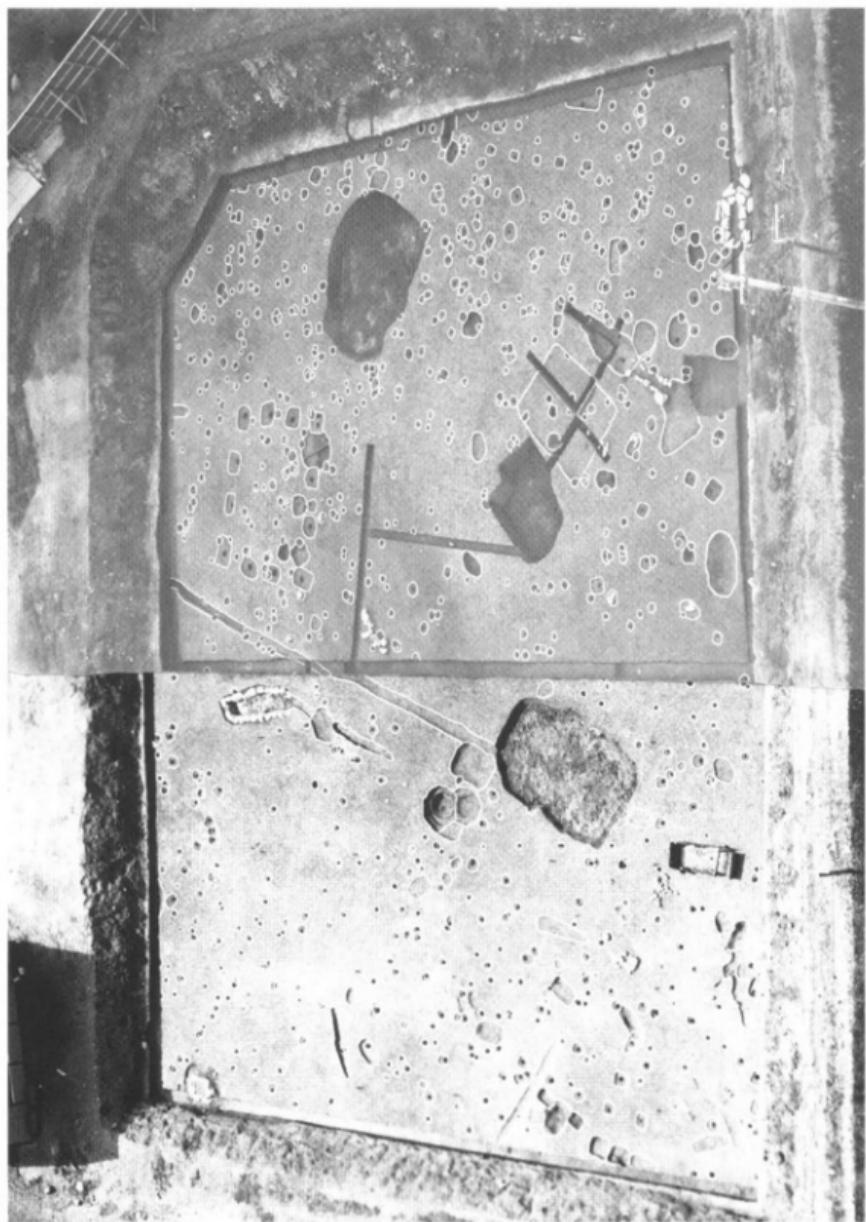
ま と め

三谷遺跡出土の如意形口縁の變形土器と、壺形土器の一部の様相を概観してきた。甕と壺の両者から分かったことは、時期を区分するほどのものではないが、自然凹地SX01から、自然凹地SX02-1、自然落込SX03、そして第3層の順に土器が新しくなってゆくことが想定できたことである。また壺形土器については、従来の他地域の編年基準にややあてはまらないような出土状態を確認し、これらの特異な出土状態から、考えられる幾つかの仮説を述べた。しかしながら、はじめにでも述べたように、今回取り上げなかった他の器種についても個々に検討し、かつ総合的な様相を明らかにする必要がある。本稿の内容はあくまでも三谷遺跡のごく一部分を私なり考えてみたものであり、そのため三谷遺跡の本来のあり方を歪めてしまった危険性も孕んでいる。よって、遺跡全体の総合的な研究は今後求められる重要な課題であると思われ、それにより三谷遺跡ばかりでなく、東部瀬戸内地域の縄文から弥生への移り変わりの様相も明らかになるであろう。

本稿を作成するにあたり、多くの方々にお世話になりました。三谷遺跡の資料を1年半かけて時間のある間に実見させて下さり、また今回ここに執筆する機会も与えてくださった徳島市教育委員会の勝浦康守氏に厚くお礼申し上げます。また土器について様々なご教示してくださった“土器持ち寄り会”的皆様、徳島県埋蔵文化財センターの皆様に心から感謝申し上げます。

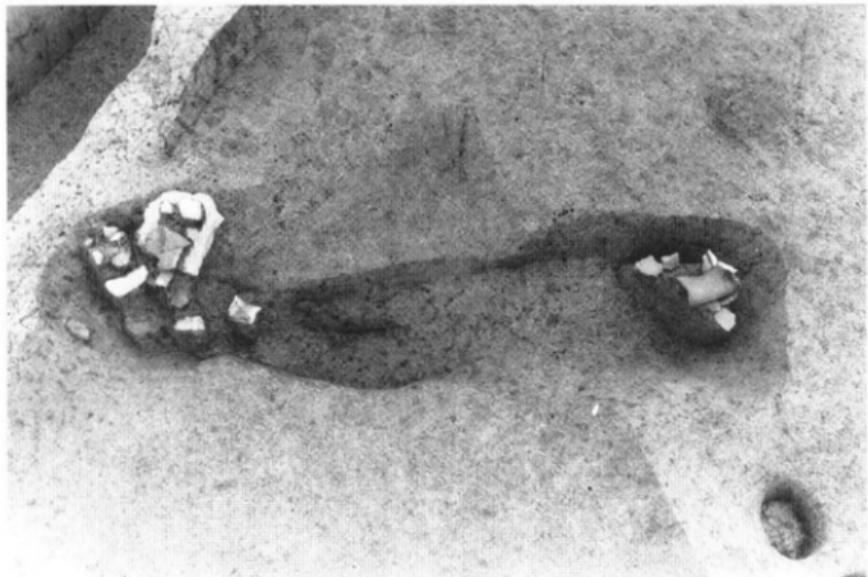
〈写 真 図 版〉

図版 I
北西より



調査地 I 区検出置構（第3層上面＝第1遺構面）

図版2



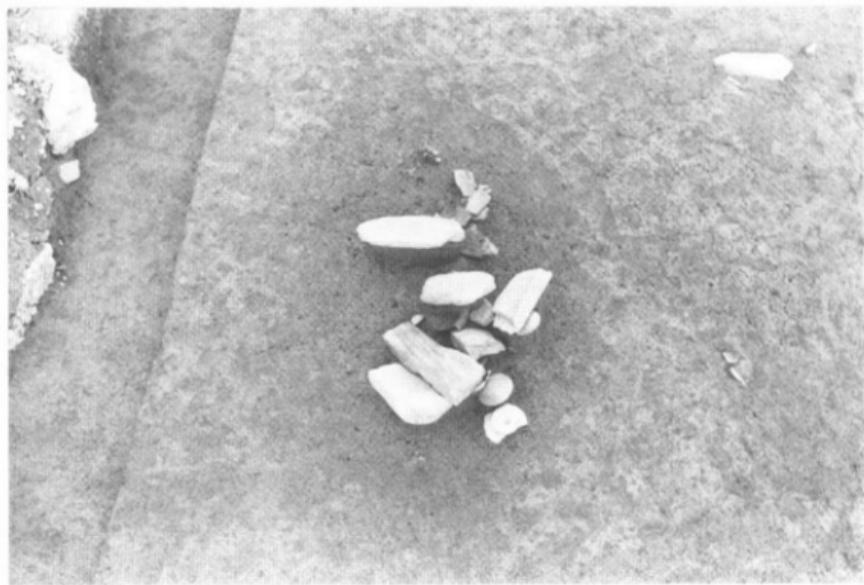
土壤SK01土器検出状況

西より



土壤SK12土器検出状況

西より



土壤SK09検出状況

南西より



土壤SK09土器検出状況

南東より

図版 4



土壤SK10検出状況

北より



土壤SK10土器検出状況

北西より



掘立柱建物SB01

北西より



掘立柱建物SB04

南より

図版 6



掘立柱建物SB03

東より



掘立柱建物SB05

東より



自然凹地SX02-1貝塚検出状況

南東より



自然凹地SX02-1土器検出状況

南東より

図版 8



自然凹地SX02-1 牙製垂飾検出状況

南より



自然凹地SX02-1 動物遺体検出状況

東より



自然凹地SX02-2

東より



自然凹地SX02-2 貝塚検出状況

南より

図版10



自然凹地SX02-2貝塚断ち割り

南西より



自然凹地SX02-2貝層断面

南より



自然凹地SX02-2 土器検出状況

南より



自然凹地SX02-2 土器検出状況

南東より

図版12



自然凹地SX02-2 土器検出状況

西より



自然凹地SX02-2 動物遺体検出状況

東より



自然凹地SX02-2 動物遺体検出状況

南より



自然凹地SX02-2 動物遺体検出状況

東より

図版14



自然落込SX03貝塚検出状況

東より



自然落込SX03貝層断面

南より



自然落込SX03動物遺体検出状況

西より



自然落込SX03動物遺体検出状況

南西より

図版16



自然落込SX03土器検出状況

南より



自然落込SX03骨角器検出状況

南東より



調査地II区検出遺構（第3層上面＝第1遺構面）

西より



調査地II区振文鏡検出状況（第2層出土）

北より

図版18



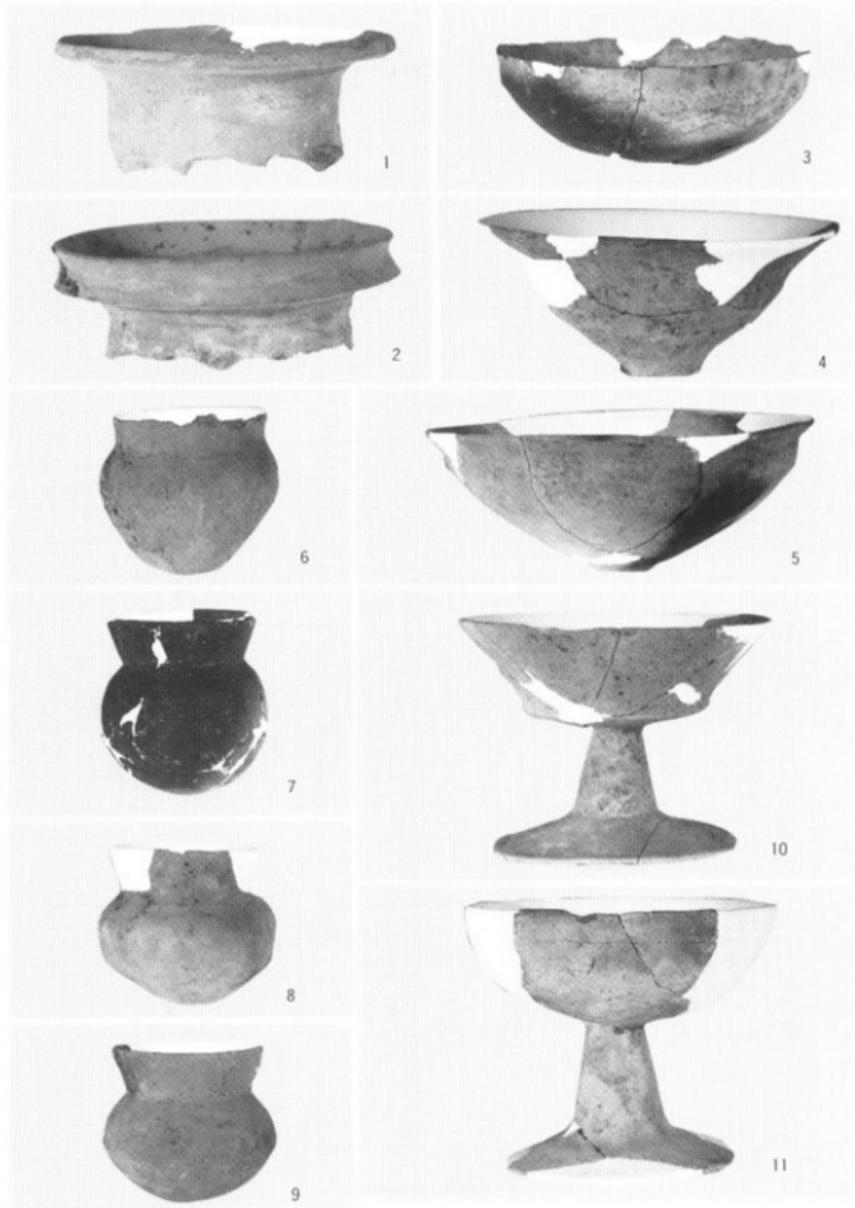
調査地II区旧河道検出状況（第5層上面）

北より



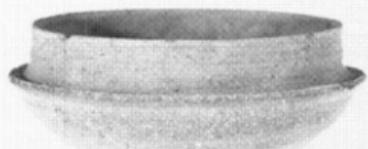
調査地II区旧河道検出状況（第5層上面）

北西より



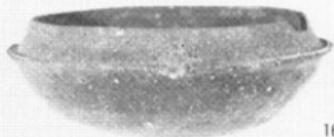
第2层出土遗物

図版20



1

12



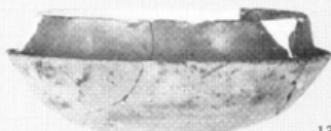
16



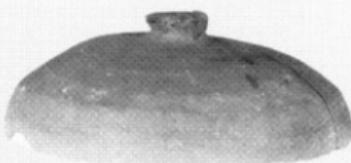
17



22



13

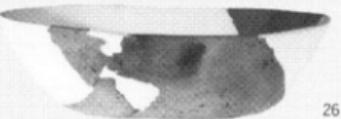


24



1

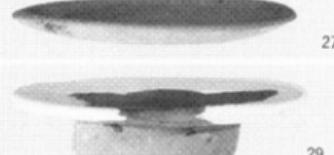
15



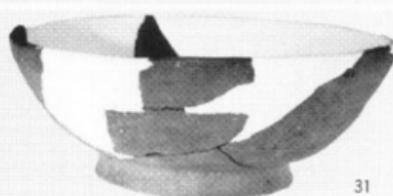
26



27

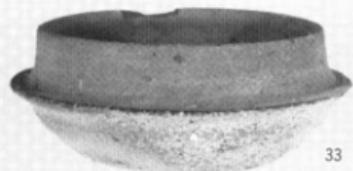


29

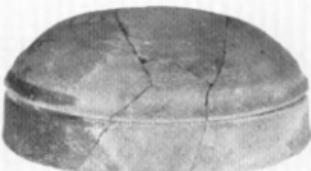


31

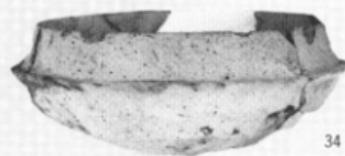
第2層出土遺物



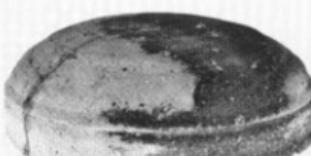
33



41



34



42

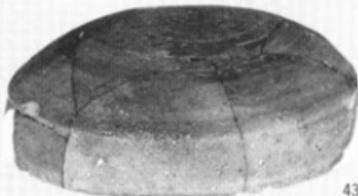


1

37



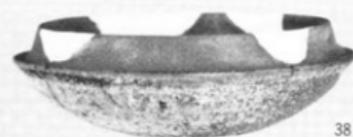
43



44



45



38



47



39

第2層出土遺物